

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 岩井幸雄

氏は岐阜縣稻葉郡更木村の人にして大正五年三月三十日生れ、父を周二と云ひ母は既に歿し未だ獨身であつた。性温良にして氣概に富み母亡き後は特に父に孝行を盡し弟妹を勞はり渡滿後度々の來信にも孝悌の情切なるものありて讀む人の肺肝を衝き涙を誘はしむる風情があつた。昭和二年三月更木小學校尋常科を卒業し昭和四年三月縣立第一工業學校講習生を卒業同年五月以來二ヶ年京都織物工場に於て修業し後岐阜縣輸出入絹織物工業組合の検査員となり入營時に及んだ。昭和十二年三月關東軍獨立守備歩兵第六大隊に入營し日夜車務に精勵し選ばれて通信兵となり又上等兵候補者を命ぜられた。所屬隊は同年四月第一期討伐開始以來桓仁縣第七區煙筒山附近の戰闘を初めとし交戰數回に及んだ。氏は興京縣興京に於て通信修行中であつたが南滿抗日聯合軍第一師長程斌隸下の共匪を掃蕩の爲原隊に歸還を命ぜられ同年八月初旬中隊大垣小隊根本分隊に屬し輕機關銃手として朝陽溝附近の戰闘に参加するに至つた。氏は名射手にして分隊隨一の射撃技能を有つて居つたのである。當時敵は清原縣南部に於ては我が布施部隊の一部と對峙し王仁齊の指揮する集團は他方面の共匪と合流して興京・迫化縣境に沿ひ南下し興京縣第二區紅廟子西方約八杆の地點に侵入し此地點を根據地となし爾後の赤化已作を企圖したのである。而して八月六日には其主力を以て東昌臺を夜襲し同地の治安隊及警察隊と交戦し鐵條網の破壤口より部落内に侵入し治安隊に大打撃を與へ糧食其他の物資を掠奪し農民四十餘名を拉致し根據地に逃走した。一方松原隊は此敵を捕捉撃滅すべき命を受け八月六日早朝雨を冒して行動を起し敵の退路を求めて追跡する事二日餘に亘つた。氏は克く困苦缺乏に堪え勇躍路上斥候として部隊の前方を前進しありしが進路の右側方標高八百五十六米高地に敵を發見し所屬分隊は同高地東南稜線敵前百二十米に展開し當面の敵を攻撃する事になつた。氏は率先急峻なる稜線を樂登し



敵に近接せしに同稜線の西方稜線には輕機を有する約四十名の敵ありしも。幸に我を發見せざるものゝ如く尙も前進して高地の約三分の二に達せる時俄然正面の敵と激戦を交へ遂に之を撃攘して該高地を占領したが前記西方稜線の敵輕機及小銃部隊は熾烈なる猛火を我分隊に集中した。忽ち岡本射手負傷續いて根本分隊長も負傷するに至つた。此時氏は分隊の左翼に在りて西方稜線の敵を狙撃中であつたが分隊長より岡本射手の看護を命ぜられしを以て隣接分隊に其旨通報して戰闘繼續を依頼し直に看護に赴き處置終るや分隊員を激勵し敵彈雨飛の中を率先勇猛果敢に攻撃前進を起した。之が爲分隊員の志氣益々振ひ遂に前方稜線の敵を撃攘して同地を確實に占領するを得た。されど其瞬間至近より飛來せる兇彈の爲右側頭部並に左肩胛部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。當時我が軍は敵の高地を包圍し猛攻したのであるが根本分隊の向へる稜線の奪取如何は全局勝敗に至大なる關係を有する要點であつた。されば敵亦戰闘の經過に連れ兵力を増加し死力を盡して防戦したのであつた。されど氏の絶大なる攻撃精神は遂に全般戰勝の途を開きしもので其功績たるや拔群なる攻撃精神は遂に全般戰勝の途を開きしもので其功績たるや拔群天晴軍人の勳鑑となすに足るものであつた。あゝ皇軍主力が北支中支に奮闘力戰の間比較的靜穩なる滿洲警備に當り極東平和の建設に尊き犠牲となりしは聊か物足らぬ感を起す者なきを保し難いが是れ心なき觀察と云ふべく氏の尊き犠牲ありてこそ滿洲の靜穩が保障され皇軍主力が意を安んじて四百餘洲の支那全土に作戦し得たので其功績たるや戰場の如何に依り毫末も徑庭ある譯ではない。今や護國の神と仰がれ其英靈は皇國を護り又氏が生前心にかけてし父又弟妹等の多幸の爲に

必ずや照々たる加護を垂れ其芳名は皇國戰史に牢記せらるゝであらう。
氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 岩本 信 男

氏は和歌山縣和歌山市和歌浦の人にして父を定捕母をのぶと云ひ大正五年一月二十日の生れで未だ獨身であつた。昭和三年三月和歌浦小學校を卒業爾後漁業に従事し同十二年一月十日徴兵として歩兵第五十一聯隊機關銃隊に入營した。同年七月支那事變勃發するや龜井部隊第一機關銃隊に編入替となり渡滿し七月七日より十一日に至る間竹蓮附近の警備に任じた。この間數回の小討伐に参加した危険を冒して晝夜の別なく敵地内を行動し時にまた衛兵、巡察等至嚴なる警戒勤務に服した。七月二十日より二十二日に至る間棒子溝附近の討伐には第一分隊銃馬隊兵として参加し或は峻峻なる山地を或は濕潤なる地帯を豪雨を衝き泥濘を冒して前進し克く困苦缺乏に耐へ馬匹を愛護しまた警戒勤務の歩哨に或は宿營地の諸勤務に服して何れも精勵熱心その任務を完ふした。八月九日地局子附近の戰闘に方りては指揮軍傳令として雨中泥濘にして行動頗る困難なるにも拘らず終始銳意連絡に努め部隊の行動に遺憾なからしめた。又八月十日より十六日に至る間に於ける湯原縣内の討伐及び「レイヘ」附近の戰闘には銃馬隊兵として嶮山濕地の難路を越え巧に馬を御して何等事故なく目的地に到達し十一日「レイヘ」西方高地附近の交戦に於ては行軍困難なる濕地帯を側方及び後方を警戒しつゝ前進した戰闘間馬匹を安全なる位置に誘導し且つ警戒に任じ分隊機關銃の威力發揚に貢献する所多大であつた。次いで九月七日五番彈藥手として惡路を冒し共和村附近の討伐に参加し元氣旺盛能くその任務に盡瘁し顯著なる功績があつた。

十一月四日氏は龜井部隊の命令に基き堂垂村討伐隊機關銃分隊第六番銃手として先頭の自動貨車に乗車し多數の輸送車輛を掩護しつゝ前進中午後二時三十分頃地局子北方約千米附近に達せし際不意に前方及び兩側方より敵の猛射を受け我が部隊が直にこれに應戦するや氏また勇躍奮戦を逸せず南方の敵に當り大いにこれを惱ました。その後敵の十字火のため戦友相次いで斃るゝや氏は鮮血を浴びつゝ毅然として數銃手の職務を兼ね行ひ敵の主力に對し猛撃を加へこれに多大の損害を與へた。然かし此時不幸にも敵の一彈氏の頭部に命中し氏は氣息奄々たる中にかすかに「天皇陛下萬歳」の聲を残して共和村々公署附近に於て壯烈なる戦死を遂げた。



氏や義勇奉公の念に燃え一死を鴻毛の輕きに見斃れて而して後已か誠に皇國軍人の勳鑑と謂ふべし。其の沈着果敢勇戰奮闘精神たるの武勳は英名と共に永く青史の上に輝き五族の齊しく敬仰する所とならん。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 岩 瀬 巖

氏は神奈川縣足柄下郡府中村の人にして大正四年十二月十五日生れで亡父を縫之助亡母をキヨと云ひ養母をアイと稱し

未だ獨身であつた。醫里の小學校を経て昭和十年三月藤澤中學校を卒業し直に鐵道省東京鐵道局に雇員として就職した。資性誠實にして不屈不撓の氣概を持って居た。昭和十二年一月戰車歩兵第〇聯隊に入營し支那事變の爲今田部隊に編入せられ勇躍出征した。



八月十八日以來九月十一日迄は南苑附近に於て警備勤務及戰闘準備作業に關し日夜軍務に精勵し九月十二日乃至十四日の永定河附近の戰闘に於ては十四日永定河を渡河し敵を追撃するに

方り第一小隊長車前方銃手兼無線通信手として參加し巧に前方銃を操作して退却中の敵を射殺し追撃の威力を發揚した。九月十五日乃至十七日の拒馬河畔揚家屯附近の戰闘に於ては依然前任務を以て揚家屯附近拒馬河西岸に陣地を占領せる敵に對し正確なる射撃を以て之を制壓撲滅し以て友軍歩兵の渡河を容易ならしめた。九月十八日以降十一月二日迄は中隊段列長瀧澤准尉の指揮下に在りて平漢線西側地區の戰闘大冊河敵泉附近の戰闘保定附近の會戰保定集結間に於ける追撃準備滄州河渡河準備同川附近の戰闘石家莊順德沙河鎮臨洛

關附近の戰闘磁縣附近の警備に於て補給其他の勤務に服し熱誠努力克く中隊戦力の培養に貢獻する所甚だ大であつた。十一月三日より同月五日に亘る彰德附近の戰闘に於ては第一小隊長車銃手として參加した。當面の敵は萬福麟軍を主體とする有力なる部隊にして漳河の線に頑強に蟄居して居た。我が軍は此敵を撃破して彰德一帯の地區を占領するに決し十月十八日以來磁縣に集結し氏の所屬隊は車輛の整備に任じ十一月二日磁縣を出發前線に出勤し爾後漳河鐵道通過に際しては敵の空襲を受け難路を克服しつゝ同三日夕中隊は彰德西方七軒の福家店に達し敵を指揮の間に望み終夜熾烈なる銃砲聲を聞きつゝ至嚴なる警戒裡に一夜を明かし翌四日中隊は右第一線たりし松本部隊に協力を命ぜられ午前六時彰德西方約六軒の西八里庄に向ひ薄霧の平原を霧進した。巧に遮截せる敵は發見する證もなく戰場寂として音もなかつた。午前七時過ぎ中隊は西八里庄部落に接近するや俄然敵の銃砲彈の急襲射撃を受けた。中隊は直に戰闘隊形に移り圍壁に據る敵の銃眼及敵の抵抗據點たる家屋等に火力を集中し部落東側附近より敵を制壓した。氏の正確なる射撃は適切有効にして部落内には煙塵低迷し交戰約一時間敵は全く沈黙退却の已むなきに至つた。中隊は更に部落西側に移動し集結したが此頃より豊度附近より盛なる敵迫撃砲の砲撃を受けた。時に午前八時十五分頃である。老庄豊度附近には相當有力な敵が居たらしく老庄方面では友軍歩兵の攻撃が開始されてか彼我の銃砲聲盛であつた。中隊は獨力豊度の敵を攻撃すべく午前八時三十分攻撃前進に移つた。即ち老庄豊度の中間地區から豊度西側に向ひ前進し部落西側三百米にて戰闘隊形に移り前進を續行したが忽ち敵の小銃機關銃は一齊に中隊目がけて火力を集中した。第一小隊長車は中隊の最右翼から部落南端に進出し敵の退路を遮斷すべく霧進したが圍壁内では右往左往する敵の一集團を發見し氏の前方銃は快速回滑に火焰を吐きつゝ小氣味よく敵に多大なる損害を與へた。部落南側の各銃眼からは此處を必死と此一車に火力を集中して來た。だが我猛火力に壓倒されて家屋内に遁入した。戰車は圍壁を蹂躪して該家屋を猛射する中部落外を南方に潰走する敵を發見したる爲反轉して重機を以て該敵に大打撃を與へ再び圍壁に對する戰闘を續行した。此時敵の機關砲彈は矢繼早に此戰車に集中し五、六發の命中を感じた。依て戰車の移動を行ふたが其間も氏は敵兵制壓の手を弛めなかつた。戰車が前進を開始せる一刹那敵機關砲彈一發は裝甲板と銃眼との間隙部に命中し其破片の侵入に依り遺骸乍ら氏は前額部に一破片は貫通三破片は貫貫し遂に壯烈なる戦死を遂げた。時に午前九時五十分頃である。

嗚呼人生死所得るや難し。然るに氏は聖戰に参加し幾度か精々たる武勳を奏し而かも快速部隊の急先鋒として向ふ處
頭敵を粉碎し皇軍の威武を中外に宣揚し北支戰線の華と散つた處に是れ皇軍戰車隊の誇又一般軍人の龜鑑と謂つべきであ
る。今や氏が颯爽たる雄姿に接すべからずと雖英靈は萬世に生き其芳名は皇軍戰史を飾るであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 井上 宇三郎



氏は靜岡縣庵原郡蒲原町の人にして明治三十四年三月三十一日生
れで父は宇之助母はいねと云ひ妻きさとの間に昭子、佳恵の愛子か
ある。性温良沈毅の士であつた。學歴は郷里の高等小學校を卒業し
て居る。

大正十年十二月一日徴兵として靜岡歩兵聯隊に入營し同月滿洲駐
節部隊に屬し寛城子に到着し爾後日夜軍務に精勵し翌十一年十一月
歸休除隊となつた。其間表彰狀及精勳章各々一回を附與せられ除隊
に際しては善行證書を附與せられた以て氏の性行一般を窺はれやう
と思ふ。

昭和十二年十月十五日靜岡歩兵聯隊に召集され増田部隊に編入され江南戰線に赴いた。爾後昭和十二年十二月十三日廣

徳到着直に兵站警備に就いた。同月十四日小川分隊長に屬し廣徳城東門下土哨に立哨中城壁を乗越え侵入せる正規兵二名
を捕へ之を射殺した。次で同月十八日土屋小隊に屬し建平城の警備に就くや率先城内深く進入して屋内に潜伏せる敗殘兵
二名を刺殺した。尙建平廣徳其他の行軍中歩哨斥候巡察等に服するや豪膽沈着克く上官の命に従ひ困苦缺乏を克服し奮闘
克く其本分を全うした。

昭和十三年一月十日小川分隊長に屬し飛行場の警備に當るや常に哨長の意圖を忖度し熱誠慧敏克く其責務を遂行し殊に
同日午後四時頃偶々敵機八機來襲を發見するや直に之を哨長に報告したが其行動間不幸にして爆彈を投下され後頭部に直
貫爆創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。

之を要するに氏は常に率先躬行危地に飛入り剛勇果敢なる動作に加へて慧眼機宜に適する所置を講じ所屬隊の任務遂行
上貢獻する所大であつた之れが爲所屬隊の志氣益々旺盛にして他兵の龜鑑として愛敬を受けた。

即日歩兵上等兵に進級し勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 井上 豊作

氏は埼玉縣北葛飾郡杉戸町の人にして父を益藏母をきくと稱し大正四年十一月二十日生れで未だ獨身であつた。性質温
厚篤實にして昭和五年三月杉戸尋常高等小學校高等科を卒業し後杉戸青年訓練所に入り勤勉にして模範青年として昭和十
年三月同所を卒業した。

昭和十一年一月現役兵として歩兵第三聯隊に入營機關銃隊に編入せられ同年五月滿洲に派遣せられ北滿の警備に任じ或

は祁寒の候或は酷熱の下共匪討伐に従事し殊に開富裕縣下に又は海倫龍鎮縣下に於ける討伐戰に於ては大なる功績を樹て而して昭和十二年七月支那事變勃發と共に小林部隊に編入せられ勇躍征途に上り七月三十日より八月十六日に至る間は天津附近の掃蕩及輸送業務に服し酷暑の際克く困苦缺乏に堪へ敵情偵察に或は警備に任じ天津の治安維持に貢獻する處大なるものがあつた。爾後承德多倫を経て張北方面に進出此間八月三日より六日に亘り武清附近の掃蕩續いて八月七日より九日に至る間開平附近の掃蕩に於ては五番彈藥手として保安隊の武裝解除に参加した。超えて八月十七日より二十日に亘り外長城線の戰



圃に於ては小隊長石倉中尉の指揮に屬し第一線たる第二分隊五番彈藥手として八月二十日午後一時攻撃を開始し第一線第五中隊に配屬せられ長城線(へ)火點の攻撃に任じた。此時機關銃第二分隊は第五中隊の第一線たる兩小隊の中間地區にありて第一小隊の戰闘に協力し敵彈雨注の間に氏は沈着機敏に恰も分隊長の手足の如く陣地進入に又は陣地變換に或は彈藥補充に任じ分隊をして適切有効なる射撃をなさしめ以て第五中隊の攻撃前進を容易ならしめた。斯くして該中隊は前進を續行し敵前數百米に進出せる時右前方より敵の自動火器による斜射を受け前進意の如くならざるに至りしため直に此敵自動火器に對し猛射を加へて之を制壓し又攻撃目標たる(へ)火點の重火器及び散兵に對しても遺憾なく機關銃の威力を發揚之を制壓せる結果第五中隊は諸隊に先んじ午後七時二十分長城線(へ)火點の突撃に奏効するを得た。同中隊は(へ)火點奪取後氏の分隊は直に之に追及し敗退せる敵及長城南側「トーチカ」の敵を制壓し以て同中隊の(へ)火

點占領を確保せしめた、引續き同中隊第三小隊と共に長城南側「トーチカ」占領のため勇猛果敢に突入し敵を一掃して該「トーチカ」を完全に占領した。時に午後九時頃であつたが同夕刻より降り出した大雨は愈々激しく四圍全く暗澹行動意の如くならなかつた。折しもあれ敗退せる敵の敷設せる集團地雷は一大音響と共に爆發したために氏も全身爆傷を受け張北第一野戰病院に後送せられ手厚き治療看護を受けたが翌二十一日惜くも長城の華と散つた。然かし本戰闘に於て氏の勇敢なる行動により射撃威力を最高度に發揚し以て適時頭敵を制壓し掩護中隊をして諸隊に先んじて敵の第一線を奪取し敵を敗退せしむるに至りたる功績は拔群であり其名は長城戰史に不朽に輝くであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 伊藤利雄

氏は鳥取縣東伯郡瀧手村大字上神の人にして父を平藏母をしのと云ひ大正八年四月二十六日の生れで未だ獨身であつた。昭和九年三月瀧手尋常高等小學校高等科を卒業し續いて由良町育英中學校第二學年に入學し同十二年一月入營のため同校四年にて中途退學した。資性從順裕達にして家庭に於ては父母に孝學校に於ては學業に勵み衆の模範であり又運動特に庭球に於ては最も秀いで十八歳にして在學中現役志願をなし當時の徵兵官より中學卒業後志願すべき旨懇諭せられたが頑として肯んぜず徵兵官も其志を壯として採用せられ昭和十二年一月松江歩兵聯隊に入營第一回特別射撃に於て成績優良の爲中隊長より賞状を受けたが支那事變勃發し爲に福榮部隊に編入せられ八月北支方面の征途に就いた。北支に上陸するや惡路を冒して津浦沿線を前進し早くも王口鎮附近の戰闘に輕機關銃射手として參加し次いで九月三日大遼瀋の攻撃には

敵火の下沈着勇敢に正確なる射撃を以て小隊の攻撃を妨害する敵の輕機を制壓し更に藏莊附近の攻撃に於ては夕刻愈々我小隊が突撃せんとする直前不意に現出敵掩蓋輕機銃現出し爲に小隊の突撃稍困難と見るや氏は敢然敵の側射を意とせず有利なる地點に進出して最も有効に該敵を制壓し以て小隊の突撃發起を誘致し遂に午後六時藏莊占領の因を作つた。續いて九月六日劉莊附近の攻撃に於ても正確なる射撃を以て敵を制壓し小隊の前進を容易にし又九月七日より同十日に亘る馬廠



攻略戰に際しては七日所屬中隊は先づ大次花の敵を攻撃したが其際戰闘地區は至る所泥濘膝を沒し行動頗る困難なりしも氏は勇敢に奮戦能く輕機の威力を發揚したが遂に敵彈のため右中指に貫通銃創を受けた。然し氏は毫も屈せず其任務を達成し後野戰病院に入院したが九月二十六日退院二十九日原隊に復歸し爾後輕機銃彈藥手として十二里莊附近の戰闘黃河涯附近の攻撃に参加し。更に十月十一日より同十六日に亘る平原附近の攻撃に従ひ又十一月十日より十三日に亘る黃河北岸の掃蕩戰には第三小隊長中井少尉の指揮に屬し輕機銃分隊第一彈藥手として雨下する敵火の下に遺憾なく彈藥の補充

充運送を全うし殊に十三日敵を徒駭河左岸地區より撃退し續いて該河橋梁に進出する際は敵の銃砲火は熾烈を極めしも氏は之を冒して勇戦奮闘し遂に敵彈のため左上膊擦過傷左側胸部及椎部貫通銃創を受け野戰病院に收容せられたが遺憾にも十一月二十日晏城に於て落火の最期を遂げた。

氏は此際肅なる誠忠を日耀し其誠として聲もなく唯々熱き涙が滂沱として頬をつたわるとのみであつた。嗚思へば所屬部隊は天津出發以來正に四ヶ月間泥濘と濁流に悩まされ艱難苦闘の限を盡くして津浦線の西線を迂迴大黃河の北岸を目指し疾風迅雷の掃蕩戰を試みたのだ。氏は其間に處し沈着勇敢に萬難を排し危険を冒し一死報國の赤誠に燃えつゝ常に赫々たる武勳を奏したが遂に聖戰の尊き犠牲と化し莞爾として瞑目した。眞に是れ皇軍の精華軍人の龜鑑たるべき者であつた。其軍功や皇軍戰史に牢記せられ其名は千載に芳ばしく其英靈は不朽に生き皇國を護り遺族の多幸を加護するであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 飯田 藤吉

氏は埼玉縣北埼玉郡三田ヶ谷村の出身にして亡父を卯左衛門母をそと云ひ大正八年四月九日を以て生れ未だ獨身であつた。昭和七年三月三田ヶ谷尋常小學校を卒業したる後上京し芝區白金中川書店に勤務し忠實精勵其餘暇讀書に努め大に感ずる處あつて將來身を軍籍に置き國家に盡さんと期し航空兵を志願したが資格上完備せざるところありて已むなく時期を待ち十八歳となるや早速現役を志願し合格した。資性濃厚で義務心強く幼時より操行善良學業優等で小學校在學中賞與を受けた事は屢々であつた。又父母を思ふこと篤く普通のものなれば遊樂に其目を送る年齢を以て中川書店より受くる僅少なる小遣錢を儉約して盆暮れには缺かさず實家に送金し父母を喜ばすを唯一の樂としてゐた此一事を以てしてもその人となりを察するに足る。

昭和十二年一月現役志願として麻布歩兵聯隊に入營間もなく渡滿して北滿の警備に任じ教練に精勵し或は肅正行

軍に参加し滿洲國の治安に従事中昭和十二年七月支那事變の勃發と共に北支方面に出動を命ぜられ八月六日には了戒隊第二小隊第二分隊彈藥手として天津東站附近掃蕩隊長の指揮に屬し東站北方小郭庄公安分局を急襲して隠匿せる小銃彈藥を押收し續いて該地附近便衣隊掃蕩に任じて居た。當時氏は晝となく夜となく危険と勞苦を顧みず分隊長松本上等兵の指揮

下に活動して居たが氏は偶々舉動疑しき支那人三名が一家屋より逸走するを發見し直に之を逮捕せんとした瞬間左前方屋上より狙撃せられ其彈丸は不幸氏の左上部胸廓を貫通したが之と同時に氏の發射した一彈は逃る便衣隊を美事射殺し氏も亦壯烈なる戦死を遂げた。



噫氏は周到なる注意着眼を以て機敏に便衣兵を發見し之を射殺したるも終に尊き犠牲となつた。然かし氏等の掃蕩工作犠牲により天津の安居樂業は招來せられ其功績は偉大である。氏は家にあつては孝子として親に仕へ弱冠にして盡忠報國の念に燃え軍に入りて滿洲に北支に奮闘十九歳を一期として河北の華と散り忠孝兩道を全うし

たものと謂ふべきである。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍工兵上等兵勳八等功七級 家田清一

氏は愛知縣知多郡豐濱町の人にして明治四十三年六月二十一日生れで父を清六母をみよと云ひ妻やすまとの間に清子と云ふ愛子がある。氏は性質温厚で且不屈不撓の性格を兼備して居た。小學校卒業後は父々として漁業に従事し一家の柱石となつて家族を扶養して居つたのである。昭和六年十一月名古屋工兵大隊へ入營し翌年十一月除隊となつたが昭和十二年八月二日召集され大飼部隊に屬し直ちに征途に就いた。斯くて昭和十二年九月十六日朝來長谷川准尉指揮下に七里店附近



の本道上を補修作業に従事した。時は殘暑とも思へぬ酷暑而かも遠路重い生木の丸太の運搬勞苦は一方ではなかつたが氏は黙々として一意任務に邁進したのであつた。午後二時から此小隊は同村南方約八百米本道上の戰車壕に短橋を架設する新任務に就き氏も亦其作業班員となり疲勞の色も見せず精勵し作業を完成した。午後四時頃再び前の道路補修作業の爲復歸したが敵は迫撃砲彈を我が作業隊に集中し危険千萬であつたが氏は從容自若として作業を續行し眼中敵なきが如き概があつた。翌十七日中隊は左側支隊の琉璃河鎮攻撃に伴ひて同河附近本道上の大阻絶の排除作業と耐重橋の架設作業に従事した。就中阻絶工事の排除作業は夜間豪雨の爲泥濘甚しく全身づぶ濡れとなり作業も困難を極めたが氏は毫も屈せず業に先んじ自ら難局に當り克く其任務を遂行した。超えて九月廿九日小隊長長谷川准尉に従ひ保定附近堯城―唐縣道の偵察中午後四時四十分頃唐縣城門外約三十五米に達するや機關銃を有する優勢なる敵は城壁上に據り俄然長谷川偵察隊に向ひ猛射を加へた。當時氏は杉山分隊に屬し先頭車に搭乘して居たが分隊長の號令一下直に右方に散開して之に應戦し凄慘なる

激戦を展開するに至つた。午後五時二十分頃分隊は小隊長の命令に依り後方約五十米に在りし敵の既設陣地に後退したが敵は衆を恃んで城門を開き左翼潮田分隊の正面目がけ怒濤の勢で肉薄して来た。此時杉山分隊長は潮田分隊の後方に於て指揮中の長谷川小隊長が身邊危しと見て取り憤然として獨斷敵の左側を目がけ突撃を敢行した。惜しや分隊長は敵弾の爲負傷し指揮意の如くならなくなつた。杉山分隊長の右側後を突撃前進中の氏は戦友を激勵し衆に擻んで、鬼神の如く勇戦奮闘遂に頑敵を撃退した。だが悲しい哉氏も此激戦に於て頭部貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。此尊き犠牲此拔群なる武功に依り氏は即日工兵上等兵に進級し功七級金鷄勳章と勳八等白色桐葉章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 今城 作 藏

氏は埼玉縣川口市大字貳軒在家の人にして父を忠吉母をノブと云ひ大正五年五月五日生れで昭和八年三月南平柳村小學校を卒業し昭和十二年二月徴兵として北支駐屯歩兵隊に入營した。爾來軍務に精勵北支の警備勤務に服してゐたが同年七月蘆溝橋事件の突發するや安建部隊に屬し直に出動し先づ北平梅壇寺兵營に次で綏靖公署に位置し北平東地區警備隊として城内支那警務機關の指導或は兵器の沒收に或は北平近郊の共產匪の掃蕩に従事し北平奪回の企圖を放棄せしむる等警備勤務の功績は優秀であつた。

越へて九月二日には大隊命令に依り下清河に埋没しある兵器の押収を實行するため熊井准尉以下十三名の列に加はり自動車にて先づ押収装甲車を先頭に五十米の距離を以て出發綏靖公署—安定門—下清河道を前進した。連日の豪雨に道路泥濘進行を續け午後二時十五分操練場西方三百米の營壘村に達するや同村東端家屋方向に一發の銃聲を聞き續いて廟附近の

輕機銃二を有する敵より一齊射撃を受けた。依て全員下車装甲自動車を以て應戦したが該道路は甚しき凹道で敵の敵制を受け敵を目視するを得ず依て其の東南方約三十米の廟附近に陣地を占領應戦せしも敵は優勢を恃みて包圍前進し來り其一部は我後方を遮断せんとする狀況に熊井准尉は此狀況を報告すべく風見上等兵を長とし氏外二名をして後方の敵を突破し安定門警備隊及大隊本部に急報せしめた。



我兵力の寡小なるを見た敵は勢を得て益々猛射を加へて來た。依つて熊井准尉は操練場西方の堤防を利用し敵を拒止せんと道路南側地區の高梁畑を迂回して該地點に至り應戦之れ努め午後二時四十分風見上等兵以下四名も猛烈なる敵弾を冒して再び歸還し左翼方面に位地して營壘村東端附近の敵に對し猛射を加へてゐたが高梁畑を利用し我が左翼方面に進出した敵は俄然猛烈なる側射を浴せて來た爲氏は無念にも頭部及び大腿部に貫通銃創を受け午後二時四十五分遂に壯烈な戦死を遂げた。

氏や今次事變の勢頭より參戦し毎回勇戦奮闘々たる武功を樹てた然るに不幸終に敵弾の破す所となり北支營壘村に落花の最期を留む哀惜何ぞ盡きん。然れども氏が一死の忠は是れ東亞恒久の平和建設に對する一礎石にして其の英名は偉大なる功績と共に永く青史に輝き其の英靈は不滅に生き護國の神として皇國及遺族の前途に慶福を垂るゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 今 泉 巖

氏は群馬縣山田郡川内村山田の人にして父を淺吉母をせいと云ひ大正五年七月十七日を以て生れで未だ獨身であつた。昭和六年三月川内北尋常高等小學校高等科を卒業續いて川内北實業補習學校に入學同十二年三月同校研究科を卒業した。



資性温順にして寡言父母に孝養を盡し友と交りて信洵に模範青年であつた。青年學校在學中滿六年皆勤して成績良好群馬縣廳及び教練在官横山歩兵大佐より表彰せられた。昭和十二年一月現役兵として高崎歩兵聯隊に入營同年八月森田部隊に屬し北支方面の征途に上り九月十日及十一日には永定河畔石堡村附近にあつて對岸敵陣地の攻撃準備をなし十二日より十四日に亘り永定河々畔辛莊附近の戰闘及び追擊戰に参加し次いで九月十七日京漢線東側地區南梁口村附近の戰闘に於ては同夜は徹宵豪雨の中において涿縣方面より敗退し來る敵を迎撃した。續いて九月十八日京漢線西側地區の澤畔店附近の戰闘に於ては第一中隊第三小隊第二分隊輕機關銃彈藥手として午前十一時行動を起し當初大隊の豫備隊となり前進し攻撃の進捗と共に彼我の銃砲火は愈々熾烈となり敵前約二百米に於て第一線中央に増加せられ輕機關銃彈藥手として猛烈なる敵火の下勇敢に彈藥を補充し以て自動火器の威力を最大に發揮して敵に多大の損害を與へ終始勇戰赫々たる功績を樹て續いて敵前百五十米に於て奮戰中惜くも午後二時頃敵彈のため右大腿部に貫通銃創を蒙り壯烈なる戰死を遂げた。

因に所屬部隊は九月十四日總攻撃開始以來連續猛追擊戰を行ひ九月十八日は午前三時行動を起したが惡路を急行軍の爲兵皆疲れ切つて正午過澤畔店に到着し休息の暇なく少くも我に十數倍する敵軍を攻撃する事になつたのである。待ち構へて居た敵は我軍の接近するや猛火を以て迎えた。だが我軍は之に應射する事なく高梁畑を前進しつゝ敵前三百米に進出したが三方面より射注ぐ敵の十字火は刻一刻熾烈となつた。空腹と渴を覺ゆれど之を滿たすに詮なく其中に負傷は續出する大隊本部の如きは大隊長以下負傷又た戰死し殆んど全滅の有様であつたと云ふ事である。以て如何に激戰であつたかと思察される。斯る激戰の中に氏は一死報國を覺悟し勇戰奮闘遂に聖戰の犠牲となりし心境を察すれば唯々感謝感激の外はない。眞に是れ皇軍歩兵の精華であり一般軍人の龜鑑たるものである。今や殉難の華と散つたが其名は千古に芳ばしく其功績は皇軍戰史と共に高く仰がるゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 磯 正 一

氏は栃木縣宇都宮市旭町の人にして亡父を照頼母をスイと稱し大正元年十月七日生れで未だ獨身であつた。資性温良にして孝心深く幼者を慈しみ支那の子供にさへ優しかつたと云ふ事である。入營前若くして店を開き以て病父を養ひ父亡き後は其供養を怠らず母を慰め一家の柱石として母及弟妹を一手に引受けて扶養する等町内一般の模範人物として好評噴々たるものがあつた。大正十四年三月女子師範學校附屬小學校を卒業後財團法人下野中學校に入學家事の都合に依り同年七月退校した。翌八月横濱市内の山口クリーニング店に弟子入りし修行約一年にして歸郷洗濯業を開業し入營時に至つた。

昭和八年一月現役志願兵として宇都宮歩兵聯隊へ入營し爾後滿洲派遣隊要員として渡航し各地に移動警備の重任を果し昭和九年十一月滿期除隊となり功を以て勳八等に叙し又滿洲國建國功勞章を授けられ尙善行證書を附與せられ歸郷した。



支那事變勃發するや間もなく坂西部隊第五中隊へ應召勇躍征途に就いた。斯くて九月十五日拒馬河畔北相附近の戦闘に参加するに至つたが氏は右第一線中隊第一小隊第三分隊に屬し第三渡河點より渡河し當面の敵に對し果敢なる攻撃を行ひ夕刻には敵と近く相對峙して夜に入つた。其夜優勢なる敵は數回に亘り猛逆襲を反覆したが氏は更に動ぜず沈着冷靜敵に多大なる損害を與へて之を撃退した。

九月十八日より二十一日に亘る間は平漢西側地區に沿ひ敵を掃蕩し南進中十八日には南北義安附近に於て敵と遭遇し之を攻撃した。氏は當時尖兵の一員として機敏なる行動に依り先制の利を占め且最も勇敢に奮闘して積極的に尖兵の任務を遂行せしめた。之が爲所屬

中隊の展開容易となり爾後の戦闘を有利に進展せしむるを得たのである。

其後皇軍は石家莊附近の堅陣に據れる約十二箇師の敵軍を撃破し之を南方に追撃し氏の所屬部隊は牛家樓附近に達せる時高震軍の約三萬と衝突するに至つた。當時友軍砲兵は河幅約二里に及ぶ滹沱河の大障礙の爲歩兵部隊に追及するに至らず歩兵獨力を以て攻撃する事になつた。敵は堅固なる陣地に據り多數の迫撃砲と野砲を有し且其陣地の前地は平坦開闢で

僅かに一部の高梁畑を除くの外は據るべき地物とてもないのであるから歩砲火力の全威力を發揚すべく凡ゆる射撃準備を完うして居たのである。併し所屬部隊は十月十一日夕先づ牛家樓を占領し敵陣地を偵察し敵陣地の左翼が弱點の成形せるを知り十二日午前三時の夜暗を利用し部隊主力の行動を起し午前五時迄に包圍の態勢を完了した。氏の所屬小隊長は將校斥候となり更に敵陣深く潛入して新陣地を偵知したる結果謀下の四十名を以て守兵約三百名の敵を攻撃する事になつた。氏は十一日以來輕機關銃手として牛家樓及北白雲西側の攻撃に参加し奮闘力戰して來たが更に勇躍前記の新任務に就いた。小隊長は十二日午前三時より全軍の爲犠牲を覺悟し猛攻を開始した。敵前百米に達するや敵は俄然逆襲に轉じた氏は死力を盡して奮戦し之を撃退し敵前三十米に達し將に突撃に移らんとし小隊長は最後の一瞥を部下に與ふるや氏は唯一人分隊に離れて畑の上に打伏して居た。小隊長は磯！どうしたと呼ばば氏はやられました動けません残念ですと悲痛の答であつた。氏は午前六時四十五分頃右前胸部と右上腕部に貫通銃創を受けて居たのであつた。小隊長は氏の戦友に命じ介抱せしめ直に小隊を提げ激戦二時間餘にして第三線陣地を奪取し頑敵を撃滅した。後小隊長も重傷を負ひ偶然氏の傍に收容され磯しつかりせと激勵すればあゝ小隊長殿ですかと苦惱の中にも嬉し氣に返事したが手厚き看護の甲斐もなく十月廿六日元氏野戦病院に於て遂に北支戦線の華と散つた。氏が従軍以來常に責任を重んじ如何なる勞苦も如何なる悲慘なる難局にも不屈不撓の精神を以て死力を盡し又最後までも苦痛の中にも上官に對する信頼と敬意とを忘れなかつた。噫孝悌一郷を美化し純眞無垢聖戰の尊き犠牲となり忠勇武烈鬼神をも哭かしむ。寔に是れ皇國軍民の龜鑑と仰ぐべきものである。氏の尊き一生は幕を閉ちたが必ずや護國の神、一家の守護神として尊き働きをなすであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍工兵上等兵勳八等功七級 石澤泰治

氏は長野縣上伊那郡赤穂村の人にして父を松治郎母をかつよと稱し明治四十三年三月六日を以て生れて未だ獨身であつた。資性濃厚篤實大正十三年郷里の小學校を卒業の後縣立師範學校に入學昭和三年三月同校卒業長野縣下伊那郡生東小學校に奉職更に昭和五年四月同縣諏訪郡永明小學校に轉じ同八年東京市日本小學校夜學校に教鞭を執ることになつたが同十二年一月現役兵として水戸工兵第十四聯隊に入營同年七月工兵一等兵に進級し支那事變の勃發するや同年八月岩倉部隊に編入せられ勇躍北支方面の征途に就いた。

斯くて九月十五日より十六日に亘る琉璃河西曹莊附近の戦闘には所屬中隊は我が左翼隊の琉璃河渡河に任じ氏は高橋曹長指揮に屬して豫備手として事故發生舟赴援の任務を以て河岸に待機して居た。然るに永野上等兵の指揮せる第二舟は操手二名を敵弾に斃され舟長一人難行を続けんとする苦境に陥つたのを見た氏は直ちに敵彈雨注の裡水中に飛入り同舟に至り漕航渡河したのであつた。次いで十七日より二十二日に亘る涿州南方地區の追撃に於ては第四小隊長石川准尉の指揮下に琉璃河家屯附近の軍橋修理並に戰車渡河作業に従事し不眠不休克く其任を全うし二十二日大冊河々畔黃村附近の戦闘の際には中隊は猛烈なる強行軍を以て部隊本部に追及したが當時將兵の疲勞困憊は容易ならざるものであつた。然かし氏は聊かも疲勞の態を見せず敵彈下に於て終夜至嚴の警戒勤務に服し次で部隊主力が二十二日夜保定西南方鐵道線路破壊を執行すべく前進したる際屢々敵の反撃奇襲を受けたるも氏は常に沈着且勇敢に行動し其功績顯著なるものがあつた。更に十一月二日より四日に亘る彰德附近の戦闘に在りては氏の小隊は遠山部隊に配屬せられ前衛に屬して進路障礙物の排除に任じ常に危険を冒し勞苦をいとわず克く其の任務を全うした。

更に十一月十一日には氏の所屬隊は大名城攻撃の主力歩兵部隊に配屬せられ氏は此時城壁破壊の石川區隊破壊班長高崎伍長の指揮する破壊班豫備點火手として選定せられ綿密周到なる準備と點火豫行とを實施し午後三時四十分勇躍未村を出發した。當時敵火は正に熾烈を極め前進頗る困難なる情況なりしも氏は毫も屈する事なく破壊班の先頭に立ちて約六七百米を前進するや俄然敵迫撃砲の集中火を受けた。班長以下氏等は其猛火の中を一進一止躍進を續けたが途中遂に氏は迫撃

砲彈の爲壯烈なる戦死を遂げた。此の狀況を目撃したる區隊長以下は俄然敵復讐の念に燃え爆破必成の信念を固め隊員一體となりて西門城壁の爆破を執行し美事成効して友軍の突撃路を開設し得たのであつた。

氏や夙に地方育英の事に當り其の間修養を積み此の度の聖職には心中一死報國を期せるもの如く曩には渡河舟艇の危険に當り挺身彈雨を冒して河中に入り救援の實を擧げ又最後の戦闘に在りては沈着果敢率先して城壁爆破の重任に當る。其人と爲りや誠に敬慕に堪えず不幸中道にして敵彈の墜す所となりしと雖も而かも氏の战友等之に憤激して遂に此快舉を完うし大名城頭日章旗を高揚せしむるに至つた。氏の功績や正に拔群其勇名と共に不朽に皇軍戰



史に牢記せらるゝであらう。

松田隊長は書を父松治郎氏に寄せて曰はく、

(前略) 泰治君の壯烈なる死を語る血染の軍服有之候恐らく御父君としては此れ等を見るは傷心に堪えざることゝ存じ

候はん又従來は大抵戦死者と共に焼きたるも泰治君の從來の經歷に鑑み特に保存致したるものに付不日御送付致度存居候間御入手の上は御手元へ保存さるゝなり或は郷里の學校へ記念品として保存せらるれば眞に血を献けて護國の神となつた本人も喜ばるゝかと存じ候(下略)

と誠に然り。氏の英靈や獨り護國の神として祐を皇國に致すのみならず氏の貴き此記念品の軍服が第二第三の少國民に與うる教訓を想ふ時氏や死して尙育英を千載に續行しつゝあるものと謂ふべきである。

氏は戦死の日工兵上等兵に進級し次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。因に琉璃河渡河戦闘に於て氏の所屬中隊は軍司令官より感狀を授けられたのであつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 市 枝 常 雄

氏は兵庫縣加古郡八幡村の人にして大正四年九月四日生れで亡父を兼松母をいわと稱し未だ獨身であつた。氏は資性温良にして義務心厚く事を處するに實質であつた。氏が戦地よりの通信文の一節に住み馴れた家郷を捨てて農家に大切な牛馬を残し西に東に安全地帯を求めて避難する黄色人種が同じ極東に住んでるので敵國民ながら憐愍の情を禁じ得ません一日も早く千年の悪夢から覺めさせ皇道の光に浴させてやりたいと通信せるを見ても氏の豊かなる心境が窺はれる。氏は昭和五年三月郷里の高等小學校を卒業し家庭に在りて鍛冶職を手傳ひ昭和十年一月姫路歩兵聯隊へ徴兵として入營し日夜軍務に精勵し將に除隊期に達せんとする頃支那事變が勃發し沼田部隊高橋隊に編入され聖戰に参加するに至つた。昭和十二年八月八日以来同月二十四日迄は輸送業務及集中業務に關し氏は日夜勞苦を厭はず精勵努力し所屬中隊に貢献

する所甚だ大であつた。斯くて八月二十五日より九月十四日に亘る間は馬廠附近の戦闘に参加し九月十五日より同月二十六日に亘る間は滄州附近の戦闘に参加し特に同月二十三日夜豆店南方の敵陣地に對し夜襲を實施せし際には氏は勇猛果敢に奮戦し敵に多大なる損害を與へ夜襲成功に貢献する所大であつた。

九月二十七日より十月五日に亘る間は德州に向ふ追撃戦闘であつたが氏は高橋中隊第三小隊第四分隊要員として劉八里庄王院附近の戦闘に参加し力戰奮闘し後李莊附近の警備に任じ以て爾後の追撃前進を準備した。



超えて十月三十日より十一月八日に亘る間は黃河北岸の掃蕩作戰に参加したが所屬中隊は十月八日午前八時四十分張家の敵陣地を攻撃し午後四時二十分を奪取し午後四時四十分苗家の敵陣地を攻撃し九日午前五時三十分を占領した。氏は擲彈筒強襲手として参加し張家村に據り頑強に抵抗せる敵を撃破し同村落を奪取するや引き続き中隊の左第一線小隊に屬し苗家の敵陣地を攻撃した。敵は土壁を利用し銃眼及掩蓋機關銃座を設くる等堅固に陣地を占領し我軍を掃射し我は動かば必斃の苦境に陥り攻撃前進は至難となつた。此時に當り氏は敵情搜索並敵情監視の任務を與へらるゝや熱心積極的に任務を遂行し次で所屬小隊が萬難を排し敵前百五十米の線に進出し夕陽將に西に沒せんとする頃突撃を取行せんとするや日頃より志氣旺盛なる氏は愈々闘志満面に現はれ小隊長の左側に分隊の戦友等と共に相隨ひ勇躍突撃に前

進し遂に敵前十五米に設けある鹿砦の線に達し氏は鹿砦を除去せんとする際不幸にして敵彈飛來頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。時に午後六時二十分であつた。氏は現役二年兵の精銳であり又擲彈筒分隊の重鎮でもあつた。諸偵察に諸戰闘に常に慧眼克く正確なる敵情を看破し機敏勇猛以て一隊の志氣を作興し中隊の戰闘に貢献せる所甚だ大であつたに此戰場に於て惜くも皇國の人柱として墜るゝや一隊の將兵は齊しく痛惜悲憤の涙を注いだ。果然翌九日未明には決死隊を先頭に皇軍得意の夜襲を敢行して頑敵を粉碎し疊上高く日章旗を翻へした。

噫氏や獨り形而下の動作が勇猛であつた許りではなく形而上の純潔無比の忠誠は一隊を感激せしめ以て光輝ある戰勝を大成せしめた。洵に是れ皇軍の精華軍人の龜鑑と謂ふべきである。今や護國の神となつたが其英靈は永世に生き氏の遺族に光と力とを與ふべき事は勿論氏が念願せる異民族をも塗炭の苦みより救ひ以て皇獻を扶翼し奉る事であらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 林 田 靜 男

氏は岡山縣眞庭郡川東村大字下見の人にして父を鹿二郎母をみみのと云ひ大正四年八月二十五日を以て生れ未だ獨身であつた。資性父母に仕へて至孝且眞面目であつた。昭和三年三月久米郡西川村友清小學校を卒業し後家において農業を助けしが同六年岡山縣會敷人絹會社に入り昭和十一年一月岡山歩兵聯隊に入營、翌十二年八月事變のため赤柴部隊に屬し北支方面の征途に上つた。斯くて所屬中隊は八月二十日堀田支隊に屬し天津出發當城附近に根據を有する敵兵の掃蕩に任じ次で八月二十三日には大隊の右第一線として西邊庄西方一軒屋附近の敵を攻撃し同日午後九時該陣地を奪取した。更に

中隊は八月二十九日陳屯附近戰闘に際し大隊の本隊として前進中敵の退却に乗じ一舉に小趙家窪に進出したが之等の各戰闘に於て氏は毎に第三小隊第二分隊にありて勇敢機敏に行動奮戦し其功績は優秀なるものであつた。次いで九月三日夜中隊は運糧河左岸の敵を攻撃するため大隊の左第一線として攻撃準備の線につき翌四日午前八時攻撃前進を起して張家園馬辛庄馬集の敵陣を席捲し翌五日曲庄陳庄を経て後屯に進出同夜二回に亘りて敵の夜襲を受けたるも之を撃退した。本戰



闘間氏は勇敢に奮闘殊に敵の夜襲に際しては後屯北端獨立家屋にありて敵彈下に沈着猛射を行ひ美事敵を撃退した。又馬廠附近の戰闘に於ては板倉部隊第三小隊第四分隊（擲彈筒）彈藥手として九月十日午後三時行動を開始し同四時三十分攻撃開始と共に前屯南側敵岸に上陸し直に中隊戦線の最左翼に進出し開門西側の敵掩蓋輕機銃に對し猛射撃を浴びせた。此時氏は第二筒手の右側にあつて榴彈の準備裝填に任じて居たが偶々第二發射の瞬時敵迫撃砲彈近く炸裂し其破片創を蒙りしも神色自若胸部及顔面より迸出する鮮血を物ともせず更に第三發を準備裝填しよく機に應じ所命の彈數を發射するを得しめた。而して後收容後送されたるも翌十一口手當の効なく第二野戰病院に於て落花の最期を遂げた。

氏は前記數度の戰闘に参加し勇戰奮闘殊に敵があらゆる障碍と幾多の時日を費やし且馬廠の天險を利用して堅固に構築せられたる馬廠陣地の攻撃に於て近代戰火器たる擲彈筒射撃を以て適時要所に有効なる射撃を行ひ敵を震駭せしめ同敵陣の陥落に貢献する所至大にして其の功績は赫々として馬廠攻撃戰史を飾ることである。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 林 勁

氏は岡山縣岡山市野田屋町の人にして父を仁太郎亡母をつるのと稱し明治四十五年三月二十一日の生れで未だ獨身であつた。性豪放にして些事に拘泥せず他人の苦難に會せば自分の事など顧みず直に之を救助すると謂ふ義侠の風格が在つた。

昭和二年三月岡山商業學校卒業後大阪市東區久寶寺町久貴商店に勤務し昭和八年一月徴兵として歩兵第十聯隊に入營同年二月以降滿洲國新京及び敦化等に駐屯警備の諸勤務に服し昭和九年十一月滿期除隊し後其功により勳八等に叙せられ瑞寶章を賜はつた。

昭和十二年七月支那事變勃發するや氏は八月赤柴部隊第六中隊に應召勇躍征途に就いた。斯くて同月二十日より二十二日迄は折から連日の豪雨泥濘を冒し楊柳青及當城附近の敵掃蕩戰に参加し次で二十二日には所屬隊と共に午後五時十里堡出發敵火の下而も泥濘膝を没する懸路を前進し愈々二十三日午前五時四十分西邊庄の敵を攻撃するに際しては敵の猛烈なる銃砲火も意とせず第一線兵として地區地物を利用し一進一止敵に近迫し愈々敵陣に突入するに際しては率先勇躍銃劍を揮ひ敵壘内に飛び込み遂に午前八時三十分西邊庄を占領した之れが氏の光輝ある初陣であつた。次で更に東五里庄を攻撃し午前十一時該地を占領の午後七時東窟に轉進したが二十四日午前二時數倍の敵は所屬隊の正面に夜襲して來た。此時氏は第一線に在り沈着冷靜正確なる射撃を爲し遂に所屬隊は此優勢なる敵を美事撃退し得たのである。其後八月二十

九日には王官屯附近の敵を攻撃し三十一日雙樓及桃家庄を占領し九月四日には馬辛庄、林庄及馬集を五日には敵戦の後曲庄、陳庄を攻略した。以上の諸戰闘に於ける氏の勇敢なる行動奮戦振りは小隊全員の絶讃する所となり小隊の士氣爲めに大に揚つた。



九月七日より九月十日に亘る馬廠附近の戰闘に於ては氏は早瀬小隊第三分隊の一員として之れに参加した。九月十日氏の屬する中隊は馬廠河水門附近の敵前強行渡河の決死隊となり發動艇四隻に分乘し午後三時五十分敵前上陸を敢行した。氏は中隊長の座乗する第二番艇にあり率先勇敢に上陸して奮闘した。此際敵の銃砲火は熾烈を極め分隊の前進頗る困難となり小隊長との連絡も亦至難となつた。此時氏は分隊と小隊長間の連絡を命ぜらるゝや彈丸雨飛の中を敢然立つて任務に就き前進したが敵の側防機關銃火は急霰の如く集中された。氏は其任務の重大なるに鑑み使命を達する迄はと匍匐して前進したが偶々飛來せる一彈は氏の胸部を貫通した。而も責任觀念旺盛なる氏は之れに屈せず尙は前進を續け遂に小隊長の許に達し氣息奄々たる中に連絡の任を果した其一刻那第二彈は氏の右足關節部を貫通し流石豪氣の氏も控とばかりに倒れてしまつた。戦友井戸上等兵直に手當を施し野戰病院に收容せしも已に出血多量にて厚き手當も其の甲斐なく同日午後九時遂に北支戰線の華と散つたのである。

氏は終始自ら進んで難局に當り毫も危險を意に介せざるものゝ如く全く其行動は氏の性格を遺憾なく發揮したものであ

る。當時所屬中隊長高田大尉より氏の最後の状況を氏の父に宛てたる書簡の末節に

「氏の最後は從容自若莞爾として微笑みつゝ瞑目致され其懐中には
われを待つ親の故里二つありどちに歸るも差支なし。

の一首血に染まり出で戦友を泣かしめ候」

とある。之實に達者な父の許に歸りても將又死して亡き母の所に行きても満足だと謂ふ覺悟の程を表したもので此決心覺悟ありてこそ氏が前記の如く常に勇猛果敢に奮戦し優勢なる敵の逆襲にも冷靜沉着善處し任務の爲には身重傷を受くるも屈せず遂に其使命を達成した事が領る。次第で今や氏は殉難の花と散たが其誠忠氣魄は軍人の龜鑑であり其技群の武功は堅馬廐占領の名と共に永へに皇國の戦史に輝くであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 濱 村 貢

氏は鹿兒島縣西櫻島村の人にして父は藏助と云ひ既に歿し母をケサツルと云ひ妻フミとの間に長男則義を始め四男二女の愛子を擧げた。性質温良實直にして母に仕へて孝又愛子の養育に特に意を用ひ戦地よりの通信にも切々の教訓を書き送つて居た。尙出征中の二弟の家族に對し麗はしき人情を罩めた通信を寄せあるに徴しても氏の人となりを窺ふに充分である。

大正三年三月櫻島小學校の高等科卒業後直に福岡縣若松驛に就職し大正五年五月大連驛に轉動した。大正九年十二月歩

兵第四十五聯隊へ入營翌年十月には天津守備隊に編入され翌十一年十一月除隊し善行證書を附與せられて居る。滿期後は農業に従事し煙草薪製造の組長となり十年間勤続した。

支那事變勃發するや八月召集令狀に接し豫て覺悟の氏は來た／＼と欣喜濱島部隊に屬し勇躍して江南の戦線に赴いた。斯くて約二ヶ月間聖戰に奮闘努力したのである。



九月十日乃至十月八日まで小濟灣の占領に引續き曼頭宅附近に在りて兵站の掩護に任じ小濟灣附近の戦闘に方りては敵と近く相對し壕内に不自由を忍びつゝ諸勤務に服し殊に前後三回に亘る敵夜襲に對しては勇戦奮闘都度敵を撃退し守備の任務を完了した。

斯くて所屬大隊は兵站の完全なる警戒を確保する目的を以て十月九日午後三時頃當面の敵を撃攘すべき任務を受け先づ陸家橋朱家宅の殘敵を驅逐し中秋時雨の夕闇迫らんとする頃氏の所屬中隊に依て願中橋を占領した。時雨襲來の夕暗を透し前面を凝視すれば前方約二百米に敵は堅固なる塹壕に據り我に向ひ猛射を加へつゝあつた。

中隊は敵彈雨飛且泥濘膝を没する中に毅然として攻撃陣地の構築に着手し氏は小隊長笠原少尉の指揮下に全身泥土にまみれつゝ率先壕内の排水作業を行ひ他兵の活動を容易ならしめた。疲勞に嗣ぐ此間夜に氏の隠れたる努力は將兵一同の感激する處となつた。此夜氏は徹宵雨中敵彈下に立哨警戒に任じた。明くれば十日全兵員は壕内の水に半身を浸し上半身亦濡れ鼠となり喰ふに食なく雨と彈丸に晒されたが氏は泰然として士氣益々旺盛であつた。當面の敵は後退して齊家宅及其西南

方無名部落の陣地に據り抵抗を續けた。所屬中隊は曩に派遣せる斥候の報告に依り機逸すべからずと猛然攻撃前進を開始し一舉前記部落の陣地を攻略した。然るに敵は尙其西方雜林の一軒家附近を固守し其後方の狀況不明であつた。第一線の到達線より雜木林迄は僅かに百米を隔つるに過ぎなかつたが其途中には丈高き草むらや黍畑生ひ茂り左右の地區より敵の絶間なき亂射を受くる等危険不安の状態故笠原小隊長は藤本伍長を斥候長となし氏外三名の斥候要員を附し決死的の搜索を命じた。小隊長も心を鬼にして今や出發せんとする最愛の部下に確かり頼むぞと別れの言葉をかけると斥候一同も力強い口調で行つて來ますと第一の無名部落を離れ行く姿は如何であつたらうか生死の境に往來する將兵のみが味ひ得る魂の觸れ合ひではあるまいか。部落を出でて暫し叢より前方を眺むれば意外や前方五十米に敵の塹壕を發見した。伏せ射撃用意の相圖が斥候長から示される。忽ち銃聲一發斥候長の頭部をかすめて飛去つた。續て五六發林間に衍して飛來する。斯様な譯で展望觀察の任に當りし斥候も暫し打伏したるまゝ頭を得上げなかつた。平素温良な氏は吾こそ敵情を確めんと其斥候に代り上半身を起せば忽ち一彈は氏の左身邊を掠めて飛び去つた。斥候長頭が高いと注意を與へたが任務第一主義の氏は之を聞容れず機敏慧眼なる觀察を遂げ敵兵力少なしと報告した。惜しや此一刹那敵の一彈は氏の前額部を打貫き氏はやられたと叫んで斃れた。續いて敵は亂射數十發急變を知つた中隊主力からは二分隊の増援を急派して猛射數分間遂に此敵を驅逐して其陣地を奪取した。此陣地はタリクの對岸に設けたる先端陣地で其後方孫家屯附近には起伏せる敵陣地の斷續してゐるのを展望するを得た虎穴に入らねば虎子を得ず身の掩護を次等に置き彈雨の中に身を挺するにあらざれば的確なる情報を得られぬ。兎もすれば理智に走り易き後備兵の中に崇高なる犠牲的精神の烈々たる氏の如きは國軍の寶である。噫至誠盡忠江南戰線の華と散つたが氏の英靈は獨り軍人の輿蓋たるのみならず氏の子孫に情き魂を永久に傳へるであらう。即日歩兵上等兵に進級し勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 花房清次

氏は兵庫縣神崎郡鶴居村神崎の人にして父を善太郎母をたみと云ひ大正五年四月四日の生れで未だ獨身であつた。昭和六年三月鶴居尋常高等小學校を卒業し後青年學校卒業の上家業の手助けをして居た。資性温厚篤實青年學校に於ては特に



模範青年として査問官森脇大佐より賞詞を受け軍隊に於ても精勵是亦衆の模範として聯隊長より表彰された。昭和十一年一月鳥取歩兵聯隊に入營同十二年八月長野部隊に屬し北支方面の征途に上り姚庄子魏庄子李家樓附近及人合庄東花園附近次で滄州に向ふ追擊戰闘並に滄州城攻撃地附近の各戰闘に参加し克己堅忍勇敢によく其任務を全うした。殊に東花園附近の戰闘に於ては藤井中尉の指揮する中隊の第一線小隊機關銃分隊第二彈藥手として九月二十三日戰闘の開始せらるゝや氏の分隊は敵陣地内掩蓋銃座攻撃に當り氏は此時夜間にも拘らず敵軍火器の位置を速に發見して之を分隊長に報告し次で

戰闘の進捗に伴ひ彈藥の不足を告ぐるや敵の猛火を冒して敏速其補充に努め以て分隊の射撃威力を發揚し次いで比隣分隊と共に掩蓋陣地に突入し奮闘敵數名を刺殺し其陣地を奪取するや續いて追擊戰闘に移り疲勞困憊其極に達するも屈せず彈藥手としての任務を盡し更に又九月二十七日より德縣附近の戰闘に従ひ中隊長代理山口少尉の指揮に屬し十月四日德州城の攻撃に當り第一小隊機關銃分隊第一彈藥手として決死隊に参加し午後六時猛烈なる敵彈下にありて勇敢にも丈餘の城

壁を分隊と共に一氣に攀ち登り機銃に輕機關銃の威力を發揚せしめ寸隙を利用して煉瓦破片を投擲敵の前進近接を阻止し尙遁走する敵を急迫五十米にまでも近迫し以後後分隊の前進を容易ならしめつゝあつた。此時氏は左側より飛び來つた敵の兇弾により胸部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げたのである。

氏や平時に在つては格闘其の精神の修養を怠らず眞摯職務に精勵し屢々業の模範と推賞せられ戦場に出でば彈丸の猛雨も疲勞の痛苦も氏の赤心を奪ふ能はず。常に率先身を挺し敏活勇敢なる奮闘に依つて敵の心膽を寒からしめ殊に其最期の奮戦に際しては決死隊の一員として至難の城壁登攀に成功し之に依て輕機關銃の威力を最大に發揮し爲に翌朝德州城を完全に占領するに至りし礎因を築きたる其の功績は拔群と謂ふべく氏の平生を敬慕し其の死を哀惜するの餘り爾後陣中永く戰友間の追憶談に上れりと聞くに及んで愈々其の人と爲りの尋常にあらざりしを察知す。

嗚呼や氏の壯容に接する能はざるを恨みとするも其の英靈や永く護國の神となり祐を極東の和平に致し又深く家運の前途をも守られるであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜つた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 波多野吉一

氏は埼玉郡北足立郡小室村の人にして父を嚴亡母をひでと云ひ大正八年四月十七日を以て生れ 未だ獨身であつた。二歳にして母を喪ひ昭和九年三月小室小學校高等科を卒業し次で鴻巣町武陽實業學校に入學二年の後業を了へ直に小室青年學校本科三年に入學中十八歳にして現役志願をなし合格した。性重厚にして胆量温容よく人に親むと雖毅然として千萬人

と雖吾往かんの勇氣あり幼にして優秀級長を占むること一再ならず級友の信望と教師の期待を負ひ前途洋々たるものがあつた。昭和十二年一月麻布歩兵聯隊に入營間もなく滿洲に派遣せられ酷暑より炎熱に亘り北滿警備の重責に任じつゝも日夜練武に精進し其年七月十一日一等兵に進んだ。間もなく支那事變勃發し選ばれて小林部隊に屬し出動し先づ天津附近の掃蕩に任じたが其後外長城線附近の戦闘に方つては村澤隊志村准尉の指揮下に第一分隊小銃手として前進し八月十九日午



前二時三十分所屬中隊が張北博方高地に於て約四百名の敵襲を受けるや氏は左支點中央分隊にありて沈着勇敢に對戦し黎明と共に敵を進撃し多大の損害を與へ續いて翌二十日外長城線の敵陣地夜襲に際しては左第一線小隊にありて雨下する彈丸を物ともせず勇敢に前進し小隊長の突撃號令と共に分隊長に追隨して突撃を敢行し遂に石垣陣地を占領した。次いで小隊長は敵の第二陣地に向ひ其の右側背より夜襲を企圖し先づ氏の分隊に敵陣地東側火點の奪取を命じた。此時

氏は分隊の陣頭に立ちて突入白兵を振ふて群がる敵中に躍り込み暗夜に奮闘二名の敵兵を刺殺した。然るに其利那不幸にも敵彈の爲腹部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。然れども氏の勇敢なる行動に依り小隊は所命の火點を奪取し中隊の志氣は愈々軒昂遂に翌二十一日午前零時四十分敵が金城鐵壁と恃める外長城線の一角を占領するを得た。

令を下されたのであつた。折柄當日は黄昏より一大颶風と共に豪雨となり一擧夜襲するに決したが氏は敵の十字火を物とせず疾風迅雷的に突入し遂に敵弾に倒れた。剛膽不敵の氏は之に屈せず銃を杖となし立上りては倒れ倒れては立上り歩一步前進したが力及ばず 天皇陛下萬歳を唱へつゝ外長城戦の華と散つた。氏の忠勇武烈や空しからず全軍の志氣を鼓舞し赫々たる戦勝の素因をなし氏の兵團は後に軍司令官より感状を授けられた。嗚呼氏の軍功や外長城戦史に特筆せらるべく其名は千古に謳歌せられ其英靈は護國の神と仰がれるであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 西垣 勝 治

氏は兵庫縣水上郡上久下村の人にして父を久藏母をつまと稱し大正五年一月五日生れで未だ獨身であつた。性沈着果斷郷に在りては善良なる青年及び孝子として近隣の稱讃する所であつた。

昭和五年三月上久下小學校の高等科卒業。昭和十二年一月歩兵第七十聯隊へ入營同年渡滿部隊に編入せられ濱江省梨樹嶺の警備に任じた。氏は一意上官の命に従ひ内地出發に方りては衛兵其他の諸勤務に終始一貫奮勵努力し梱包及派遣業務を容易ならしめた。特に輸送業務に關し馬匹の搭載卸下に献身的の努力を拂ひ以て輸送業務を圓滑ならしめたる功績は特筆すべきものであつた。

昭和十二年五月梨樹嶺に到着同地の警備に就いたが氏の精勤振りは全く内地に異ならず上官並に戰友等の愛敬する所であつた。

昭和十二年六月三十日より七月二十日迄興隆嶺の警備に任じたが炎熱灼くが如き酷暑をも意とせず連日連夜の討匪行軍に或は二道河子への輸送に衛兵勤務に至誠一貫常に積極的に活躍した。

斯くて同年七月廿一日より同廿五日に亘る間三江省三道通附近の戦闘に於ては太田隊配屬機關銃隊四番銃手として奮戦力闘中途に三道通南方に於て壯烈なる戦死を遂げ護國の神となつた。氏は此戦闘の前月八日附を以て郷里の青年團に寄せた信書の一部に曰く「今北滿の大陣に立つて其任や重く其責大なるを痛感致しますと共に犇々と胸をうつものは唯皆々様の熱誠溢るゝ御聲援のお言葉のみ生々しき感激の想出次から次へと盡きません(中略)如何なる場合も警備の心は離れた事はありません故國を出る時心に固く誓つた事は生きては再び歸らじ護國の鬼とならん覺悟であります吾等の行途には露滿國境あり吾等は唯大君の爲國家の爲に盡す覺悟であります(中略)滿蒙の天地は何時風雨急を告ぐるかも知れざる状態であります我等も近日には討伐に出るとの話をして居ります其際には其任重く身は軽しだ。皆様の心を籠めてお作り下された武運長久の御守様と千人針を腹に巻きしめ討伐に出る覺悟であります」云々と純眞無垢の軍人精神の横溢するの半面郷黨に對する切々の友情も窺はれる次第である。果然氏の最後の奮戦に於て一番銃手の敵弾に墜るるや飛鳥の如く銃に取つき之に代つて引鐵を握り熱せる銃身より迸る弾丸は盡忠報國の魂罩めて多數の匪賊を撃滅し偉大なる勳功を奏した。無念や氏も亦敵弾に墜るゝや部隊長の情ある慰問に對し部隊長殿！西垣は大丈夫でありますと答へ瞋目したのであつた。人生僅か五十年其半にも達せずして護國の華と散りし氏の現世生活は短かかつた。だが氏の靈界の生命は永遠にして御靈ながらに國を守り家を守り又知己朋友の魂に清き光と力強き加護を與ふるものと信ずる。

氏は即日歩兵上等兵に進級次いで勳八等に叙し白色桐葉章並功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 西村 敏 藏

氏は鳥取縣西伯郡光徳村大字東坪の人にして父を藤市母をふで妻を勝子と云ひ大正三年一月十五日生れで大正十五年三月光徳小學校を卒業し昭和十年一月徴兵として歩兵第六十三聯隊に入營し在營間成績常に優秀にして精勤章を附與せられ

十一年二月下旬より七月中旬に亘り松江憲兵分隊に勤務し同年七月十九日特に歸休除せしめられた。



昭和十二年七月支那事變勃發するや應召編榮部隊に編入せられ勇躍征途に就き二十九日には二堡附近三十日には芸見頭附近の敵を撃攘し續いて三十一日未明王口鎮附近に前進するや陣地に據れる敵より俄然射撃を受け所屬中隊は直にこれが攻撃に當つた。この際氏は右第一線小隊にあつて勇敢に奮戦分隊長を輔佐して一進一止敵に肉迫し遂に中隊が突撃に移るや氏は先頭分隊にありて雨下する敵彈を胃し敵陣に突入遂に敵を敗走せしめた其功績は優秀であつた。

更に九月三日より四日に至る西子牙鎮附近の戦闘に於ては三日所屬中隊が右側衛として高二莊に向ひ前進するに方り氏はその尖兵に屬し前進し其間屢々斥候として活躍し同日遂に高二莊を占領するや續いて第一線の警戒に任じ翌四日依然尖兵分隊にありて浸水せる惡路を前進し午前七時五十五分西子牙鎮北方約三百米附近に達するや西子牙鎮の敵は猛射を浴せて來た。所屬中隊は直に展開して攻撃に移り氏は第一線に勇敢に躍進し遂に西子牙鎮部の突角を占領した。この

際突如西子牙鎮部内外より猛烈なる小銃並に機關銃の集中射撃を受けたるも小隊長は戰術上の要點たる該突角を確保するに決し極力防戦に努め特に氏の屬する輕機關銃分隊をして之に當らしめた。氏は彈丸雨飛の間を勇敢に前進し巧みに家屋を利用して陣地を占領せる敵輕機關銃に對し急襲的猛射を浴せ遂に敵輕機關銃の射撃を沈黙せしむるに至つた。此の時の氏の活躍奮闘は洵に目覺しきものがあつたが屢くして氏は飛來せる敵彈の爲頭部並に腹部に貫通銃創を受け惜くも壯烈なる戦死を遂げた。

噫、氏戦線に立ちて僅かに旬日にして戰場の露と化す朝顔の朝たに咲いて夕べに萎ぼむそれにも似て洵に痛惜に堪えず然れども人誰か死なからむ而かも其の死所を得ること難し古來大功を世に遂げたる人は己より偉大なるものゝ爲に一生を擲ちて不滅に生きて居る。國家の爲屍を戰場に曝らした勇士父の爲に己を捨てた子貞操の爲に己を捨てた婦人義の爲に己を捨てた者皆然り、氏今や北支の華と散りしも氏が英靈は不滅に生き其救々たる武勳と共に千載の下皇國軍人の鑑として顯はるゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進められ勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 西岡 耕 三

氏は兵庫縣栗原郡西谷村の出身にして父を卯太郎母をまさと稱し大正五年十月十三日の生れで未だ獨身であつた。性質卒直にして物事に熱心で元氣旺盛自ら難局に當るの氣概があつた。昭和四年三月二十六日西谷尋常高等小學校尋常科を卒業後家業を手傳つてゐたが昭和十二年一月現役として鳥取歩兵聯隊に入營隊務に執働した。同年七月支那事變の勃發する

や承躍長野部隊に屬し北支方面の征途に就き上陸以來豪雨連日のため河川は氾濫し到る處出水膝を没し假令出水地にあら
ずとも道路泥濘にして行軍頗る困難を極めしが克く此の難行軍に次々に難行軍を以てし宿營地に就くも敗殘兵所在に出没
し危険大なる爲至嚴なる警戒を要したが氏は其間よく困苦缺乏に堪え卒先行軍に警戒勤務に全力を擧げ積極的に其任務を
遂行した。



昭和十二年九月七日より同十日に亘る馬廠附近の戦闘に於ては森
岡隊第三小隊第五分隊（輕機關銃）第二彈藥手として参加し九月九
日夜十二時行動を起し翌十日午前十一時四十分森岡隊は流河鎮に向
ひ攻撃を開始するや敵は天然の地形を利用し且つ長時日を費して堅
固に陣地を構築したる而已ならず配備等にも侮り難きものありその
抵抗も頗る頑強であつた。果然我が前進に對し敵は猛烈なる自動火
器及び小銃射撃を浴せ中隊の攻撃前進甚た困難となつたが氏は之を
意とせず敵彈雨注の中を分隊長の指揮に従ひ率先して連絡困難なる
高梁畑中にあつて元氣旺盛巧に地形地物を利用し比隣分隊との連絡
を確保し以て分隊の戦闘を容易ならしめたるのみならず敵に接近するに従ひ敵彈は益々激しきも毫も屈せず猛火を冒して
彈藥の補充に任じ輕機關銃の射撃威力を發揮せしむるに遺憾なからしめた。然るに高梁其他雜草のため分隊長の意の如く
射撃成果を發揚し得ざるを痛感するや率先分隊長の意圖を察し獨斷飛行機射撃の要領に準じて自身脚の代りとなり以て分
隊長の意の如く威力を充分に發揚せしめ敵を制壓中午後一時三十分左腹部に首貫銃創を受け第二衛生隊に收容せらるゝの

已むなきに至り間もなく同隊に於て落花の最期を遂げた。氏は受傷して倒るゝや上官戰友等が情の單もる激勵の言葉をか
けると聊かも苦痛を訴ふる事なく何に大丈夫ですと元氣に答へ愈々臨終の迫るや幽かに 陛下の高歳を唱へ心靜かに瞑目
し武人の終を全うした。氏の勇敢にして責任觀念の旺盛なる行動は部隊の任務達成に貢献する處大なるのみならず其高邁
なる心境は天晴れ軍人の鑑と仰ぐべきものである。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 西 畠 武 松

氏は兵庫縣飾磨郡鹿谷村の人にして父を佐喜三母をしかと云ひ明治四十一年十二月二日生れで未だ獨身であつた。資性
優良實直にして大正十一年三月前の庄尋常高等小學校を卒業し爾後家にありて父母を助けて農業に従事し致々として働い
てゐた。昭和五年一月現役兵として姫路歩兵聯隊に入營翌六年滿期退營し以來益々家業に精勵良民の實を擧げてゐた。

支那事變の勃發するや昭和十二年八月應召沼田部隊に編入せられ勇躍北支方面の征途に就き應召以來日夜の別なく輸送
業務其他の諸勤務に精勵し八月中旬北支上陸後直に經理部長を護衛して鹹水口に送り次で八月十六日稀有の豪雨の後を承
け道路泥濘行軍甚だ困難なりしも元氣旺盛小站に到り後續兵團集結掩護の名譽ある中隊の一員として警戒勤務に就いた。
然るに敵は我上陸部隊の行動を阻碍せんがため中隊を目上の嶺として早速同夜九時頃約三百名を以て襲來した。氏は第二
分隊員として連日の難行軍のため身體綿の如く疲勞せるに拘らず第一線にあつて分隊長を輔佐し奮闘よく敵を撃退して初
陣に於ける戦功を樹て爾後續々部隊は到着するに至り茲に中隊は其任務を完了し次いで八月二十一日潮宗橋の敵を攻撃す

るため中隊は光榮ある尖兵中隊として小站を出發前進を起し敵の警戒部隊を驅逐しつゝ正午前敵の主陣地前に達し攻撃に移つたのである。氏は第一線小隊に屬し運河北岸地區に於て雨後の濕地に點在する高粱畑を通過し行動頗る困難なるも重火器の掩護射撃の下に攻撃前進に移つたが敵は堅固なる兵營並に圍壁に銃眼を穿ちそのみならず掩蓋銃座を設けて頑強に抵抗して毫も動搖の色なく戦闘は夜に入り相對峙するやうになり敵前二百米の線を確保して陣地を構成し警戒を嚴重にしてゐた。午後九時頃敵兵精二十名は我前面に潜行し來たるや氏は速に之を發見し急射撃を以て其の三名を斃したが他の敵十數名は我を少數と見て至近距離に迫り氏は此敵と勇敢に交戦しありしが其際不幸にして右腹部に貫通銃創を受けこれがため大腸の一部が露出したに拘らず尙奮戦を續けんとしたが復起つこと能はず東天を拜して萬歳を唱へつゝ河北の華と散つたのである。上陸直後泥濘惡路を冒して前方に進出後續兵團集中掩護に任じ次いで敵を攻撃するや奮戦轉々たる武功を現はし一たび重傷を受くるも尙其任務を繼續せんとして噫るゝも尙も已まざる氣概は七生報國の精神の發現で其の壯烈なる行動は武人の龜鑑にして永く青史を飾り國民をして感憤興起せしむることであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。



陸軍工兵上等兵勳八等功七級 新妻 政雄

氏は福島縣雙葉郡大久村大字大久字與平作の人にして父を竹治母をツチと言ひ明治四十年一月十二日生れ 妻ヨシイとの間に一男宏之を擧げた。大正九年三月高等小學校第一學年修了後家に於て農業に従事して居たが大正十二年四月上京して



し所屬部隊擔任架設區域の延長に伴ひ氏は選ばれて最前線の原平鎮に分屯して保線作業に従事した。此の間敵敵敗殘兵のため屢々通信線の障礙を受けたが氏は常に危険を冒して困難なる作業に従ひ克く保線の任務を完ふした。又折口鎮附近に於ける鐵道隊用電話線の構成にも全力を擧げて奮勵し大なる功績を擧げた。越へて十三年一月四日朝部隊擔任の通信網中原平鎮、嵯縣間に於て敵敗殘兵の手により斷線せらるゝや氏は之が偵察並補修を命ぜられ分隊長石塚伍長指揮の下に自動

貨車に搭乘して故障地點に向つて急行し午前八時五十分頃原平鎮北方十軒の田家庄附近に達した。然るに此の時突然數倍の敵敗殘兵の襲撃を受けたので分隊長は直ちに自動車の停止を命じて之に應戦した。敵は附近の高梁畑の中に潜伏して居たものであつて輕機關銃自動小銃、手榴彈等を以て多勢を頼み猛烈に攻撃して來り分隊長以下此の敵を撃滅せざる限り我が通信線は不通となり全軍の指揮上極めて重大なりとして一同決心敵に猛射を浴せ敵の損害頗る多大なりしが更に敵の機關銃二は側方に現出した爲に戰鬪は益々苦境に陥りかくて交戦約一時間に及んで携帶の彈藥は全部を射ち盡してしまつた。茲に分隊長は今之迄と決然突撃を命じた。常に進んで難局に當るの美點を有する氏は此の時率先分隊と共に銃劍を揮て敵中に突入したが其際不幸敵彈のため左上頸部より左後頭部へ貫通銃劍を受け壯烈なる戦死を遂げた。

噫、氏何ぞ沈着にして勇猛なる。

氏等の奮戦と恰も醇縣よりの應援隊來着とにより此の十數倍せる敵は多數の屍體を遺棄して潰走し分隊長は時を遷さず通信線の補修を竣へ全線の復舊完成を見るを得たのである。

氏や眞に通信兵の本領を遺憾なく發揮し軍の命脈たる通信網の確保の爲め身を以て障礙排除に任せしものにして其の功績は赫々として千載の下其芳を放ち郷土誇りの語り草として傳へられ其忠靈は萬世に生き護國の神として皇國を守護し遺族に祐を垂るゝであらう。

氏は即日工兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 堀 光治郎

氏は東京市淺草區千束町の人にして大正五年十一月一日生れにて佳太郎氏の長男である。未だ獨身で家庭には二名の妹がある。今戸青年學校を卒業し淺草區防護團千束分團員であり又新興青年團喇叭長として活躍する等部落青年の中堅を以て囑目されて居た。氏は又登山及書道に興味を有し特に書道は三級の腕前を有つて居たとの事である。昭和十二年一月徵兵として歩兵第三聯隊へ入營し其後北滿派遣部隊に編入せられ或は黃塵に塗みれ或は熱風に晒され日夜警備の重任に精勵した。



北支事變勃發するや急遽天津方面に出動を命ぜられ昭和十二年七月三十日以後八月十六日迄は天津附近の敵兵掃蕩に従事した。即ち八月三日乃至六日の間は武清附近の殘敵掃蕩及諸種の警戒勤務に従事し翌七日乃至九日の間は開平附近に奮動せる敵部隊の武装解除を行ひ九日乃至十二日に亘る間は歩兵第〇聯隊に配屬せられて右第一線として獨流鎮の敵を撃破し爾後同地の警備に任じた。

同年八月十七日より二十二日迄は外長城附近の戰鬪に参加し特に二十日のトーチカ主陣地の攻撃に際しては中隊の右第一線小隊に屬し勇戦奮闘敵に多大なる損害を與へ午後七時確實に之を占領するを得た。翌二十一日もトーチカ主陣地の攻撃であつたが氏は中隊の左第一線小隊に屬し前日の如く勇戦奮闘午後七時確實に敵陣地を攻略し翌二十二日は長城に沿ひ追撃に移つた。

同年八月二十三日以來九月五日迄は張家口附近の戰鬪に参加した。即ち二十三日所屬隊は土井子東方高地に於て優勢な

る敵より包圍攻撃を受けたが氏は中隊の右第一線小隊第二分隊輕機關銃手として勇敢に奮闘し敵に多大なる損害を與へて之を撃退した。翌二十四日には第二小隊第一分隊輕機關銃手としてナマコ山の敵陣地を攻撃したが勇敢機敏且正確なる射撃に依り敵を壓倒し遂に同陣地を占領し次で所屬大隊が追撃に移るや氏は第二小隊右側衛に屬し南天門に向ひ追撃前進した。然るに南天門北方高地に於て優勢なる敵の包圍攻撃を受けるに至つた。氏は沈着勇敢敵に多大なる損害を與へ遂に所屬小隊と共に敵の左翼に突入之を潰滅した。翌二十五日は夜間勇敢なる機動を行ひ二十六日午前六時三十分西店子西方高地の攻撃に奮戦力闘し翌二十七日遂に張家口を占領し殘敵を掃蕩した。

同年九月六、七日は天鎮附近の戦闘に参加した。即ち六日は第二小隊第二分隊輕機關銃手として参加したが當日所屬中隊は聯隊豫備隊として控置された。併し中隊は不眠不休で戰車壕の埋没作業を擔當した。氏は疲勞困憊を顧みず献身積極的に作業に従事し次で翌七日中隊は尖兵中隊となり大隊の先頭を前進中氏は多數の戰車壕埋没工事に従事し以て重火器部隊の通過を容易ならしめた。

九月八日所屬隊は午前十時より陽高城に對する攻撃を開始した。氏は第二小隊第二分隊輕機關銃手として本戦闘に参加し此時所屬中隊は砲兵の城壁破壊射撃を利用し敵陣地に近迫したが氏は常に勇敢に前進し午後七時中隊が猛然として突撃を敢行するや分隊長に跟随して城壁に攀登し頑強に抵抗する敵中に突入し以て城壁の一角を占領し之を確保した。午後八時敵が逆襲し來りし際は恰も所屬小隊の連絡に任じて居たが獨斷第一線に進出して手榴彈を投じ或は小銃を以て射撃する等奮戦力闘中不幸にして敵手榴彈の破片に頭部を碎かれ壯烈なる戦死を遂げた。

噫事變以來南進西走神速機敏の作戦に従ひ常に堅忍不撓頑敵を剿滅し遂に陽高城攻撃に於て獨斷機宜に適する戦闘加入並勇猛果敢なる行動に依り敵に多大なる損害を與へ玉碎し以て戦勝獲得の礎となつた。洵に武功披靡皇軍の華であつた。

宜なるかな即日歩兵上等兵に進級し後勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を授け賜はりしや。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 堀内 尙彦

氏は長野縣上伊那郡飯島村の人にして父を次郎母をちゑと稱し大正四年十二月二十八日生れで未だ獨身であつた。資性明朗にして責任觀念に富み諸事熱心であつた。昭和十二年一月現役兵として松本歩兵聯隊へ入營し日夜軍務に精勵中であつたが支那事變勃發するや遠山部隊齋藤隊に編入せられ勇躍北支戦線に赴いた。

斯くて九月上旬戰場に到着九月十六日南泊附近の戦闘に於ては吉岡少尉の指揮に屬し前衛本隊の先頭に在りて接敵し愈々展開攻撃前進に移るや勇敢に行動して當面の敵を撃破し追撃に移るや克く困苦缺乏に堪え敵を大石橋方面に急追した。翌十七日より二日間に亘る大石橋派集附近の戦闘に於ては當初軍旗護衛隊として豫備隊の位置に在りしが爾後敵の退路を遮断すべき命令を受け揚王莊東沙溝道を経て派集に入城した。此間吉岡小隊長の指揮下に尖兵の一員として常に熱心且積極的に行動し克く其任務を遂行し其後拒馬河の渡河に際しては渡河掩護小隊の一員として勇敢に行動し其任務を完了した。

九月二十一日二十二日の大册河々畔黄村附近に於ける戦闘に於ては左第一線中隊の右第一線小隊第二分隊に屬し二十一日午後十一時行動を起し二十二日午前零時四十分大册河中洲の敵を驅逐し直に右岸に陣地を占領し我を猛射する敵に突撃を敢行するや水深一米六十珊に達する本流を軍裝のみ躍り込み極めて勇敢に河岸を占領し附近の監視部隊を撃破し更に熾烈なる敵の猛火を冒して第一陣地に突撃を敢行し遂に之を占領した。爾後數線の敵陣地に突入したが氏は常に先頭に立

ち隣兵の前進を促し以て小隊の戦闘力發揚上貢献せる所甚だ大であつた。特に第三線陣地に對する突入に方りては敵兵二名を刺殺し尙も力戰奮闘したのであつたが不幸にして左側方より投擲せる敵の手榴彈の爆發に依り左肩胛部に爆創を受け最前線に於て終に壯烈なる戦死を遂げたが當時の小隊長吉岡少尉の來信に依れば斃れながら幽かに 天皇陛下萬歳を唱へ

て瞑目したとの事である。



て氏の英靈を拜み得やうか。氏の英靈は永久に生くべく氏の勳功は皇軍戦史に牢記せらるゝであらう。氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 星野定雄

氏は群馬縣勢多郡横野村の人にして父を彦太郎母をきくと謂ひ大正五年十月二十二日生れで未だ獨身であつた。資性温厚質實にして剛毅而かも度量寛大にして未だ會て外部に怒を現はした事はなかつた。昭和六年三月小學校高等科を卒業し爾後家庭に在りて農業に従事しつゝ青年學校へ通學し入營時に至つた。氏は頭腦明晰且品行方正にして小學校及青年學校在學間共に級長を勤め連續的に賞状を貰うて居た。

昭和十二年一月徴兵として高崎歩兵聯隊に入營日夜軍務に精勵し精勳章をも附與された。支那事變勃發するや野戰部隊に編入せられ勇躍北支戰線へ出動した。昭和十二年九月十日より同月十四日に亘る間は永定河々畔趙村附近の警備に下士哨として服務し或は河川偵察の斥候要員として派遣せられ熱誠慧敏に活躍し克く其任務を遂行し續いて同河畔辛庄附近の戰闘には第三小隊第四分隊に屬し勇戰奮闘し翌十五日は豫備隊となり拒馬河畔東茨村附近の戰闘に翌十六日には同河畔望海庄附近の戰闘に第一線となり翌十七日には平漢線東側地區にある西管屯の攻撃に左第一線小隊に屬し左翼より敵を包圍し常に勇猛果敢なる行動に依り戦勝の端緒を開き翌十八日より二日間所屬中隊は平漢線上高碑店附近の戰闘に敵の退路遮斷を命ぜられ行動を起すや氏は連日の戰闘並に警備の爲疲勞困憊其極に達し且糧食の給與を缺きしが僅に畑に食を求めつゝも能く分隊長の掌握下に敵彈雨飛の中に萬死を懼れず唯々君國の爲崇高なる責任觀念に燃え勇戰奮闘を續けた。嗚呼歳寒うして松柏の後凋現はれ極度の艱難重來して勇士の面目躍如たるを覺ゆる。

九月二十日より三日間は太册河々畔黃村附近の戰闘に参加し敵の右翼を包圍し黃村東南角に突入し爾後殘敵掃蕩の爲奮闘した。所屬隊は破竹の勢を以て九月二十三日から保定附近の敵を攻撃した。氏は不眠不休連日の追撃戰闘に参加し又破

勞困態を克服して下士哨其他の戰場勤務に精勵した。十月一日以降同月十二日に亘る間は石家莊附近に於ける連日の追撃戦に同月十三日から二十九日まで磁縣及漳河畔の追撃と云ふ月餘に亘る追撃戦の連続であつた。斯る神速なる作戦では輜重兵站の追隨が圓滑に行はれぬ事は申す迄もない。故に氏等の困苦缺乏たるや筆舌に盡すべくもなかつた。然るに氏等は磁縣の戦闘にも敵の左翼に對し活潑なる迂迴を行ひ爾後勇敢なる奮闘を續けて居た。

十月三十日より十一月四日に亘る間は愈々氏が殉職せる彰德附近の戦闘であつた。所屬中隊は彰德西北門の攻撃を命ぜられた。彰德は北支京漢線最後の抵抗線にして敵は防備完全を誇り城門は固く鎧され壘壁も高く全く近寄る術はなかつた。そこで西北角と西南角を破壊すべく約二時間に亘り重砲を以て破壊射撃を行つたが何等の効果もなかつた。然るに西側に二個の門ありて其北門が比較的薄弱なるを知り工兵の決死隊に依り爆破する事になつた。氏の所屬小隊は輕機擲彈筒及重砲の掩護射撃に依り分隊各個躍進を行ひ西北門の前方約二十米の凹地に近接して突撃の準備を完了した此時決死工兵隊の門扉爆破に成功したるを以て小隊長は直に突撃を命じた。氏は第四分隊に屬し敵の猛火を意とせず勇猛果敢に西北門に突入し敵兵十二三名も刺殺し殘敵を追ふて城門上に一番乗をなさんとする一刹那南北の敵より猛射を受け下顎部に貫貫銃創を受けて其場に打ち倒れた。分隊長關口上等兵は氏の耳に口寄せ星野！よくやつたサア 天皇陛下萬歳だと云ふを聞きわけ靜かに背き萬歳と呼ばんとした様子を見せたが深手の爲口が動かず瞑目した。小隊長長谷川准尉は星野は働き者だつたこんな立派な兵隊を殺して申譯がないと悲憤の涙に暮れた。

噫氏や懸軍幾百里困苦缺乏の限りを盡くして尙千里の志を棄てず常に無言のまゝで戦友を激勵し生死の境に臨みて神色自若號令一下強弓の弦を放れた矢の如く金城鐵壁早や眼中になく電光石火の早業に群がる頑敵も瞬く間に屠られ去つた。眞に是れ 勳諭に宜ふ大勇者の典型的人物とも云ふべく氏の所屬隊が百戰績々たる武勳を奏せし事も氏の拔群の功績に俟

つ所甚大であつた。宜なるかな今や護國の神と仰がれ餘榮一門に及ぶ洵に謂ある次第である。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵上等兵勳八等功七級 紅 孝 昌

氏は福岡縣京都郡行橋町の人にして父を壽喜治母をミヨと稱し大正七年三月二十日を以て生れて未だ獨身であつた。資性温厚寡言にして慈愛の念に富み老人小供より親まれ且つ酒も煙草も嗜まず敬神の念厚く小閑を得るときは神社佛閣に参拜旅行をなし以て自ら樂みとしてゐた人格者である。昭和七年三月高等小學校を卒業し續いて補習學校に學ぶこと一年更に私立簿記學校及夜學等にて修學を積んだ。其の後家庭に於て家事の手傳をなしつゝ尙も青年訓練所に入り學術を修業し斯くして年齢漸く長じ十九歳にして憧憬れの現役志願をなし合格の上昭和十二年一月野戰重砲兵第五聯隊に入營教練に勤務に勉勵し後命ぜられて無線電信教習所に派遣せられ通信教育を受けたが支那事變の爲め原隊に復歸し昭和十二年八月征途に就き遠藤部隊安心院隊に屬して北支方面の戦闘に参加した。先づ九月七日より同四日に亘る永定河附近の戦闘に於て氏は第三分隊三番砲手として常に火砲材料の愛護に努め陣地に就くや敵彈雨飛の間に危險に晒されつゝ沈着正確に射撃操作を實施し有効なる射撃を送つた。次いで九月十五日以降固安附近の戦闘に於ては第四分隊三番砲手として九月十六日午前十時二十分固安城壁破壊のため同城北側約四百米附近の陣地に於て射撃を開始するや敵彈雨注の下勇敢機敏に操作中偶々一番砲手が敵砲彈のため重傷を負ふに至り直に之に代り迅速確實なる操作を以て正確なる射撃を實施し中隊長の指揮を容易ならしめ城壁破壊を完成し友軍歩兵の突撃路を開撃以て戦捷の端緒を開き拔群の功を奏した。更に九月二十一日より同

二十四日に互る保定附近の戦闘に於ては三番砲手として参加し愈々保定攻撃に際しては敵前千二百米附近に陣地を占領し敵弾の下火砲の威力を發揚し敵をして重要都市を棄て逃走の已むなきに至らしむるに貢献する處大なるものがあつた。次で又九月二十五日以後敵を追撃前進中も火砲材料の愛護に努め正定及滹沱河に據る敵を攻撃する爲め十月七日午前七時行動を開始し西澤村東北側に陣地を占領して奮戦射撃の成果を擧げ翌十月八日午前十一時頃羅家庄に向ひ陣地變換の際敵陣地の東北方約三百米に至るや突然難路に遭遇し火砲の運行遅々として進まず敵弾は右方より雨の如く集中したが各員協力一致勇敢に道路の補修に或は砲車の臂力推進援助等にあらゆる手段を盡して火砲の前進に努め中隊長の意圖を體して迅速機敏所望の地點に陣地占領を完了し續いて射撃開始となるや正確なる射撃操作と新陣地の恰適と相待つて射撃の効果を増大し歩砲協同の實を擧げ以て大林濟及び丁家庄の敵を撃退せしむるに資した。而して正定の陥落により京漢線に沿ふて敵を追撃し行軍に宿營に火砲材料の點檢手入保全に遺憾なからしめ斯くていよ／＼彰徳附近の戦闘には第三分隊三番砲手として十一月三日明治節の日を以て彰徳攻撃に参加し午前六時霜を踏んで行動を開始し辛庄に陣地を占領して午前七時戦闘を開始したが此時敵は棉畑及び壕を巧に利用し三四百の兵力を以て右側に迂回し我砲兵陣地を襲はんとして近接して來た。故に於て第一分隊長は直に此敵に對して應戦零距離射撃をなすこと數發而も敵は益々後方より増加し我に一齊射撃を加へ爲に我第一分隊砲手は半数の負傷者を出して缺兵となり射撃能力の減殺を生じたので氏は分隊長の命により直に援助



に赴き彈丸飛の間に着剛際に操作し射撃を繼續中偶々敵弾命中し腹部に首管銃創を受けたが其の重傷に屈せず苦痛を忍び操砲を續行せんとしたるも力及ばず「私は大丈夫です」と云ひつゝ衛生隊に收容せられたのである。本戦闘に於て敵は我に近接し砲兵としては最後の零距離分畫の射撃をなし果卵の危機に瀕し從容として正確なる射撃により敵に多大の損害を與へ遂に之を撃退したるため戦闘を有利に轉換し戦捷の因を作りたる氏の功績は拔群である。然るにいたましくも十一月五日を以て北支の花と散つた。所は彰徳衛生隊内である。

氏や北支上陸以來數十日其の踏破せし道程百五十餘里。此間幾度か奮戦力闘繼かに二十歳の身を以て河北の花と散る。哀惜眞に極まりなきも氏が赫々拔群の功績は一死の榮と共に永く聖戦史上に薫るであらう。即日氏は砲兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍航空兵上等兵勳八等功七級 戸田芳之助

氏は東京市芝區芝浦町の人にして明治四十一年十月十六日生れ 父を八百藏母をつると云ひ妻はく子との間に一子恒雄がある。資性温順品行方正大正十一年三月尋常小學校を卒業後神田商業學校へ入學し同十五年三月同校を卒業し爾來家庭に在りて家業に精勵して居つた。支那事變勃發するや昭和十二年七月大島部隊に應召し勇躍北支戦線へ出動した。斯くて南口鎮戦線より宣化を經由長城戦に参加して第一線部隊に強襲糧秣輸送の大任を果し爾後山西省の戦線に活躍した。此間氏は毎戦率先危険を冒して第一線に出入し車輛の手入に難路の克服に黙々とし至誠報國の一途に邁進した。

九月二十四日所屬部隊は直接第一線部隊に協力すべき命令を受領し勇躍出發準備を整へた。翌れば二十五日夜來の豪雨

全く晴れ朝陽肌寒き日であつた。第一線は至急増援の來着を渴望しある状況にして所屬中隊は新銳の歩兵部隊を滿載し午前九時出發靈邱縣小寨子に向ひ前進した。午前九時十五分隘路にさしかゝるや突如正面より約數十名の敵部隊より猛射を受けた。之れなむ昨夜豪雨を備いて我軍の後方に迂回潛入せる敵正規軍約一ヶ旅の一部隊にして既に陣地を構築して之に據り我軍の後方連絡を擾亂せんと企圖せるものであつた。茲に於て全員下車直に應戦したが敵の兵力は十數倍を算し激戦



數時間午後零時四十分辛うじて敵の重圍を突破し得たのである。氏は此際第三小隊第十三分隊貨車第二六三號の操縦手であつたが小隊の左翼火線に参加して勇猛果敢に奮闘し熾烈なる敵の十字火をも意とせず堂々優勢なる敵に多大なる損害を與へて居つたが惜いかな午前十時頃兇彈飛來頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。然かし氏等の奮戦に依り第一戦の直後に在りし砲兵諸段列並に大小行李は虎口を脱し安全地帯に移動を終つた。氏や八月中旬豊臺に下車以來殆ど不眠不休晝夜兼行惡路と闘ひ殘敵を掃蕩し以て曠漠たる北支の山野に軍需品の輸送に従事し以て第一線部隊の戦力を培養したるは偉大なる勳功と謂はねばならぬ。而して氏の本職は自動車の操縦に在りて戰闘教練に至つては正規訓練を受けありしやを疑はるゝにも拘らず以上の如く最後迄奮闘し得たるは是れ全く氏の純忠報國の至誠より迸れるものにして其崇高なる犠牲的精神は眞に軍民の鑑とすべく其功績は山西皇軍戰史に牢記せらるべく氏の名は千古に語り傳へ其英靈は永世に生き其高邁なる精神は愛子の嗣に牢固として刻みつけられ尙遺族の多幸を加護するであらう。

氏は即日航突兵上等兵に進級し勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等歩勳八等功七級 烏塚 武 德

氏は埼玉縣大里郡鉢形村大字露梨子の人にして父を茂助母をきよと云ひ大正五年八月十九日生れで母は既に歿し家族としては父と四人の姉弟がある。資性温順にして昭和六年三月鉢形小學校高等科を卒業し青年學校在學中昭和十二年三月支那駐屯歩兵聯隊に入營した。



昭和十二年七月七日蘆溝橋事件突發するや安達部隊に屬し直に出動し八日我軍は敵の傲慢なる挑戰に止むなく遂に敵を攻撃するに至つた。此時安達部隊は中央第一線として平坦地を前進せる關係上敵の猛烈なる射撃を受け前進困難に陥つたが氏は輕機關銃手として巧に地形地物を利用して前進を続け其間我中隊を斜射しある敵輕機關銃を發見し之に猛射を浴びせて中隊の前進を容易にした。敵は我が猛攻撃に終に動搖を初むるや所屬中隊は直に敵の正面及左側より突撃を實行して之を撃退した。續いて中隊が戰場追撃を始むるや氏は腰をも沒する永定河に率先躍り込み右岸より發射する敵の猛射を物ともせず頭上高く銃を差上げ渡河して右岸に達し此時三軒家附近の敵は頑強に抵抗したが氏は直に之に猛烈な射撃を浴びせ小隊の右岸進出に貢獻する所大なるもの

があつた。小隊は渡河後續いて前面の敵を攻撃し遂に突撃し全員奮戦格闘の上敵に多大の損害を與へて西北方に潰走させ此追撃に氏は其輕機關銃威力を最高度に發揚し多大の損害を敵に與へたが午前六時三十分頃惜しくも左下顎に貫貫銃創を受け終に壯烈なる戦死を遂げた。

氏や義勇奉公の念に燃え今大事變の勃發するや直ちに參戰一死を鴻毛の輕きに置き奮闘す殊に其の最期に於ける勇敢機敏の行動正確なる射撃は大に皇軍の威武を宣揚し頑敵を敗走せしむるに與つて力ありしものにして其の功績たるや拔群偉大である。たとへ身は永定河畔の華と散りしと雖も氏の英名は千載に誦はれ其英靈は永久に生き護國の神座に鎮まり皇國の將來並に遺族の前途に慶福を垂るゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 毒島 都 夫

氏は群馬縣桐生市廣澤町の人にして父を源三郎母をマサと云ひ大正五年十月八日生れで未だ獨身であつた。資性温順にして寛容人と争はず克く家事に精勵し近隣の模範青年であつた。昭和七年三月廣澤小學校高等科を卒業し昭和十二年高崎歩兵聯隊へ入營し同年五月選拔せられて千葉縣陸軍歩兵學校に入校したが間もなく支那事變の爲原隊に復歸し森田部隊に屬し勇躍北支戦線に出動した。

氏は第一歩兵砲隊砲馬馭兵を主任務として本事變に参加した者であるが九月十五日に於ける永定河渡河準備間は率先馬匹の調教に終た檢査訓練支隊への連絡及夜間巡視等に常に積極的に任務を遂行し又所屬部隊の敵前渡河に當りては泥濘

路を渡する難路の中に克く馭兵の手腕を發揮し無事渡河するを得た。愈々攻撃を開始するや氏は悪路と夜間行動とに悩まされつゝ馭兵として克く其本分を盡し東茨村に達し陣地占領後は十一番砲手として砲馬監視の命を受け服務中俄然敵は左側方より我砲隊陣地に猛烈なる集中火を浴せ來り友軍の負傷者續出し其彈藥補充亦意の如くならざるを見たる氏は敢然起ちて該敵を猛射し遂に之を沈黙せしめ友軍を苦境より脱せしむるを得た。

九月十六日所屬隊は午前七時行動を起し午前二時三十分拒馬河の敵前渡河を完了し午後二時四十分河西務南端の敵を攻撃する目的を以て先づ第二大隊の渡河掩護の爲協力射撃を開始した。此間氏は門橋渡河に依る馬匹渡河掛を命ぜられた。折柄敵は河西務東端拒馬河左岸に據り時々有効なる阻止射撃を行ひありし爲所屬隊の渡河も意の如くならず茲に於て所屬小隊長は獨斷大隊砲を以て敵を制壓し其間斷を利用しつゝ渡河中であつたが所屬大隊主力は既に望海庄西端に進出しておりて氏の小隊に速かなる追及を要求して來た。時に午後四時にして氏は敢然馬匹五頭を門橋に搭載し敵彈下に渡河せしめ且最先頭に立ちて小隊車輛場へ誘導中望海庄西南方より部落に陰蔽しつゝ飛來せる敵機の爆撃を受け望海庄北方五百米附近に於て腮部に爆傷を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。



當時の敵は支那中央軍にして健氣にも最後の一兵までも奮戦し銃を棄てゝ組付來るもあり十五日正午頃よりは續々後方より増援兵も來着し十六日拂曉渡河せる友軍中には上陸と同時に白兵戦となり殆ど全滅の損害を受けし部もあつた。又十

六日午後四時頃には空陸相呼應して果敢なる逆襲を試むる等極めて頑強執拗なる抵抗を試みたのであつた。氏は斯る壯烈なる渡河戦闘間常に旺盛なる志氣を以て積極的に任務を遂行し所屬隊の任務達成に寄與せる所甚大であつた。是れ全く純忠報國の至誠より迸れる行動であつて其職務の何たるを問はず天晴軍人の龜鑑たるものと謂ふべきである。氏は聖戰の尊き犠牲となつたが其功績と其高潔なる精神は不朽に生き必ずや皇軍將兵に尊き感激を與へ且之を擁護するであらう。

嗚呼氏の英靈は護國の神、家門の守護神と祀られ其名は萬世大和櫻と共に咲き匂ふであらう。
氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 奥田 最治

氏は鳥取縣八頭郡國中村の人にして父を勇藏母をまさと云ひ明治四十四年七月廿四日生れで未だ獨身であつた。資性濃厚篤實にして氣概に富み不言實行良く家業に勵み父母を扶けて孝養を盡し病兄を慰め弟を慈しみ家政を輔佐する等一家の中堅であつた。殊に廢家に等しき住宅を移轉改築せんと決意し數ヶ月に亘りて専心自力を以て材料を蒐集し其基礎工事の半ばにして今次事變に召集せられたるは一家の打撃であつたに違ひない。氏は大正十五年三月國中學校高等科を卒業し昭和六年三月國中農業補習學校を卒業尙昭和三年十月以來國中青年訓練所の教育を受け昭和六年十二月同所研究科を終了した。

昭和七年一月歩兵第四十聯隊へ現役兵として入營滿洲事變に出征して勳八等に叙せられ昭和九年四月歩兵一等兵を以て歸休除隊となつた。支那事變起るや八月下旬長野部隊に應召第三中隊に編入せられ勇躍征途に就いた。所屬部隊は昭和十

二年九月十九日早林庄附近の敵を撃破し九月二十二日人合庄の堅陣を奪取し九月廿三・四日には東花園附近の陣地を攻撃した。氏は之等の戦闘に参加し克く奮闘し所屬中隊の赫々たる戦勝に寄與する所甚だ多かつた。就中東花園の戦闘は氏の死力を竭くして戦へるもので拔郡の武功を奏したものであつた。抑々東花園は滄州陣地帯の主陣地の一部であるが此地帯は津浦沿線中敵が最後の抵抗線と恃み巧に地形を利用して水壕塹壕鐵條網を縦横に設け要點にはトーチカを構築し各種近代火



器を配置し皇軍を陣地前に撃滅すべく企圖して居たのである。氏は第二小隊第二分隊小銃手として東花園主陣地前鐵條網破壤口の死守並に前方の敵情搜索の任務を受け決死の覚悟を定め廿二日の黄昏近き午後五時三十分を期し所屬分隊長と共に破壤口の前方三十米の地點に進出して同地を占領し敵情搜索に任じありしが敵は三方面より手榴弾を投擲し逆襲に轉じ所屬隊内に負傷者續出したが頭として同地を死守して應戦し敵に多大なる損害を與へて遂に之を撃退し其企圖を挫折せしめた。氏の戦友よりの通信に基き當時の戦況を補綴すれば氏の所屬隊が敵前約六百米に前進せる時幅五米深三米の水壕に遭ひ其水壕の直後十米に鐵條網があつた。中隊主力は水壕を渡つて鐵條網の破壤に従事し中隊の小隊は少しく前進して鐵條網を渡り水中に設けありし鐵條網を切斷し勇敢にも二三十米も進出して居た。敵は友軍の接近を知り手榴弾を水壕目かけて投擲した。忽ち壕内は水煙と爆煙に掩はれた。今の今まで猛射中なりし右前方の敵は突然退却を初めた。やがて物淋しく突撃喇叭を吹奏しつゝ敵は逆襲に轉じて來るのであつた。氏は所屬小隊に在りて全火力を擧げて逆襲部隊を猛射し遂に之

を撃退した。之より氏は決死斥候となり五、六米も前進すると敵は再び手榴弾を猛烈に投げつけたが氏等は勇敢にも迅速に第二水壕に飛び込めば視を定めありし敵はあなや引鐵を引かんとする瞬間戦友等は一斉射撃を浴びせ此敵を射殺した。敵は益々猛烈に手榴弾を投擲し逆襲を反復し來りし際不幸にして一弾は氏の頭上に炸裂し戦傷を負ひ其場に倒れ勇敢にも陛下の萬歳を唱へ起上らんとするを戦友に支へられて手當を受け後送されたが惜くも九月三十日第三野戦病院に於て華北戦線の華と散つた。

氏の家郷を顧みれば弟則巳も今事變に出征しあるを以て孝心深き氏には露營の夢にも老いたる父母の姿が現はれたであらう。されど大義親を滅せる氏は難局に直而して自ら決死斥候をも申出でた。萬死の苦境にも毅然として守地に止まり最後まで敵を猛射し所屬隊の危急を救ひ戦捷の途を開いた。寔に是れ軍民一般の龜鑑であり其功績は皇軍戦史に永記さるべく其名は千古に芳ばしく其英靈は不滅に生きるであらう。今や尊き氏の一生は幕を閉じたが家人の謂ふが如く氏が丹精せる新宅最初の先祖として又一家一門の守護神として其繁榮を加護し強き力と清き光とを授け與へるであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 恩田・一雄

氏は東京市江戸川区松本町の人にして父を岩次郎母をつぎと云ひ大正五年九月九日生れで未だ獨身であつた。昭和三年三月東京府下鹿本小學校の尋常科を卒業して爾來農業に従事し昭和十二年一月歩兵第三聯隊留守隊へ入隊同月滿洲派遣部隊に編入せられ今次の東戦に參する事になつた。

事變勃發と共に七月二十九日迄齊々哈爾の警備に任じ七月三十日より八月十六日迄は天津地方の殘敵掃蕩の諸勤務に従事した。即ち八月三日乃至六日間は將校斥候要員として武清附近の敵情搜索並に之が掃蕩に任じ。同七日乃至九日の間は開平附近の敵武裝解除に従事し七月九日乃至十二日迄は歩兵第〇聯隊に配屬せられ右第一線となり獨流鎮の敵を攻撃して之を撃攘し爾後同地の警備に服した。



八月十七日乃至二十二日間は外長城の戦闘に參加した。即ち二十日「トーチカ」陣地の攻撃に方りては小銃手として奮闘し午後七時之を占領し二十一日には制高地點に設けある「トーチカ」主陣地に對し小銃手として奮戦午後七時之を占領續いて長城に沿ひ敵を追撃した。皇軍作戦の神速果敢たるや眞に夏空の電にも似て昨日は南に今日は北に震天動地の活躍を見せた。思へば酷熱鐵をも焔かさむ隆暑に堪え金城鐵壁と頼む堅壘を屠り而かも補給も思ふに任かせぬ實戰場裡に赫々たる武動を奏せる所以のものは氏の如き忠誠勇武の將兵ありて初めて之を具現し得るのである。

八月二十三日乃至九月五日の間は更に戰略上の要點張家口の戦に參加した。即ち二十三日には土井子東方高地上に於て優勢なる敵の包圍攻撃を受けたが氏は左第一線小隊に在りて奮戦し敵に多大なる損害を與へて之を撃退し翌廿四日にはナマコ山の敵陣地の攻撃に參加し勇猛果敢なる動作に依り之を攻略し次いで南天門に向ひ前進中同門東方高地上に於て優勢なる敵の包圍攻撃を受けたが勇戦奮闘遂に之も撃退して廿七日張家口を占領殘敵の掃蕩に従事した。

九月六、七日兩日は天嶺附近の戦闘に参加したが氏の所屬小隊は軍旗護衛の重要勤務に服した。九月八日は氏の最終戦場なる陽高附近の戦闘にして當日陽高城壁に對する我砲兵の破壊射撃を利用し午前十時第一線諸隊は勇躍攻撃前進に移り氏も亦小銃手として第一線小隊に加はり午後七時所屬中隊が愈々突撃を敢行するや分隊長と共に勇躍城壁を攀登し城壁の一角を占領之を確保した。爾後掃蕩班に尾し頑強に抵抗する敵に手榴彈を投じつゝ之を撃退し逐次南方へ前進した。然るに敵は午後八時及午後十時の二回に互り逆襲して來た。氏は之に猛射を加へて之を撃退し次いで所屬小隊と共に前進し陣地を占領し工事の増強に努めた。同夜十二時頃優勢なる敵は迫撃砲及機關銃を猛射しつゝ正面及城壁内側方面より喊聲を擧げつゝ猪突猛進して來た。氏は沈着勇敢に近づく敵に手榴彈を投げつけ更に小銃を猛射して多大なる損害を與へた。惜しい哉此奮戰間氏は腹部首貫銃創を受け倒れた。後陽高臨時關東軍野戰病院に收容され手厚つき治療を受けたが九月十二日遂に同病院に於て殉難の華と散つた。

即日歩兵上等兵に進級し勳八等白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を授け賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 岡本 信次

氏は兵庫縣加古郡天満村の人明治三十六年九月廿九日の生れで亡父を助市母をイチと云ひ妻かじとの間に三千代及明美の二愛子がある。氏は性誠實にして剛健であつた。大正六年三月天満小學校高等科第一學年を修了後退學した。

昭和十二年支那事變勃發するや七月二十九日應召兩來繁敷なる動員諸業務に衛兵勤務に將た補充隊の諸勤務に關し献身的努力を以て日夜軍務に精勵し其成績優秀であつた。

昭和十二年十月八日沼田部隊に編入せられ勇躍征伐に就き津浦線の戰場へ補充せられたのである。

斯くて十一月一日所屬中隊へ急遣し十一月四日馬廠附近の戦闘に参加し勇猛果敢に奮戦し敵に多大なる損害を與へた。

十一月十三日所屬中隊は敵を撃破して南進中午後四時三十分三官庄附近に於て敵と遭遇し午後十時之を撃退するを得た。當日氏は路上斥候を命ぜられ夏口嶺方面に向ひ前進した。折しも砲を有する有力なる敵と遭遇した併かし氏は躊躇する事なく所屬分隊長等と共に猛烈果敢に正面より此敵を攻撃した。



此勇敢なる牽制行動は美事に成功し主力部隊をして包圍の目的を達成せしめ遂に敵に殲滅的打撃を與へる事が出来たのである。然かし

悲しいかな氏は此戦闘に於て肩口より胸部にかけ首貫銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。氏は既に後備役の終末期に近づき一家の柱石として前途幾多の重責を荷うて居つたのである。常人ならば理智に長け成るべく危険を避け生命を全うして無事凱旋を胸算する者も皆無とは稱し得まい。されど義は山岳よりも重く死は鴻毛よりも輕しと覺悟し唯々一途に軍人の本分たる忠節を心とせる氏は既に生死を超越して居つた。任務の命ずる所水火の中に飛び入るは云はずもがな命を的に勇戦奮闘の結果偉大なる戦果を友軍主力に收めしめたのである。皇軍の強味は實に氏の如き忠誠勇武の士に依つて堅持せられるのである。

氏の愛子等は高潔なる氏の精神を承け嗣ぎ父が生命の延長として自重するでもあらう。郷人は後世永く語り傳へて高き勳を讃へ村の誇りともするであらう。一般軍人は軍人の龜鑑として皇軍の精神教育の資料ともなすであらう。洵に是れ氏

は輝かしき大生命に生くる人と謂はざるを得ない。
氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 岡 森 利 一

氏は兵庫縣城崎郡清瀧村名邑の人にして亡父を芳蔵母をいゑと云ひ大正三年六月五日四男として生れ未だ獨身で在つた。資性寡言にして濃厚忍耐力強くし恪勤精勵なる實行家であつた。昭和三年四月高等小學校を卒業し爾後専ら家業を手傳つて居た。昭和十年一月現役として鳥取歩兵聯隊に入營し翌十一年七月歸休除隊となつた。昭和十二年七月支那事變勃發するや同月直ちに應召長野部隊に編入せられ北支方面の征途に就いた。北支上陸後は打撃ける豪雨に至る所出水し道路は泥濘膝を没するの状況に其行動頗る困難なりしが氏は克く困苦缺乏を征服して之に堪へ斯くて九月七日より十二日に互る馬廠附近の戰鬪に於ては田卷隊第一小隊第二分隊に屬し九日夜十一時四十分姚家屯を出發し十日午前三時半敵陣前三十米に迫り夜襲を決行した。馬廠附近の敵陣地は敵が長時間を費し堅固に構築し其直前には深さ數尺の水濘あり氏は小隊長に續いて勇敢に濘を涉り續て白刃を閃かし敵の第一陣地に突入した。此際敵は其得意とする手榴彈を盛に投擲したが之



に屈せず怯まず突きまくり逃ぐるを追つて遂に小玉莊部落を占領した。次で天將に明けんとするや氏は直に民家の家根に登り敵情を監視して居た。然るに暫くにして優勢なる敵現出鼓噪逆襲し來りしを以て氏は近くにありし古川准尉の指揮を受け此の逆襲する敵に向つて猛烈に射撃し多大の損害を與へた。斯くするうち氏は左腕に貫通銃創を受けたが毫も屈せず鮮血流るゝ儘に射撃を續行した。不幸更に頭部に貫通銃創を受け復立つ能はず銃を握りし儘壯烈なる戦死を遂げた。

氏や寡言黙行陣中克く困苦缺乏に堪え戦ひに臨んでは殊に勇猛果敢奮闘會て人後に落ちず。
其の逆襲せる頑敵に對し應戦屈せず一彈又二彈鮮血淋漓銃を手にせる儘北支の花と散る壯烈何を以て較せん。
氏の勇名や其の拔群の功績と共に必ずや永く青史の上に輝くであらう。
氏は即日歩兵上等兵に進級次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 大 澤 金 藏

氏は青森縣三戸郡斗川村大字斗内字夏焼の人にして大正四年一月十九日に生れで父を長兵衛母をそよと云ひ妻けなるとの間に一子健衛がある。性極めて濃厚篤實で昭和三年三月大舌尋常小學校を卒業し續いて青年學校に入り模範生徒として學友の信頼を受け亦家に於ては克く父母に仕へ農業に精勵した。昭和十一年青森歩兵聯隊に入營したが軍務に勉勵し將來ある軍人として郷黨に期待されてゐた。

昭和十一年五月北支派遣軍として駐屯軍に編入せられ其出發前日には郷里の青年學校を訪づれた時恰も生徒の教練實施中であつた爲氏は直に其の列中に入り範を示して後進生徒を激勵した事は今尙郷黨の語り草になつて居る。

氏は北支駐屯軍編入後一等兵に進み熱心軍務に勉勵して居たが昭和十二年七月蘆溝橋事件が突發するや鹿内部隊に屬し七月八日永定河左岸の敵陣地の攻撃に當つた。此際氏の所屬分隊は鐵橋北方堤防上の敵を攻撃したが氏はよく分隊長の命に従ひ勇敢に奮戦し躍進又躍進遂に同陣地の敵を撃退した。續いて永定河右岸の敵を追撃し鐵橋西側の敵陣地に向つて猛烈に前進した。此時氏は中村一等兵及小川二等兵と共に分隊長小島上等兵より敵の左翼を包圍する如く前進する操命



にして其功績披群と謂ふべし。

今や氏の英靈は護國の神座に鎮り將來永く皇國と遺族の上に慶福を垂るゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

ぜられ氏等三名は巧に地形地物を利用しつゝ前進し此時我が小隊も近く敵に迫りければ氏等三名は勇敢に一舉敵陣地左翼に突入奮戦格闘敵數名を刺殺したが其時突然敵の輕機銃の猛射を受け不幸氏は胸部に貫貫銃剣を受け遂に惜くも其場に壯烈なる戦死を遂げたのである。

氏や實直精勵前途有爲の士今次の聖戰に際し劈頭より之に従ひ勇戦奮闘克く其の任務を遂行す。不幸敵彈を蒙り永定河畔に落花の最期を遂ぐ哀惜何ぞ堪えん。然れども氏が一死の忠は隊員の志氣を昂揚し其の勇敢なる行動は友軍快勝の果を結ぶに與つて力ありしもの

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 小川 一、二、三

氏は栃木縣足利市藤町一丁目の人にして亡父を島吉母をすいと云ひ大正二年十二月十一日生れて未だ獨身であつた。大正十四年三月足利市西尋常小學校を卒業し家業に従事してゐた。幼にして父を喪ひ母の手一つで養育せられ姉は他に嫁し



親一人子一人の家庭であつた。性質温順にして母に對する思ひやりは涙ぐましいもので工場で貰ふ給金も又在營中の給料も大部分は母に送金して居た。十七歳の時上京豊島區池袋三丁目宇佐美防水布工場に入り勤続六年勤務成績優良にして賞状を受け又池袋青年團に入團其の精勵は衆の認むる處となり團旗手の名譽を擔ひ昭和九年一月現役兵として宇都宮歩兵聯隊に入營同年十一月満期となつた。支那事變勃發するや昭和十二年八月應召北支方面の征途に就き上陸後は直に戦線に出で連日の追撃後九月十八日には北義安に據る敵を攻撃し次で九月二十一日には尖兵中隊に在りて所在の敵を撃破しつゝ前進し下柴口南側高地の攻撃に於ては敵の猛射を受けたるも身を挺して前進し急峻なる高地を駆け登り敵陣に突入之を撃退し敗走する敵を追撃して舫上部落に至るや再び敵の抵抗を受けしが勇猛果敢に攻撃して遂に同部落を確保した。其勇敢なる行動は中隊戦闘を極めて有利に進展せしめたものであつた。同部落占領後直に王谷莊附近の大冊河渡河點に前進敵の猛火を冒して同點を占領し敵情監視或は警戒勤務に服し續て二十二日午前二時所屬中隊は大隊の右第一線として王谷莊

堡北側陣地向ひ夜襲した。其際は夜暗大冊河を渡渉し水雷を排除し或は鐵條網を破壊し且敵の銃砲火の斜射側射を受け戦友多数相ついで喰れる状況であつたが氏は其中を勇敢に身を挺して前進突撃した。此時敵機銃は猛烈に我を掃射し爲に氏は遺憾にも頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。此日の氏の勇敢なる行動は所屬中隊の志氣を振作し又頑敵を震撼して戦勝の素因をなしたものであつた。

氏の絶命せんとするや幽かにも「家の方によろしく云つて下さい」と頼み而して苦しき息の下より 天皇陛下萬歳を唱へ瞑目した。陣中家郷を思ふ女々しいと云ふ勿れ其短き言の葉の中には嚴肅なる死の前に唯一人の母に無限の感謝を捧げ且其多幸を祈る言葉である斷じて死を惜む言葉ではない。否らずんば何でう氏の如き勇猛果敢なる行動が出来やうぞ。而して 陛下の萬歳を奉唱して絶命せる氏の心境は正に神の姿であつた。氏こそは至孝の子であると共に純忠の臣であると云ふべきである。嗚夫れ人世限あり名盡くるなし氏の英靈は護國の神一家の守護神として永世に生き清く尊く加護を與ふべく其軍功は皇軍戦史に光彩を放ち天晴忠臣孝子の鑑と仰がるゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 小田 頼之助

氏は兵庫縣栗栗郡下三方村福知の人にして大正五年五月二十日に生れ幼にして母は死別父には生別して祖母はやの手に養育せられ未だ獨身であつた。性純真にして祖母に仕ふる孝養は眞に涙ぐましいものであつた。昭和四年下三方尋常高等小學校高等科を卒業在學中は學業操行優等にして級長又は副級長を以て終始した。續て三方村青年學校に入學成績優良に

して業の模範となり昭和十一年十二月同校研究科を修了した。翌昭和十二年一月現役兵として鳥取歩兵聯隊に入營し同七月無線電信教習所に派遣せられたが事變のため同年八月長野部隊に屬し北支方面の征途に就き九月十三日より同二十四日に亘る滄縣附近の戦闘に於ては第六中隊第一小隊第四分隊兵として二十一日午後六時攻撃前進を起し人合庄の敵陣地を攻撃するや地物を利用して巧に敵に近接し水濘及び鐵條網を突破し熾烈なる敵火を物ともせず敵陣地に肉薄し突撃に際して



は分隊長に續いて果敢に敵陣に突入して之を奪取し更に部落内の敵を撲滅して南部人合庄に進出した。次で二十三日午後六時より姚官屯の陣地攻撃を開始し翌二十四日午前四時愈々中隊が突撃に移るや猛烈果敢に敵陣に突入した。此時小隊長は負傷して倒れたるを以て氏は身を以て小隊長を庇ひ繻帯を終つた時氏も亦不幸にして胸部に手榴弾創を受け壯烈なる戦死を遂げた。本戦闘に於けるその勇敢なる行動は拔群にして功績は赫々たるものがある。氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

氏は家庭の情況前記のやうでありその孝心は眞に人を感動させるものがある。戦死の数日前即ち九月十六日附を以て祖母に寄せたる書信の一節を擧ぐれば「……愈々第一線に出て戦ふ事になり中隊長殿を初め全部戦死をするのだから今の内に家へだれも遺言と髪のもや爪を切つて送るやう申されましたので……只今迄二十年の長い年月苦勞を重ねて只自分の成長を樂みに老の身を厭はず色々と育て下さつたのに何の幸か不幸かこんな事になりもう永遠にお別れせねばならんとは

然しこれも前世の因縁因果とあきらめて下さいお國の爲大君のため捨てる命は惜しくはありませんがおばあさんの事の上の事を思へば死んでも死にきれません自分が成長してヤレ／＼と思はぬ中にこんな事になり今日といふ楽しいうれしい日はなくおばあさんを満足させる事もよふせず今日まで育て下さつた御恩返しも致さず先立たねばならん自分の心中をお察し下さいそしてその罪はドウゾ悪い因縁とあきらめてドウゾお許し下さいこれはみんなお國の爲ですもの今迄何返もお寺で聞いてゐるやうに死んで行く先は彌陀の世界で未來では共に／＼手を取りて楽しく暮せませう御祖父様や御母上、弟等も彌陀の淨土で待つてゐて下さるので自分の死んで行く未來は彌陀の世界お阿彌陀様のもとへ參らして頂けるのだと思へば少しも淋しくはありません……然しもし自分が戦死するやうな事があつてもキツト／＼前の手紙にもかいてゐたやうにおばあさんはみほとけ様よりいたゞいた壽命だけは長く生き長らへてお祖父さんやお母さんと共に自分のほとけを祭つて下さい決して／＼早まつた考へを起して下さらぬやう呉々もおねがひ申します……尙哀切な情は綿々として綴られてゐる。

彼の李令伯が陳情表に述べた母孫の情愛以上のものがある。教育者又は父兄達は本文を熟讀せられ世の不孝の子弟を翻然悔悟せしむる資に供せられたならば河北の華と散つた氏は永久に皇土に甦る譯である。

陸軍騎兵上等兵勳八等功七級 岡崎節志

氏は兵庫縣神崎郡香呂村廣瀬の人にして父を秀吉亡母をりよと云ひ大正四年十二月二十二日生れで未だ獨身であつた。昭和六年三月香呂尋常高等小學校高等科を卒業し同年四月香呂村青年學校本科第三學年に入學し入營時に及んだ。資性

快活俊敏にして現役志願として昭和十一年一月姫路騎兵聯隊に入營し同十二年七月支那事變勃發するや間もなく北支方面の征途に就いた。やがて八月二十四日より九月十七日に亘る津浦沿線の戰闘に於ては中井支隊に配屬せられ主として子牙河々畔に活動し九月十二日孫河附近の戰闘には第一小隊長井上准尉の指揮に屬し第一線に在りて勇戦し九月十五日中趙扶附近の戰闘に於ても亦第一線に在りて敵攻撃に參與した。斯くて九月十八日より二十七日に亘る滄縣附近の攻撃に於ては



出水泥濘の惡路を跳し屢々將校或は下士斥候員として積極勇敢に行動し斥候長を輔佐して其任務を達成せしめ又宿營の際警戒勤務に服してよく其任を完了した。次で九月二十七日より德縣に向ふ追撃に於ては急速なる追撃戰闘のことゝて敗殘兵横行し危險甚だしき地域に屢々搜索或は警戒勤務に服し克く其任を全うし二十九日蒼房附近の戰闘に於ては再び第一線に在りて奮戦した。更に又十月一日趙庄附近の戰闘に於ては稻波大尉の指揮に屬し右第一線小隊の右翼に在りて攻撃前進せしが敵の猛射を受け爲に小隊の前進困難となるや獨斷巧に敵火を潜り身を挺して小隊の前進を誘起し斯くして小隊が敵の左側背五十米に達せし頃敵陣地直前の死角内に奮進突入の機を窺つて居た。而して愈々小隊が突撃に移るや氏は眞先に敵陣に突入格闘の上敵數名を殲し遂に干家庄東端を占領し分隊長安尾軍曹の指揮下に在りて部落の掃蕩に任じ敵二名を刺殺し更に家屋内に潜む敵に對し突撃を敢行した。然かし此際不幸にも敵彈命中し茲に氏は惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。

氏の戦歴に徴するに氏や尋常一様の勇士にあらずして熟慮而も俊敏機を失せず克く衆を誘導し綽々として餘裕の存する
あるを見る。

而して其剛膽猛烈なる奮闘振りは即ち全員の志氣を鼓舞し敵に多大の損害脅威を與へ延て所屬隊戦勝の因を作したるも
のにして其の功績は拔群である。今や氏の雄姿に接する能はざるも其赫々たる武勳勇名は皇軍戦史に輝き其忠魂は永へに
護國の神として皇國を守護するであらう。

氏は即日騎兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵上等兵勳八等功七級 大山信義

氏は茨城県多賀郡關本村の人にして父を由三郎母をユキと云ひ大正五年七月十七日を以て生れ未だ獨身であつた。昭和
六年三月關本第二小學校を卒業し同九年關本第二農業青年學校へ入學せしが都合あつて中途退學同十一年一月徴兵として
高田山砲兵聯隊へ入營した。人となり温順にして志操堅確不言實行主義の人で在つた。

昭和十二年九月支那事變で星野隊に屬し北支方面の征途に就いた。北支上陸後は連日の豪雨に泥濘路を没する悪路を強
行軍に次ぐに強行軍を以て人馬の疲勞其の極に達したが氏は堅忍奮闘克く其任務を全うし功績は顯著であつた。又同十月
九日より十三日に亘る石家莊及び滄湯河附近の會戰に於ては第三分隊九番砲手として城子拘井陘關附近の戰闘に参加し
彈丸雨飛の間に於て常に勇猛沈着分隊の威力を遺憾なく發揚した。
更に十月十四日娘子關附近の戰闘に於ては相田少尉の指揮する第三分隊に屬し七番砲手として奮闘出發以來實に不眠不

休の行動をなしたるも更に疲勞の色なく午前二時三十分頃娘子關南方約三軒の高地中腹に陣地を占領し午前六時を期し娘
子關西南方高地上の敵に對し射撃を開始し約二十分にして此敵を撃退した。次で陣地變換に移るや近距離より敵銃砲火の
集中を受け此敵と對戰遂に之を沈黙させ斯くして更に陣地變換を始むるや再び敵彈の集中を受け之が爲人馬特に馬匹の損
傷續出し駄載行動不能に陥り臂力にて分解搬送の命あるや氏は彈雨の間勇敢に火砲を搬送せしが途中遺憾にも胸部に貫通
銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。

氏や志操堅確精勵努力の士前途望を囑するに足る。其の北支の征途に就くや毎戰奮闘克く其重任を果たす。然るに悼
しいかな娘子關邊優勢なる敵襲を撃退しながら陣地變換の爲臂力分解せる砲を搬送しつゝ不幸敵彈に墮る哀惜何ぞ盡き
ん。

然れども氏が一死の奉公は是れ東亞恒久の平和建設に對する一礎石にして其英名は偉大なる武勳と共に千載の下不滅に
芳を聖戦史上に留むるであらう。

氏は即日砲兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵上等兵勳八等功七級 大村松義

氏は鹿兒島縣始良郡加治木町小山田の人にして父を松彦母をワリと云ひ大正四年十月二十日を以て生れ未だ獨身であ
つた。性温和で義務心篤く昭和六年三月村城尋常高等小學校高等科を卒業同六年十月八幡製鐵所従業員として入社し昭和
十一年五月補充兵として久留米砲兵隊に入營所定の教育を受け同年八月一日退營した。

支那事變勃發するや昭和十二年十月應召原田部隊に編入せられ江南方面の征途に上つた。而して十二月十二日には片山隊の指揮下にあつて第六分隊隊長として棉花地附近の戦闘に参加し敵弾雨下の中を沈着勇敢に彈藥搬送に任じ以て火砲の威力發揚に遺憾なからしめ其夜所屬中隊は棉花地を出發し三岔河及下關附近の敵を撲滅する目的を以て前進したが一時歩兵部隊と分離し孤立の状態となり其間頻々として敵の射撃を受け前進頗る困難であつたが氏は中隊段列の隊首としてよく



段列長の命に従ひ馬匹を愛護しつゝ前進を繼續し十三日午前五時三十分江東門に到着した。夫より更に下關に向ひ前進するや天明と共に敵の射撃はいよ／＼猛烈となり段列長は其被害を勘くするため各分隊間の距離を大にし急行軍を命じた。此際氏は克く分隊長の意圖に従ひ危険困苦を顧みず困難なる地形を踏破し午前九時三十分頃無事三岔河に到着した。時に戰砲隊は激戦中にして死傷者續出ある狀況下に氏は段列長大坪軍曹の指揮を以て敵彈雨飛の中を數回砲側

に彈藥を搬送し午前十時三十分砲彈二發を抱へ第四分隊の砲手に渡さんとした時敵彈は大村上等兵の口中より頭部を貫通し鮮血迸り出たが氏は屈せず無言の儘二發の彈丸を前方に差出し砲手に渡して遂に其場に壯烈なる戦死を遂げたのである。抑も下關は南京の西北端に位し三岔河は下關南方約二軒に在りて揚子江に接したる市街にして市の中央には大タリクが流れて居る。氏の所屬中隊は歩兵第〇〇聯隊に協力して下關方面より退却せんとする敵の退路を遮断すべき任務を受け十二日夜半行動を起し午前九時三岔河に到着した。時恰も數千の敵は舟を利用して江上に遁走中なるを目撃せる砲兵中

隊の引率官たりし佐々木准尉は直に放列を布置して此敵を猛射し徹底的の大打撃を加へた。敵亦小銃及機關銃を以て必死の應戦をなし遂に激戦を展開するに至つたが氏は砲側に彈藥を補充中前記の如く壯烈なる戦死を遂げたものである。

氏の忠君愛國の至誠は崇高なる責任觀念として現はれ死の斷末魔に至る迄貴重なる彈藥を手交し而して絶命せられたのである。手交せる其彈藥には氏の全靈が罩められ偉大なる効力を發揮したであらう事は想察に難くはない。所屬中隊長を初めとし上官職友は氏等の冷たき屍の前に跪き涙ながらに感謝の禱を捧げた。噫皇軍砲兵の精華又一般軍人の龜鑑として千古に其芳名を傳へられるであらう。又其英靈は悠久の生命を與へられ清き光と力とを皇國の軍民に投げ與へるであらう。

氏は即日砲兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵上等兵勳八等功七級 小山良雄

氏は愛知縣北設樂郡豊根村上黒川字長澤の人にして父を徳瑞母をシゲと云ひ大正五年五月二十八日を以て生れで幼にして父を亡ひ専ら母の手に養育中同村桂昌院往職柴田山山師に就き十三歳にして得度し僧籍に入つた。昭和六年三月黒川高等小學校を卒業續いて名古屋市愛知中學校へ入校同十一年三月同校を卒業し後豊橋市吉屋町龍祐寺專門僧堂に於て勉學した。性質温厚にして母及び師に仕へて孝順の道を盡して居たが昭和十二年八月支那事變のため補充兵特務兵として應召高橋部隊第五中隊に編入せられ中支方面に出征した。而して九月十日以降揚子江附近及劉家行顧家宅附近の戦闘に際し或は朱家飛行場開設作業に或は暑熱の下彈雨を冒し吳淞鎮への糧秣輸送に服務し十月三日より十一月八日に亘る瀟瀟クリーク

附近の戦闘及蘇州河附近の戦闘に當りては陸路輸送の外十月八日より鶴飼准尉の指揮する水路輸送隊員として湖沙の干満甚だしき酸浦クリクの中に或は風雨を冒して本務の遂行に或は萬難を排して水路障礙の除去等に努め斯くて同年十一月九日より上海市封鎖十一月十二日よりは南翔嘉定太倉附近の追撃戦闘又同十五日よりは太倉附近の警備更に又同二十七日よりは南京攻撃の爲めの前進等此等の各期間主として糧秣輸送の勤務に服し悪路を物ともせず時には破壊せられたる橋梁を修理しつゝ不眠不休刻苦精勵以て急速なる追撃部隊の給養に遺憾なからしめた。越へて十二月十三日より同十九日に至る南京附近の警備間同月十四日所屬中隊が早朝天王寺を出發句容―滴化鎮道を前進せる際十五日午前一時頃共家村附近に到るや敵約百名と遭遇し交戦一時間にして之を撃退したのであるが此の際氏は熊田少尉の指揮下に後方自衛隊として敵の左翼を攻撃し誠能に奮戦力闘した。然るに偶々敵彈左胸部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂げたのである。

氏や幼少より佛道に歸依し平素の修行尋常にあらざりしを思ふの時生死の觀亦尋常に卓越せるものありしを察せずんばならず。かの長期に亘り克く堅忍不抜の精神を以て氏の平常と背壤の差異ある力役體勞に服し常に所命の任務を完うし殊に又後方部隊員として果敢頑敵に對し勇戰躍闘克く本分に終始したる皆是れ修養の發露に外ならず。他日南京攻略皇軍大捷の美果氏の一死亦與つて之に力ありしと謂ふべく偉勳永く竹帛に存して聖戦史上の花となすに足る。

氏は即日輜重兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜つた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 渡邊 光治

氏は栃木縣宇都宮市堀田町の人にして父を春造母をイエと云ひ大正四年八月二十二日生れで未だ獨身であつた。性質正

順にして父母に孝行を盡し兄弟に親切で世間の交際亦圓滿であつた。昭和五年三月宇都宮小學校高等科卒業後家事を手傳ひ昭和八年十月より東京地方逓信局工務課宇都宮出張所に臨時工手として採用せられ宇都宮小山間或は日光足尾間の電話線路保守工事に服務し熱誠事に當り縦令退應後と雖線路に故障を生ずれば勞苦を厭はず自轉車にて急行し修繕に従事すると云ふ風にて上役にも厚く信用せられて居た。昭和八年十二月現役兵として宇都宮歩兵聯隊へ入營し直に北滿警備の爲派

遣せられ克山附近の警備に任じ翌九年八月一等兵に進級翌十年十月歸休除隊となつた。功を以て勳八等瑞寶章滿洲事變從軍記章並に滿洲國建國功勞章を賜はつた。

支那事變勃發するや坂西部隊に召集せられ勇躍北支戦線に出動し昭和十二年九月中旬永定河々畔胡林南方地區の戦闘に於ては敵火熾烈の中を積極勇敢に攻撃し常に分隊長を輔佐し率先垂範戰友の志氣を鼓舞し中隊戦勝に寄與せる所大であつた。又九月十五日乃至十七日の拒馬河畔北相附近の戦闘に於ては九月十五日拒馬河第一線渡河部隊に加はり敵前渡河を敢行し第一線分隊員として勇戰奮闘し再三に互る分隊の突撃を成功せしめ敵と格闘中不幸敵彈飛來遂に壯烈なる戦死を遂げた。然れども氏の勇猛果敢なる行動はやがて中隊主力の進出を容易ならしめ以て戦勝獲得の素因となつた。戰友清水氏の通信に依れば氏の受傷當時最早絶息の狀態にあつたが脈寄つて介抱すれば氏は兩眼を開き 天皇陛下萬歳と二聲唱へたが第三回日は氣息奄々として唯口を動かすのみで午後四時遂に瞑目したとの事である。此世の別れに瀕死の狀態で尙も 天皇陛下萬歳を奉唱する其心根は涙ではな



いか縦合戦歴は單簡であらうとも其赤誠は天地を貫き其忠烈は鬼神を哭かしむるではないか。氏の赫々たる武動は皇軍戦史に輝き其忠勇武烈は天晴れ軍人の龜鑑と謂ふべきである。而して氏の英靈は清く尊く永世に生き皇國を護り又氏が生前恩愛をかけし遺族の多幸を加護するは必然であらう。嗚呼人は一代名は末代氏の芳名は千載に語り傳へらるゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 渡邊 登志男

氏は大正五年四月十七日埼玉縣川口市横曾根に生る、父を孝太郎母をつねと謂ひ氏は未だ獨身であつた。性温厚篤實父母に仕へて至孝弟妹に對して亦極めて親切であつた。例へば氏が在學中父母より與へられたる小遣の中から弟妹へ玩具など買求めて喜ばせ出征後も弟妹の勉強を勵ます等情愛の濃やかなものがあつた。又父母の勞苦を思ひ質素を旨とし時流を追ふ事なく稀に見る模範青年であつた。昭和四年三月横曾根尋常高等小學校卒業同年四月東京府立第五中學校夜間部第一學年に入學し同九年三月卒業同四年四月霞ヶ關實務學校へ入學同七年三月卒業更に同十二年四月中央大學專門部商學科へ入學在學中昭和十二年一月十日現役兵として歩兵第三聯隊へ入隊同年一月以降滿洲警備隊に編入せられ渡滿した。昭和十二年七月七日湯淺部隊小林部隊に屬して征途に就き同年八月歩兵一等兵に進められ齊々哈爾附近の警備に服した。七月三十日より天津武清開平獨流鎮外長城線張家口天鎮附近の戰闘に於て第三小隊第三分隊擲彈筒強襲手として参加し克く分隊長を輔佐して勇敢に奮戦し其任務を完ふした。同年九月八日陽高城攻撃に於ては砲兵の城壁破壊射撃を利用し勇敢に前進

し午後七時中隊突撃を敢行するに際し分隊長と共に勇躍城壁に攀登し其の一角を占領之を確保し爾後掃蕩班に加はりて抵抗する敵に手榴彈を投げつゝ之を撃滅した。然るにこの夜優勢なる敵は迫撃砲機關銃の猛射と共に正面及城壁内方面より喊聲を擧げて逆襲し來るや氏は勇敢に手榴彈を投げ且つ小銃の猛射を浴せ縱横に奮闘中不幸敵の手榴彈の爲め右大腿部に破片創を被り仆れたが之に屈せず再び起たんとしたるも傷重くして起つ能はず遂に名譽の戦死を遂げた。



因に中隊長の來信に依れば陽高城は高十尺の城壁を以て圍み歩兵の攀登は頗る困難であつた。壁の厚さは上幅三米にして約一千の守兵が頑強に抵抗したのである。故に我野砲隊の主力を以て城壁の一部に破壊口を開設するの必要を認め午後六時一條の突撃路を完成した。當時所屬中隊は大隊の左第一線となり突撃の好機を窺つて居つたが好機到れるを以て第五中隊の一部に引續き中隊長を先頭に梯子を利用して城壁に懸登つた。續いて小隊長分隊長等が續々登り來り十數名の敵を蹴散らして城壁の一部を占領し更に左方に戦果を擴張すべき企圖を以て掃蕩班を編成し城壁上を掃蕩した。氏は第一小隊野口掃蕩班に屬し敵彈雨飛の中を匍匐前進中頑敵數名が壕を利用し抵抗するを認むるや氏は勇敢にも班長と共に之に突入して敵兵二名を刺殺した。氏は敵手榴彈の破片にて右大腿部を受傷せる際も其重傷の身を顧みず他兵を激勵しつゝ尙も一意任務に邁進せんとして起つ能はざるに至るや 陛下の高歳を唱へ壘壁上に瞑目したのであつた。此戰闘は所屬中隊が數度激戦中最も苦戦せるもので戦死者十四名重傷者二十二名も出して居る。氏の所屬部隊長黒川大尉は氏の父に宛て「登

志勇殿には各激戦毎に披群の勳功を樹て中隊戦闘に偉大なる貢献を與へた者だが萬感胸に迫り御詫びの中上やうもない何
づれ屍を馬革に包み部下の後を追ふ覺悟である」と通信して居る。

噫、豹は死して皮を止め人は死して名を残すと氏の忠誠勇武は皇軍の精華其名は清く高く外長城戦史に輝くであらう。
氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 神村 吉郎

氏は群馬縣稚水郡東横野村の人にして大正三年二月二十五日生れで父を直太郎母をあさと云ひ妻きんとの間に登江セツ
子の二子がある。性質温良にして家業に精勵し諸交際も圓滿にして近隣の風評良好であつた。昭和三年三月東横野小學校
高等科を卒業昭和九年三月東横野實業補習學校を卒業した。昭和十年一月高崎歩兵聯隊へ入營し劍術射撃共に優秀にして
各々一回づゝの賞状を附與せられた。

支那事變起るや森田部隊に屬し勇躍征途に就き九月上旬北支戦線に到着した。氏は松本少佐の隸下第七中隊の擲彈筒手
として參戰し九月中旬には永定河畔趙村附近に於て至嚴なる警戒勤務に服し又中隊の特別任務たりし陽動を行ふに當り氏
は猛烈果敢に行動し以て中隊の任務達成を容易ならしめた。次いで拒馬河畔西務附近に於ては九月十六日所屬中隊は第一
次渡河部隊として敵前渡河を敢行し以て主力の渡河掩護並に河西務の敵陣地を攻撃した。氏は當時右第一線小隊に屬し拒
馬河右岸の敵陣地より射注ぐ猛火を浴び乍ら勇猛果敢に渡河し爾後逐次地歩を確保して河西務の敵を攻撃するや小隊の左
分隊中に在りて彈雨を冒しつゝ敵前至近の地點に肉薄し正確機敏なる擲彈筒射撃を行ひ暫時にして敵機關銃を撲滅した。

之が爲中隊突擊發起の動機となり次いで氏は小隊主力と共に敵陣地に突入し遂に赫々たる戦勝を得たるは天晴披群の武功
であつた。九月十七日午後八時半田所屬部隊は有力なる敵より逆襲を受けた。敵は重機銃及迫撃砲を以て猛烈果敢なる猛
射を加へつゝ潮の如く殺到し其勢悔るべからざるものがあつたが氏は克く沈着勇敢に反撃を加へ敵に多大なる損害を與へ
て之を撃退し以て京漢線東側地區なる西管屯附近迄を確保するを得た。



翌十八日には京漢線西側地區なる澤畔店附近の敵陣地攻撃に參加
した。氏は左第一線中隊第一線小隊に屬し澤畔店東側地區に展開し
午後零時卅分より戦闘を開始し京漢線鐵道と澤畔店との中間陣地を
突破し中隊長と共に澤畔店東側要點たる堆土に逸早く進出し澤畔店
東側陣地の敵を制壓すると共に大隊主力方面に逆襲する敵を撲滅し
て澤畔店東側高地を占領した。次いで薄暮攻撃に方りては大隊の左
第一線中隊の右第一線小隊に屬し敵彈雨下の地域を敵前五十米に近
迫し敵の各種銃砲彈の熾烈なる彈雨を冒し勇猛果敢に澤畔店東南方
敵陣地に突入した。此際不幸にして頭部に貫通銃創を受け茲に壯烈

なる戦死を遂げた。

河西務の敵機關銃の撲滅西管屯の逆襲阻止澤畔店の要點奪取共に是れ所屬隊勝敗の數に關する重要事項であつたが何づ
れも皇軍の武威を宣揚し得たるは氏の功績に俟つ處甚だ大であつた。而して氏は常に冷靜沈着正確機敏なる擲彈筒射撃を
實施し得たるは全く軍人精神に徹底し且卓越なる武技の習熟に依る所で眞に是れ皇軍歩兵の精華であり一般軍人の模範と

謂ふべきである。然るに聖戦の半ばにして斯る勇士を喪へるは痛惜に堪えないが其功績は華北の皇軍戦史に牢記せらるべく其芳名は千載に轟はるべく其英靈は永世に生き皇國を擁護すると共に一家の守護として清き榮を加護するであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 川野 幸 平

氏は茨城縣那珂郡鹿野村の人にして父を登母をノブと云ひ其長男にして六人の弟妹がある。大正二年十一月二十日生れで未だ獨身であつた。性温厚父母に孝にして友情に篤く人情味の豊かな持主であつた。大正十五年三月鹿野尋常高等小學校を卒業し烏山中學校に入學昭和四年三月同校二學年を修了して退學し爾後家庭にあつて父母を助け農業に従事し一方鹿野青年訓練所に學び昭和八年十一月同所を修業し翌十二月現役兵として歩兵第二聯隊に入營し學術及び勤務の成績良好にして精勤章を受くること數回殊に銃劍術に秀でて競技會に於て優秀なる成績を贏ち得て賞状を受け或は又健脚を以て秋季演習中重要な任務を遂行し聯隊長より賞状を受けた程である。昭和八年十二月より滿洲に派遣せられ新京警備隊第二機關銃隊に屬して治安の維持に貢献し功を以て勳八等に叙せられ昭和十年五月歸休除隊となつた。爾後郷里に於て家業に精勵すると同時に青年團長として後進の指導に或は在郷軍人會鹿野分會評議員として活動し或は青年學校指導員或は消防小頭等を勤め社會のために盡瘁する所頗る大であつた。

支那事變の勃發するや昭和十二年八月應召石黒部隊第一機關銃中隊に編入せられ勇躍北支方面の征途に上り九月十四日永定河々畔北相各莊附近の戦場に氏は第四小隊第七分隊第七番彈藥手として午前八時半頃宿營地を出發前進するや程なく

敵の砲弾は身邊に炸裂し初めたが志氣愈々旺盛一同彈丸雨注の下濁流塵を没する永定河を渡河して午後一時河畔の敵を撃退し更に森林内を追撃して北相各莊の部落北端に進出した。此の時敵は堅固に構築せし既設陣地に據り掩蓋の内部より猛射を加へたため我第一線中隊は前進頗る困難となりしが氏の小隊は敵の掩蓋陣地に對し猛射を加へたる結果さしもの敵の射撃も衰退するに至つた。此間氏は雨下する敵彈下に勇敢に彈藥を補給し我が機關銃の射撃に遺憾なからしめ又常に敵情

に注意し屢々分隊長に有益なる報告を爲し斯くして戦闘は有利に進展し小隊長の號令に同分隊は勇躍前進を起した其の利那敵迫撃砲の二彈は分隊機關銃の左側に落下し氏は胸部・腕・大腿部の三ヶ所に其の破片剣を受け戦友と共に壯烈なる戦死を遂げた。

氏は内地出帆後船中にて莫逆の戦友大高氏に對し「君よ見等に指導された此の腕を見せる時が来た」と語り又戦死前二日家庭に發した書信に「如何なる事があらふとも決して大死は致さぬ覺悟で立派な働をします(中略)故郷に在る両親様隱居の老婆様何卒自分の體を大切になされて下さい只私のお願ひはそれのみです。きつと私の



事を心配されて體もやせてゐる事と思ひ甚だ申譯ありません只感謝の念で一杯です云々」と記して居る。又氏の父登氏は「生あるものは死すと云ふ然り君國の爲め盡忠報國の誠を果し靖國神社に其の英靈を合祀さる。是を思ふ時感極まり只々熱涙全身に溢れ血湧き肉躍り五十歳の老軀を以て皇國重大時局の折長男が或は兄弟が戦死せようとも石に嚙りついても死ぬことなく銃後の守りを堅め今後の重大責務を完うせん」とある誠に偶然ではない。

氏北支戰場に立ちて僅かに旬日華北の花と散る誠に痛惜に堪えず。然れども氏が此の旬日間に奏したる武勳は偉大にして永く青史に輝き其英靈は不滅に生き護國の神として皇國を守り又一族の守護神として遺族に慶福を垂るゝであらう。氏は即日歩兵上等兵に進級し次いで勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 神谷貞太郎

氏は兵庫縣養父郡建屋村の人にして父を甚之助母をはなと云ひ大正五年三月三日生れで未だ獨身であつた。性温順誠實にして氣概に富み入營に際しても在營間と雖も他人に農事の手傳など頼んでくれるなど獨立自主的精神を鼓吹した。昭和五年三月建屋小學校高等科卒業後建屋村立青年學校に入り昭和十二年一月之を卒業して居る。昭和十二年一月現役兵として歩兵第四十聯隊へ入營日夜軍務に精勵し同年四月上等兵候補者を命ぜられた。支那事變勃發するや動員下令となり勇躍北支戦線へ出動した。

斯くて九月七日より九月十二日に亘り馬廠附近の戦闘に参加する事になつた。氏は第二中隊長田卷大尉の指揮下に隸屬し九日午後十一時四十分姚家庄を出發し夜襲の爲行動を開始した。十日午前三時三十分小王莊と袁莊子との間に位する敵の第一線陣地を奪取し同日午前四時小王子を西方より攻撃し之を占領した。此夜襲に於て氏は第一小隊第三分隊に屬し中隊主力と共に浸水しある高粱畑や膝を没する沼澤地區を前進し前記小王莊西側第一線陣地の前方約二十米に近迫し將に突入せんとする時敵の發見する處となり至近の距離より敵の猛射を受くるに至つた。茲に於て中隊長は間髪を入れず突入に決し突撃を命じた。然るに陣地前には幅約一間半深さ約六尺の水濠ありて此突

撃動作を著しく困難ならしめた。氏は號令一下何等の躊躇なく飛鳥の如く水濠目かけて飛入らんとする一刹那哀れや敵の一弾は氏の頭部を貫通し壯烈なる戦死を遂げた。噫氏は敵陣粉砕の氣魄去りやらす水濠直前に斃れたが之が爲一隊の怒髪天を衝き終焉の決演する勢を以て敵陣地に突入し遂に中隊の夜襲は大成功を收め得たのである。氏の所屬小隊長たりし補

本少尉の來信に依れば本戦闘は所屬聯隊の緒戦であり氏は最初の犠牲者の一人であり其天晴れる最後は一隊の志氣を鼓舞し聯隊歴史に大なる光彩を放つものであると附言して居る。

皇軍の忠勇義烈たるや敢て贅言を要せないが突入直前に一大水濠の横はるあり誰しも其瞬間に如何にして最小限の損害に止むべきかを考へたであらう。だが躊躇逡巡せんか敵は得たりと沈着して正確なる猛射を加へ友軍は却つて多大なる損害を受け夜襲不成功に終つたかも知れり知るべからずである。慧敏なる中隊長の決意上官の命令是れ 陛下の御命令と信じ切つた氏の純情剛膽なる行動はやがて全



中隊で戦死者四名戦傷者十五名の僅少なる損害を以て赫々たる大成功を收め得たのである。即ち氏は身を殺し仁を成したる者とも云ひ得る。

即日歩兵上等兵に進級し勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級

神吉千治郎

氏は兵庫縣美藝郡三木町の人にして父を久太郎母をいわと云ひ妻よし子を娶つた。大正二年九月二十四日生れ資性淡泊率直にして好んで人の世話をなし従つて郷黨或は友人より喜ばれ親まれ長上よりは信用が篤く一方運動競技に興味を有し一廉のスマーツマンであり特に幅飛びは最も得意とするところで郡の運動大會に選手として出場し記録保持者として銀カツプを受けたのである。大正十四年三月土地の尋常小學校を卒業して後技工を以て身を立てんとし録目立業者の徒弟として修業してゐたが昭和八年十二月徴兵として歩兵第三十九聯隊に入營直に滿洲に派遣せられ東寧附近の警備に任じ頗る敦練勤務に精勵しその成績は時日の経過と共に向上し又銃工修業兵として入營前の素養が勿論原因でもあらうが成績群を抜き聯隊の首位の榮冠を得又時々匪賊討伐に参加して奮戦功績を樹て滿洲の治安維持に貢献する所尠からず功を以て勳八等白色桐葉章を賜はり擡て滿期除隊となり歸郷後は其職業に孜々として勤勉郷黨のため後進を善導し在郷軍人として遺憾なく實績を擧げてゐた。

昭和十二年八月支那事變のため召集を受くるや「かねてより君に捧げしいのちなり今日選ばれて死すぞ嬉しき」と意中を披瀝し勇躍應召沼田部隊關口隊に編入せられ北支方面の征途に就いた。

應召後輸送其他の諸勤務に服し晝夜を分たず精勵し八月二十七日所屬中隊は命令により四黨口に向ひ夜半行動を起したが時恰も暗夜に加ふるに降雨のため到處出水し水深尺餘に達する處も尠からず道とも川とも分けかねる道なき道を跋涉し漸くにして目的附近の部落に達し茲に中隊は前面の敵を攻撃するに決し其の區署に就いた。此の時氏は第一小隊第二分隊員として前進し午前九時三十分敵前三百米の線に進出した。敵の陣地は中々堅固にて正面よりの攻撃は容易ならざるも

のがあつて中隊の主力は四黨口方面より敵の翼側を包圍攻撃するため同方面に轉じ氏の屬する第一小隊及第三小隊の一部が依然現在方面より攻撃し中隊主力の攻撃を容易ならしむる事となつて前進を繼續したが敵の火力は熾烈にして彈丸は雨霰の如く落下した。然かし氏は益々沈着前方通視に便なる地點に進出しては自己の觀察した敵情地形などを報告して分隊長を輔佐し躍進又躍進して遂に敵前二百米に達した。然るに此時敵の彈丸は氏の大腿部を貫通したが毫も屈せず尙射撃を

續けてゐた。然るに天無情にも又もや一彈命中して爰に壯烈なる戦死を遂げた。



氏は北支上陸後泥濘出水地帯の難行軍を克服したる後直に四黨口附近に於て寡兵を以て堅固なる陣地の頭敵を攻撃し奮戦以て中隊主力の行動を容易にして其の目的を達せしめ身に重傷を負ひながら沈着剛膽最後の一瞬に至る迄攻撃の手を緩めなかつた精神は既に出征に際し遺された堅き決意の顯現にして佛家の所謂「心頭を滅却すれば火も亦涼し」の妙處を悟了せる結果である。斯かる勇士に假すに壽を以てせば其の活動こそ目覺しかるべきに今や語るに答へなく華然として青史に輝き其忠魂は永久に生き護國の神として皇國を守護し遺族の多幸を加護するであらう。氏は即日歩兵上等兵に進級し次いで勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 川口 彌熊

氏は鹿兒島縣薩摩郡川内町上川内の人にして亡父を矢助母をトモと云ひ明治三十四年十一月十一日生れで未だ獨身であつた。大正五年三月龜山尋常高等小學校を卒業以後家庭にありて農業に従事し餘暇を製材所或は新聞の配達に備はれ家計

を助けてゐた。資性寡言にして汝々其職務に勉勵し全く實行の人であつた。大正十年一月熊本歩兵聯隊に入營射撃は其得意とするところ。聯大中各隊長より射撃優等の賞状を授けられ在營一年にて歸休退營した。



昭和十二年八月應召船倉部隊に編入せられ九月中支方面の征途に就き十月九日より十一日に亘る東北孫附近の戦闘に於ては郵答院隊第一小隊第一分隊に屬し齊家屯（願中橋西方）より東北孫附近の敵を攻撃し趙家宅にある隣中隊と連繫し陣地を占領する際敵の重機を及迫撃砲の猛射を受けたがよく分隊長の命に従ひ率先猛烈に前進し沈着なる射撃を以て敵に少なからず損害を與へた。續いて十月十五日迄紀家橋附近にありて齊家宅の敵と相對し陣地の警備に任じ敵の迫撃砲重機弾の飛來下に於てよく其位置を固守した。次で十月十六十七兩日に亘る東北孫附近の戦闘に於ては十七日午前五時三十分行動を開始し中隊主力は東北孫の敵に向ひ攻撃を始むるや猛烈に敵の重機迫撃砲射撃を受けたが氏は勇戦率先範を示して攻撃前進し分隊の志氣を鼓舞し分隊が敵前十五米に達するや敵の射撃は益々熾烈となりし

みならずアリトキ並に敵の設備せる障礙物のため中隊は一時停止し突撃を準備せねばならぬ状況にあつた。此の時氏は好機に乗じて敵前十米に到り手榴弾二發を投擲して敵に損害を與へた。然るに不幸敵弾のため頭部に貫通銃創を受け壯烈なる最後を遂げた。然し氏の沈着にして豪膽なる行動は志氣を鼓舞し突撃の促進を招來し戦捷の因を作つたものである。

氏の諸上官の所見を綜合するに氏は豪膽沈着無言の勇士として中隊の模範兵であつた。九月十二日以来大齊灣方面に於て陣地守備中數倍の敵夜襲を受けし際も極めて沈着に勇戦奮闘し敵に多大なる損害を與へて撃退した。噫毎戦常に忠烈勇武なりし氏も今や聖戦の尊き人柱となつたが其名は皇軍戦史に牢記され其高き勳は萬世に語り傳へらるゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 川 端 勇

氏は大阪府泉北郡大津町の人にして亡父を幸太郎母をツネと云ひ大正五年七月二十八日生れで未だ獨身であつた。性質温良両親には至つて孝行で兄弟及同僚に對しても誠に優しかつた。昭和六年三月穴師小學校高等科を卒業したが十七歳より生花の道に志し五ヶ年間の修行を積み斯道の教師となり多數の弟子を有するに至つた。併し氏は獨立進取の氣性に富み不屈不撓の努力家でもあつた。即ち小學校卒業後直に織物工場の職工として一ヶ年勤務したが人の袖下に寄食するには當らぬとして退社し自己の貯金を以て自動車修繕店を開業した。本來氏の實家は農家なりしを以て四人の兄は口を揃へて不慣れの仕事は失敗の基だと注意したが氏は敢然として自轉車を考へ出した人さへあるのだ修繕する位が何かと開店したのであつた。氏は精勵刻苦遂に入營時迄に間口六間半の商店主となり國稅さへ納むる程の成功を収めた。斯る中にも昭和十一

年十二月には大津町立穴師青年學校本科を卒業し模範青年と謳はれ同月徴兵として歩兵第七十七聯隊へ入營となつた。兄等は勇何も心配せずと二ヶ年の間 天皇様へ御奉公致し一人前の軍人となつて歸つて来いよ店の事は兄等が引受けてやるぞと晴れの門出を見送つた。昭和十二年六月選拔を受け陸軍歩兵學校通信隊へ派遣され歩兵一等兵に進級したが北支の風雲急を告げ翌月中旬原隊へ歸還した。



斯くて鯉登部隊へ編入せられ昭和十二年七月二十五日及二十六日那坊附近の戦闘に於ては中隊長増子大尉の隸下第一小隊第三分隊長として能く分隊長の指揮に従ひ率先勇敢に敵を攻撃し又部落掃蕩に當りては危険を顧みず分隊長と共に常に先頭に在りて豪膽に敢闘兵を處理し後安定に向ひ列車追撃の際は警戒勤務に服し反轉して那坊に歸還しては宿營地の警備に任ずる等疲勞困憊の身を以て常に積極的に任務を遂行した。

超えて七月二十七日團河村附近の戦闘に於ては彈丸雨飛の下に勇猛果敢なる行動を以て敵に接近し絶えず敵情に注意しつゝ小隊長代

理山口軍曹との連絡を確保し戦友を激勵して奮闘し戦勝獲得に寄與せる所甚だ多かつた。

七月二十八日南苑附近の戦闘に於ては羽島大隊右第一線中隊右第一線小隊に屬し午前四時行動を起し午前八時四十分戦闘開始となつたが氏は第三分隊小銃手として南苑兵營の敵に向ひ前進した。友軍の飛行機は編隊隊形をとりて兵營上空に飛來兵營目指して爆撃を實施せるに引續き敵前百米頃より愈々銃火を交ゆるに至つた。丈高き高粱畑を押分け陣地前に來

て見れば幅深共に五米の外壕が廻らされ土壘の高さは十米にも及んで居り敵は亂射亂撃を以て我を逸ひ撃つた。氏は率先外壕を超え更に土壘に攀登した。敵は頻りに手榴弾を投擲し我が軍の損害は甚大であつた。併し氏は身命を顧みず銃剣を以て足掛を作りつゝ中隊長の右側に在りて一意攀登に努め遂に列兵の最先頭に土壘頂上に進出したが遺憾なるかな此時敵の投擲せる一手榴弾の爲仰向に打倒され壕内に墜落して壯烈なる戦死を遂げた。併し氏の決死的作業の足掛は幾多後續者の足掛として利用され戦勝獲得に重要な素因ともなり氏の奮闘は一隊將兵の志氣を鼓舞し憤激と復讐の念は烈火の如く燃え上り頭敵を粉碎して壘上高く日章旗を翻へした。

嗚呼氏の生涯は美事なる奮闘の繪巻物であつた。激烈たる意氣は鐵壁をも貫いて郷黨の垂範となり決死的努力は險難をも攀登して戦捷の途を開拓した。噫前途洋々たる此青年聖戦の前途亦必須の勇士一朝の兇弾に玉碎して今や其雄姿を没した。惜みても尙餘ある次第だが氏が兄弟に言へる如く人は一代名は末代と觀じ來れば悠遠なる皇國に生を享け先祖以來蒙れる皇恩に全身全靈を捧げ得る機會を與へられたる者即ち最大の孝行者であり亦最大なる御奉公者であつたのだ。氏の清淨なる御靈の活躍は之から初まるのである。必ずや皇國を護り遺族の多幸を加護するであらう。氏の芳名は千載に謳はれ氏の功績は皇國戦史に輝かしき光を添へるであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷲勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 河村 森 吉

氏は栃木縣上都賀郡足尾町の人にして父を巳之吉母をヤヨと云ひ大正三年五月二十九日生れで未だ獨身であつた。昭和

四年三月古河尋常高等小學校を卒業後古河鑛業會社足尾鑛業所製煉夫に採用せられ約五ヶ年勤務してゐた。性質温順にして父母に孝兄弟に友にして業務に勉勵し近隣の風評殊に良好なる模範青年であつた。昭和十年一月現役兵として宇都宮歩兵聯隊に入營同年七月一等兵に進級翌十一年七月歸休除隊となり昭和十二年八月應召坂西部隊に編入せられ北支方面の征途に就いた。九月三十四の兩日に亘る榆堡嶺南方永定河渡河戰闘に於ては第一線中隊に屬し渡河を開始するや敵彈雨注



の下に於て散然徒渉し敵岸に到着し堅固なる陣地に據れる敵を攻撃遂に敵陣に突入之を確保し爾後追撃射撃に移つた。續いて森林且つ錯綜せる地帯に據る敵を攻撃したが地形の關係上適時命令が徹底せず然かし氏は克く獨斷且勇敢に敵を攻撃して之を撃破し追撃を實行して中隊全般の戰闘を有利ならしめた。次いで九月十五日十六日揚家屯附近拒馬河渡河戰闘に於ては第二中隊第二小隊第三分隊員として参加し十五日午後二時三十分拒馬河の右渡場に於ける渡河甚だ困難に陥り爲に所屬中隊は之を掩護し夜に入りて大隊主力と共に左渡場より渡河して揚家屯部落の敵を夜襲した。同夜暗黒にして楊樹多く且つ部落内の事とて咫尺を辨ぜない状態に於て中隊は一意部落内深く前進したところ敵は各所の土壁或は家屋を利用して手榴彈を投げ又は射撃した。當時氏は分隊長の指揮の下に前進中右側土壁内の敵が前進中の中隊に對し手榴彈を投げんとするを發見直に身を挺して之に突入刺殺したが他の敵兵のため手榴彈を投げられ顔面に大爆創を負ふた。然かし氏は屈せず格闘之を喰し中隊の前進を安全にした。其後中隊は該地附近に於て再三敵の逆襲を撃退する迄氏は重傷の身を以て銃

を手より離さなかつたが遂に午後十一時三十分惜くも華と散つた。

噫氏や毎戰難局に直面しては常に衆に擲んで之に當り生死の境に臨みては電光石火堅陣に突入し慧眼克く暗中に頑敵を發見し豪膽機敏之を屠つて所屬中隊を安全ならしめた。尙瀕死の重傷を負ひ乍ら苦痛を忍びつゝ最後までも職責を全うしたるは特に異彩を放つものである。寔に是れ精神決死の勇士であつた。畢竟氏が高邁なる盡忠報國の一念凝て超人的の武勳を奏したものであり眞に尊き犠牲であつた。氏の勳功は皇軍戰史に輝き氏の芳名は千古に傳へらるゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 勝田 敬 吉

氏は埼玉縣北足立郡七里村の人にして父を藤太郎母をとくと稱し大正五年三月十一日生れで未だ獨身であつた。資性温順寡言進んで難局に當るの美風を有し軍隊に於ては上官及同輩の信望を受け他の模範として將來を囑目されて居た。昭和五年三月七里小學校を卒業し家庭にあつて家業を手傳ひ一方七里青年學校に入學し同十年十二月卒業し同十二年一月現役兵として麻布歩兵聯隊に入營同月月末滿洲守備隊として派遣せられ齊々哈爾附近杜爾伯特旗附近の警備に従事し七月十二日には一等兵に進級し渡滿以來半歲朝北の沍寒に耐へ肅清工作に従ひ勤務精勵功勞頗る大なるものがあつた。

やがて支那事變勃發するや湯淺部隊に屬し河北方面に出動し七月三十日より八月十六日に亘り天津附近の掃蕩及輸送勤務に服し殊に便衣隊の掃蕩には人知れぬ苦心を體驗したのであつた。次で八月三日より六日に亘る間或は將校斥候に加はり殘敵の出沒する危險地域の搜索に従ひ斥候長に有益なる報告の資料を供し或は敗殘兵の掃蕩に任じて武清附近の治安恢

復に貢献する所尠くなかつた。其後獨流鎮附近戦闘に氏の所屬隊は右第一線として活躍し其際氏は日夜危険と困苦を顧みず克く其任務を全うし更に八月十七日よりの外長城縣附近の戦闘には氏は第二小隊第三分隊擲彈筒手として參加したが此附近陣地は敵が長時日を費やし堅固に構築せる近代的防禦陣地にして其攻撃は容易なものではない。然かし氏は日夜堅忍奮闘殊に二十日及二十一日の兩日は敵のトーチカ主陣地に對し擲彈筒の威力と肉弾戦による奮闘を以て連日敵を惱ませ遂に敵をしてさしもの堅固なる陣地を棄て西北方に退却するの止むなきに至らしめ二十二日には長城線に沿ひ敵を追撃して多大の損害を與へたのである。續いて張家口攻略の爲め追撃を續行し土井子東方高地に於て所屬隊は優勢なる敵の包圍攻撃を受けたが此際氏は第一線小隊にありて勇敢に奮戦し敵に多大の損害を與へ之を撃退し翌二十四日にはナマコ山敵陣地を攻略南天門に向ひ前進した。然るに同門東方高地上に至るや所屬隊は再び優勢なる敵の包圍攻撃を受けた。此際氏は復た勇敢に擲彈筒を以て彈丸雨注の間に盛に正確なる射弾を送り敵に大打撃を加へ遂に敵を撃退し八月二十七日待望の張



家口に入り殘敵の掃蕩に従事した。顧みれば此間我軍は堅固なる長城線の攻撃を始めとして日夜攻撃に次々に攻撃を以てし更に急迫又急迫時に優勢なる敵の包圍を受け寡兵よく之を撃退したのであるが氏も亦一以て十に當る堅き信念と決意を以て食ふに糲乏しく時に大陸の炎天又は豪雨に困苦缺乏の限りを嘗め當によく之を克服して敵を速く内蒙張家口以西に撃退するに大なる貢献をなした其の功績は偉大なものであつた。更に九月八日九日に亘る陽高附近の戦闘には黒岡隊第一小

隊第三分隊擲彈筒手として八日午前十時陽高城の攻撃開始せらるゝや砲兵の城壁破壊射撃の掩護により勇敢に前進遂に午後七時突撃に際して氏は第一小隊第一掃蕩班員として徳永軍曹指揮の下に勇躍城壁を登攀機を失せず城壁上を南方に向ひ他の掃蕩班と協力しながら頑強に抵抗する敵に手榴彈を投じて之を撃退し次で午後八時頃南方城壁方向より敵の逆襲し來るや又之を撃退したが午後十時頃迫撃砲及機關銃の猛射と共に正面及城壁内側方向より敵は大舉逆襲し來り我が死傷亦相次いで生ずるに至つた。此時氏は勇敢に擲彈筒を以て逆襲し來る敵を猛撃し多大の損害を與へ敵を撃退した。然るに敵は執拗にも正子頃再び喊聲を擧げつゝ逆襲し來り此時は敵著しく近迫し氏は猛烈に手榴彈を投擲し敵は相次で目前に斃れしかば氏は戦友と共に益々勇を鼓し奮戦したが偶々飛來せる敵の手榴彈に氏は左大腿部に其破片創を受け惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。

氏が最期に至るまでの剛膽不屈の奮闘は所屬隊をして陽高東部城壁一帯を占領し得る一素因をなしたるものにして其功績拔群と謂ふべし。

噫、氏や曩には滿洲の警備に任じて治安の維持に貢献し今又聖戦に參加し偉勳を奏して山西の一角に壯烈鬼神も哭する戦死を遂ぐ。誠に痛惜忍び難きものがある。然かし其赫々たる武勳は聖戦史上永へに芳を放ち其英魂は永久に生き護國の神となりて皇國を守護するであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 川添 卯平

氏は宮崎縣南那珂郡吾田村字平野の人にして父を熊市母をケサと云ひ明治三十三年五月十五日生れ、家庭には母及妻キクエ並に二男三女あり。大正二年三月吾田小學校尋常科を卒業し爾來家業に従事して居た。性寡言にして慈愛に富み精勵

胆勉であつた。大正九年現役兵として都城歩兵聯隊に入營し射撃に堪能にして射撃優等之證状を受け滿期退營した後は依然家業に精勵して居た。



昭和十二年七月支那事變勃發するや八月應召押川部隊に屬し中支方面に出征九月十日永安紡織工場に至り同地の警備に任じ九月十二日所屬押川部隊は孫家屯に至り第一線部隊と交代し十九日には紀家の木橋附近に於て激戦の後遂に劉家濱を占領した當時氏は第二小隊第六分隊にあつて勇戦克く努め劉家濱突入の際も分隊長と共に率先突入敵に多大の損害を與へ二十一日唐家橋附近戦闘には氏の小隊は段家濱にあつて第一小隊の南齋灣附近への進出を掩護し九月二十三日趙家濱附近の戦闘に際しては午前九時五分より攻撃前進に移り敵弾の下よく勇敢に前進し其攻撃間に於ても常に敵情に注意し屢々有益なる報告を分隊長に提供し突撃の際も率先部落内に突入奮戦した。又十月九日より十一日に至る東周宅孫家宅附近の戦闘に於ては氏の所屬小隊は吳家宅を攻撃し遂に之を占領するや氏は小隊長より小隊の状況を中隊長に報告する事を命ぜられた。氏は其命令を受くるや猛烈なる

敵火の間を或は馳驅し或は匍匐して遂に中隊長に報告し無事歸還し更に午後五時氏は杉田上等兵と共に斥候として敵情偵察を命ぜられ孫家宅北端附近より敵の側背に迂回し南孫家宅方面の敵情地形を搜索して有益なる報告を爲した其功績は偉大なるものであつた。

十月二十三日趙家宅附近の戦闘に於ては氏の小隊は同村北端に於て戦闘中正午頃より敵の射撃は愈々猛烈となり更に北孫家宅方面の迫撃砲之に加はり敵は全線に亘り逆襲に轉せんとする状況に小隊長は此状況を直に中隊長に報告する事を氏に命じた。氏は此命を受くるや勇躍敵の猛火を冒して出發したが途中午後一時五十分頃敵の迫撃砲弾は氏の身邊近く炸裂し惜しくも氏は負傷して倒れた。氏は直に收容せられ後吳滋野野戦病院に於て治療を受けたが出血甚だしく翌二十四日遂に江南の花と散たのである。

噫氏は江南の戦線に立て僅かに數旬終に敵弾の爲江南に落花の最期を遂ぐ。誠に痛惜に堪へず然れども氏が一死の忠は是れ東亞恒久の和平建設に資するの一礎石にして其の英名は赫々たる武勳と共に永く青史の上に輝き其の英靈は不滅に生き護國の神となつて皇國並に遺族の前途に慶福を垂るゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 上山 國男

氏は鳥取縣東伯郡由良町大字妻波の人にして父を久米亡母を文と云ひ大正六年十月一日生れで未だ獨身であつた。資性温順にして英俊父母に仕へて孝順る勤勉であつた。昭和七年三月由良尋常高等小學校高等科を卒業し續いて農業補習學校

後期第一學年に入學翌年三月同學年を修了昭和十年由良町青年學校四年に入學したが現役志願をなし昭和十一年一月松江歩兵聯隊に入營し翌十二年七月支那事變勃發し福榮部隊に屬し北支方面の征途に就いた。斯くて八月二十四日獨流鎮附近の攻撃に於ては澤山隊第二小隊第五分隊の第一藥彈手として同日午後攻撃を開始し漸次敵に近迫し猛烈なる敵火の下に渡河して敵の據點たる突角の家屋に向つて突撃した。此時氏は率先勇敢に敵陣に突入り午後六時之を占領し爾後所屬隊が部落内に進入し殘敵掃蕩間射手と共に警戒に任じ分隊長を輔け戰勝獲得を確實ならしめた。



更に九月十日より同十二日に至る東幸莊附近の攻撃に於て所屬分隊は北趙扶の敵に向ひ攻撃を開始したが敵は銃眼及壕に據り小銃機關銃及び迫撃砲を以て我を猛射し前進甚だ困難であつた。而も氏は勇敢に前進を続け遂に分隊長と共に敵陣地に突入り之を占領した。然かし敵は尙頑強に抵抗するので分隊長より部落内敵掃蕩を命ぜられ直に掃蕩に着手し第一家屋にて敵兵三名を捕獲し續いて第二家屋を掃蕩するに決し門前十米に達するや敵は我を猛射し且つ手榴彈を投げ我亦手榴彈にて應戦せしも頑強に抵抗せるを以て分隊長は一舉に敵を殲滅するに決し白兵を揮ひ突撃を命じた。氏は先頭に立つて斷然敵に突進し頑強に抵抗して門内に進入し同邸内の各建物に殘敵を求めて殲滅中單身東南角の室内に於て一名を刺殺し更に分隊長に追及して西南角の物置附近に於て殘敵三名を刺殺した。然れ共此際伏在せる敵の投擲せる手榴彈のため身に數ヶ所の負傷を蒙りしは惜むべき事であつた。併し氏の剛膽機敏なる行動により午後五時北趙扶を

奪取するを得所命の任務を完了した。氏は負傷の爲め姚馬渡衛生隊に收容せられ次で我が支那駐屯軍病院に後送されたが九月二十一日遂に聖戰の華と散つた。

氏の歴戰の跡を聞するに徹頭徹尾攻撃精神横溢し常に衆に先んじて難局に當り到る處に豪勇と其練達の武技を發揚し以て所屬隊の赫々たる戰勝に重大なる素因を與へて居る。寔に是れ皇軍歩兵の精銳であり又一般軍人の龜鑑である。氏の功績や皇軍戰史を飾り其芳名は千古に傳へらるべく茲に氏が生前念願せる孝心は大成せられ又偉大なる忠誠を玉成せるものと謂ふべきである。而して氏の英靈は依然皇國に生き懷かしき我家に生き永久に皇國並に我が家の繁榮を加護するであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 刈谷兼吉

氏は大正五年一月十日東京市深川區住吉町二丁目に生る。父を忠藏母をヤマと謂ひ氏は未だ獨身であつた。昭和五年三月深川區東川尋常高等小學校卒業性質温順にして寡黙父母に事へて孝養を致し兄弟睦くして友情厚く責任觀念旺盛にして勤儉力行の美風を有して居つた。

昭和十二年七月七日事變に依り湯淺部隊小林部隊に屬して勇躍征途に就き同年七月十二日歩兵一等兵に進められ齊々哈爾附近の警備に服し同年八月二日より天津外長城綫萬全張家口天鎮附近の戰闘に第一小隊第三分隊彈藥手として参加し克く分隊長の命に従ひ機敏に行動し勇戰奮闘其の任務を完ふした。同年九月八日夜陽高城攻撃に際しては第一小隊第三分隊

に屬し分隊と共に攻敵前進中暗夜咫尺を辨せず分隊長以下中隊主力との連絡を失ひ已むなく大隊本部に續行して午後九時頃東門を占領し同所並に其の附近の警戒に任じた。當時氏は本部後方に於て陣地を構築し警戒中前方約四米の本部隣接家屋より不意に二三名の敵兵顯れ氏に對して手榴彈を投げたるも幸に不發に終つた。氏は機を失せず退却せんとする敵に向つて勇敢に突撃し其の一名を刺殺した。この時他の一敵は氏の後方より組付來り茲に格闘となりしが俄然敵の懐中したる



手榴彈爆發したるため兩手及左前膊に爆創を被りて衛生隊に收容せられ入院加療して全治し九月十四日退院せしが其後急變手當の甲斐もなく遂に九月二十五日名譽の戦傷死を遂げた。

因に陽高城は山西省の西北部に位し高さ約十尺上幅約三尺の城壁を巡らしたる堅城である。此所作戦上の要衝を形成するが故に敵は兵力約一千名を以て固守し防禦設備を増強し皇軍の進撃を阻止して居たのである。夜暗は人を怯懦ならしめ易いものである。而も氏は豪膽克く數敵に渡り合ひ格闘中不幸にして爆創を受けたが氏の勇敢なる奮闘に依り本部要員の危害を未然に防止し得たるは取りも直さ

ず上官の危急を救ひ得たものと謂ふべく其功績は拔群である。

噫氏や家庭に在りては一家の柱石となり孝悌到らざるなく軍に隨ひては實に懸軍幾百里神速機敏なる作戰に参加し名状すべからざる困苦缺乏を克服し頑敵を屠る事幾度か常に勇敢機敏なる模範となり偉勳を奏した。眞に是れ皇軍の精華であり軍民の驍猛であつた。梅の香は眼前に梅を見ずとも腹中は四邊に漂ふものである。氏今や肉體はかくれても義勇報國の

譽は萬代に輝き幾多の後進者に清き魂を與へてくれるであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 梶本 洋

氏は栃木縣那須郡黒磯町の人にして父を千賀藏母をナヲと稱し大正三年五月三日生れで未だ獨身であつた。資性温厚寡黙にして事を處するに果斷であつた。昭和四年三月黒磯小學校高等科を卒業後黒磯青年訓練所並に農商國民學校に入學し昭和九年三月同校を卒業した。氏は小學校を卒業するや直に土に親む覺悟を定め農事に勵み父母を扶けて逐年成果を向上し又柔道を好み町道場に通ひて初段に進み自ら修養にも努め農村青年の重鎮を以て囑目されて居た。

昭和十年一月宇都宮歩兵聯隊へ入營し同年九月一等兵に進級昭和十一年二月二十六日より同年三月二十日迄戒嚴に關する勤務に従事し同年七月歸休除隊となつた。在隊間劍術優秀に付聯隊長より賞状を附與せられた。

支那事變勃發するや坂西部隊に召集せられ勇躍北支戦線に赴き昭和十二年十一月八日院堡集附近の戦闘には第一線小隊の分隊に屬して奮戦し翌九日には舊魏縣の戦闘に参加し翌十日より十二日に亘る大名附近の戦闘に於ては第十一中隊第二小隊長大川少尉の指揮に屬し當初豫備隊たりしが十一日午後三時前面の敵陣地に突入すべき命を受け小隊は中隊の左第一線となり攻撃前進に移つた。敵は之を認むるや忽ち斜射側射の猛火力を射注いで來た。之が爲前進意の如くならず速に敵の側防火力を制壓の必要があつたが前面の高梁畑に遮られて目視し得ず敵陣地の情況詳かでなかつた。小隊長は第一分隊長に高梁畑の彼方に在る敵側防火器の偵察を命じた。此時氏は敢然猛烈に飛來する彈雨を物ともせず他兵に先んじ高梁畑

の前縁に進出し斜左前方の堆土上に敵の重機陣地のあるを發見し速に之を報告し尙も引續き偵察せんとする一刹那憎むべし敵彈飛來氏は胸部貫通の銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。併し氏の犠牲に依り速かに側防火器の撲滅に努め激戦を交へ所屬部隊は同日午後八時三十分黃河北岸に於ける牙城たりし大名城を攻略するを得た。

氏の戦友であつた佐藤照興は氏の最後を看護した者であるが次の如く報じて居る。「梶本は前進命令の下つた出發點から約五百米の處で敵彈に倒れた。自分は小隊の連絡下士官を命ぜられて居たので梶本の側に走り寄り假綱帶をしてやつた。致命傷と感じたので梶本！ 佐藤だ何か言ひ遣す事があるかと尋ねた。梶本の中すには俺は國家の爲又 天皇陛下の御爲死んで行くのに何の悲しみもない。之で満足だと答へる言葉も苦しさうであつた。やがて苦しみ息の中からかすかにも 天皇陛下萬歳と途切々々に聞えた。自分は思はずハラハラ涙が出て來た。そうか良い覺悟だ此事は必ず君の家にも中隊長へも傳へてやるぞと擔架の來着を待ち假綱帶所まで送り込み中隊の後を追ひ第一線へ駆けつけた。」

瀕死の重傷者が之れ支物の言へるのは既に絶倫な氣力である。此立派な覺悟と氣力があればこそ彈雨下の偵察も出來たのであらう。氏が尊い心根には何人も頭が下がるであらう。喧嘩戦の尊き犠牲皇軍の精華肉體は朽ちても氏の英靈は萬代に生かざるべく而して氏の勳功は皇軍戦史に燦然として輝くであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 加納 隆 夫

氏は島根縣能義郡山佐村の人にして父を順太郎母をカメノと稱し大正元年十一月二十六日生れで未だ獨身であつた。資

性豪膽活潑にして諸事研究心に富むの一面父母に仕へて至孝妹等を勞はり慈しみ一家の柱石となり勤勉努力以て家計を助けて居た。大正十五年三月上山佐尋常小學校を卒業後直に同地實業補習學校へ入學したが家庭の都合に依り中途退學して山佐郵便局集配手となり餘暇を以て青年訓練所に通學し昭和八年一月同所を卒業し昭和九年九月には通信書記補に採用され松江郵便局在勤を命ぜられた。氏は訓練所通學間は他生の模範となり訓練日には父に集配代理を依頼し一日も缺勤せる

事がなかつた。又集配勤務間一農家の出火を發見し逸早く駆け付け消防に努むると共に身を挺して火中に飛込み重要物件を搬出し且附近に在りし郵便箱を保護し大事に至るを防止した。其大膽機敏なる行動は全村民の絶讃となり時の廣島逓信局長を初め逓信協會支部長山佐郵便局長郡消防義會長より或は賞状或は金一封を附與せられた。



勝し優等賞状を附與せられ昭和九年七月歸休除隊に際しては善行證書を授けられた。

支那事變勃發し氏も召集令狀に接したが自若として令狀を手にし郷里へ歸らうともせず入營迄僅少の餘日を利用して外勤に従事し最後一日の如きは申込受理十一件保険金四千圓の實績を収め涙ぐまじき活動を續けた爲に今回氏の出征に際しても局員一同は保険課内に産土神を祀りて氏の武運長久を祈願し男子職員は心からなる幟を又女子職員は眞心こめた千人針

を作つて氏の壯途を送つた。斯くて福榮部隊に應召し勇躍北支戦線に出動し八月二十五日より九月五日に亘る間津浦沿線の夏庄及燒密盆の戦場に擲弾筒手として参加した。九月五日所屬中隊は燒密盆の敵陣地を攻撃する目的を以て正午行動を開始し午後三時より攻撃前進を起した。氏は第三小隊擲弾筒分隊に屬し泥土と出水地域を克服しつゝ適時適切に正確なる射撃を行ひ擲弾筒の威力を發揚した。第一小隊が敵前三百米に近接するや俄然左側方より敵機關銃の猛射を受け負傷者續出した。氏は敵彈雨飛の中を物ともせず第一線近く進出し此機關銃を猛射して遂に之を制壓し以て第一線の前進を容易ならしめた。而して第一線が敵前百五十米に達せるとき敵陣地の左翼に亦もや自動火器現はれ我第一線を猛射し中隊は再び負傷續出するに至つた。氏は憤然として水流を渡り第一線の側方に進出し自己の負傷をも顧みず正確迅速なる射撃を以て全く之を沈黙せしめた。之が爲友軍の志氣は大に昂り戦線頓に活氣を呈したが折柄敵の掩蓋機關銃座よりする敵彈飛來の爲氏は右顚骨部に貫通銃創を受け擲弾筒を握りしまゝ遂に壯烈なる戦死を遂げた。時に午後四時二十分頃であつた。

噫氏や家庭に在りては一家の柱石となりて家族を扶養し職を郵便局に奉ずるや精勵恪勤局員の模範となり軍に従ひては忠誠勇武克く戦線に投合して拔群の勳功を樹て赫々たる戦勝の端を拓いた。眞に是れ皇國軍民の龜鑑であると謂ふべきである。今や聖戦の尊き犠牲となつたが氏の英靈は永世に生くべく其名は皇國戦史と共に千載に薫るであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 金子長助

氏は山形縣鐵砲町の人にして父を長七母を志のと云ひ大正四年八月八日を以て生れ四歳にして父を失ひ母の手一つにて

養育せられ兄妹あり。性温順にして孝心深く幼より病弱なる母を憂ひ之をいたわり又兄妹に對する同情深く出征後戦地より寄せたる手紙にも「東京兄上も元氣に暮してゐるとの便りで自分も安心して働く事が出来ませぬ母上には何時も言ふ様に仕事だけはせぬ様に御願ひ致します妹も早くお針に通はせる様にして下さい(中略)益々暑さに向ひますから母上様にはくれぐれもお體を大切にして下さい」と以て氏の性格を察知する事が出来る。

氏は昭和四年三月山形市第二小學校を卒業し直に山形市荷札製造會社に奉職し昭和十一年一月山形歩兵聯隊に入營し五月北支駐屯隊に編入せられ北平附近に駐屯し熱心軍務に勉勵間もなく一等兵に進んだ。昭和十二年七月蘆溝橋事變突發と同時に出動安達部隊に屬して八日蘆溝橋附近敵陣地の攻撃には右第一線小隊に在りて終始奮戦殊に氏の中隊は中央平坦地を攻撃前進せる關係上正面及び城壁上より猛烈なる敵の十字火を受けたが第三分隊の最左翼にあつた氏は巧に地形地物を利用して勇敢機敏に一進一止敵の最左翼に肉薄攻撃した。敵は同分隊の包圍的猛射により遂に動搖を來たした。早くも之を看破せる分隊長の突撃號令により氏は猛烈果敢に敵陣地に突入奮戦格闘の末敵數名を噓し遂に敵第一線陣地瓦解の端緒を招來した。小隊主力亦機を逸せず突撃を敢行敵に多大の損害を與へて之を撃退し續いて中隊は猛烈なる追撃を始めたが氏は勇躍追撃に移り永定河を渡河せんとした午前六時不幸左下顎に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。氏や至孝家を思ひ至忠奉公に勇む。今次事變の勃發するや聖戦の當初より軍に従ひ勇戦克く任務を完うす。不幸永定河



渡河激戦に於て終に敵陣の礎す所となる哀惜何ぞ堪えん。

然りと雖も氏が勇猛果敢一死の忠は克く友軍快捷の果を結ぶに與つて力ありしものにして其功績は拔群であり永く青史に輝き其の英靈は萬世に生き護國の神として皇國の將來と遺族の前途に慶福を垂るゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍工兵上等兵勳八等功七級 川崎國男

氏は兵庫縣明石郡大久保町の人にして父を徳治母をてると云ひ大正三年九月十九日を以て生れ、未だ獨身であつた。資性温厚父母に孝養を盡し職務に對しては頗る精勵であつた。昭和二年三月江井島尋常小學校を卒業し爾來家にあつて父母を助け家業に従事してゐた。昭和十一年一月現役兵として工兵聯隊に入營翌十二年七月支那事變により福榮部隊に屬し北支方面の征途に就き八月十二日には野砲兵隊掩護部隊として天津に向ひ前進したが時恰も連日降雨のため道路泥濘行軍頗る困難で野砲隊に於ては殊に甚しく此の際道路の修築に或は又傳令警戒の諸勤務に服し以て被掩護部隊の行動を容易ならしめ次いで津浦沿線の攻撃に於ては八月二十三日歩兵某團に配屬せられ小王廟附近の戦闘に参加し八月二十五日歩兵部隊の夜襲決行の際所屬工兵中隊長は敵前道路阻絶の状況浸水箇所を偵察として將校斥候を派遣した。此時氏は選ばれて其傳令として出發したが敵前三百米迄勇敢にも折疊舟を携帶潜行し小王莊堤防既設陣地に據る敵より迫撃砲及び機關銃の射撃を受けたが屈せず躍進し將校斥候の偵察に遺憾なからしめ有爲の報告を提出するに至らしめた。次で馬廠攻撃準備のため八月三十一日小王莊より馬廠附近に轉進し其間兵器馬匹荷物等の積載卸下或は警戒勤務に服して部隊の行動を容易ならし

め九月七日より同十三日に至る馬廠附近の攻撃に方りては右翼歩兵團に配屬せられ胡辛庄を経て双橋に向つて前進した。此間敵火を冒して折疊舟の回漕に任じ以て氾濫地帯に於ける工兵の獨壇場として技倆を發揮し又敵前氾濫地帯の前進には小行李の行動を援助して配屬部隊の戦闘力を充實するに貢献する處大であつた。更に滄縣附近の攻撃に際して中隊は歩兵部隊に配屬せられ氏は中隊の指揮機關に屬して九月二十三日午前四時中隊長より第三小隊長(右第一線大隊に配屬人和莊附近に位置す)に鐵條網及トーチカ破壊用器具爆藥準備其他情報蒐集に關する筆記書類を傳達すべき任務を受けて出發し途中敵の猛射を冒してよく所命の任務を全うし尙第三小隊長より中隊に呈出する筆記報告を携へ敵火の危険を冒し疾驅して胡芻子對岸人和莊西端堤防に引返し中隊長に報告せんとする刻那左胸部に穿透性貫通銃創を受け九月二十三日午前八時三十分を最後に壯烈なる戦死を遂げた。



中隊長は氏の勇敢適切な活動に依り部下の掌握を確實にし遠隔小隊長をしてトーチカ爆破の偉功を奏せしめ延て勝利を得るに至らしめた其功績は拔群である。上陸以來泥濘地に於ける砲兵隊掩護とし

て地形地質に非常なる影響を蒙る砲兵隊を所望の時期所望の地點に到達せしむるに努め以て諸兵協同動作を遺憾なからしめ又氾濫地帯に於て工兵科特色の操舟技術を以て或は將校斥候に従ひ或は歩兵部隊の交通を助成し諸兵一如の實を示した。天は當年豪雨を以て洪水を來たし皇軍の試練に供したかの感あるも氏は工兵科の性能を發揮して此試練を克服し又中隊指揮班員として中隊長の手足の如く活動し重要なる傳令勤務に服しよく其任務を達成して遂に河北の華と散つたが其功

績は戦史殊に氾濫地帯に於ける神速果敢なる作戦と共に永く稱へらるゝであらう。

氏は即日工兵上等兵に進級し次いで勳八等白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 吉川 辰 男

氏は岡山縣眞庭郡川東村の人にして大正四年七月二十日生れで父を岩藏母をすゑと稱し未だ獨身であつた。資性誠實にして責任觀念旺盛又胸底深く剛健不撓の氣概を有して居つた。郷里の尋常小學校卒業後は家庭に在りて家業を手傳ひ昭和十一年一月徴兵として岡山歩兵聯隊に入營し日夜軍務に精勵中支那事變勃發に際會し野戰部隊に編入せられ津浦線に出動するに至つた。

所屬中隊は昭和十二年八月二十日より三日間に亘り津浦線の楊柳青南方地區に蠢動する敵を掃蕩した。氏は泥濘膝を沒し敵彈雨飛の中を意とせず勇敢に前進し次いで二十三日午前五時四十分西邊庄の敵に對し攻撃を開始するや敵の銃砲火は十字を切つて集中し其火力は刻一刻熾烈となつた。されど氏は毫も之に動ぜず一進一止巧に地形地物を利用し敵陣地に肉迫した。斯くて突撃の機熟するや勇躍率先突撃を敢行し敵に多大なる損害を與へ午前八時三十分遂に西邊庄を確實に占領した。爾後直に東五里庄の敵陣地を攻撃して午前十一時之を占領し午後七時東窪に轉進した。此夜午前二時數倍の敵より夜襲を受けたが氏は沈着剛膽敵に多大なる損害を與へて之を撃退した。

所屬中隊は八月二十九日王官屯附近の敵を攻撃し三十一日には雙樓及桃家庄を占領し附近の敵情搜索に努め九月四日より馬辛庄及馬集の攻撃に参加し五日曲庄陣地を攻撃して該地を占領し午後二時より後屯を攻撃するや氏は敵銃砲火身邊に

集中する中に神色自若として一進一止敵に接近し率先敵陣に突入し午後四時五十分後屯を占領した。

所屬中隊は馬廠河附近の戰鬪に於て所屬兵團の作戰上選ばれて決死中隊となり九月十日午後三時五十分敵前上陸を敢行するに決するや氏は二番艇に乘組み敵前五十米の地點に勇躍上陸した。折柄敵の射注ぐ銃砲の十字火は熾烈を極めたが氏は剛膽不敵而かも細心の注意を以て克く地形地物を利用して匍匐前進を續行しつゝ頭敵を適切有効に猛射し或は之を制壓



し或は之を沈黙せしめ以て所屬中隊の攻撃を有利に進展せしめた。然るに敵の方翼方面に現出せる敵の機關銃は死物狂に猛火を浴せ來り遺體乍ら其一彈は氏の頭部を貫通し茲に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。時に午後六時四十分である。所屬中隊の將兵は悲憤の涙を拂へつゝ猛烈果敢なる突撃を行ひ同日午後七時敵を粉碎し馬廠陣地の一角を確實に占領し氏の忠靈を弔ふた。

噫氏や各戦常に責任を重んじ勇敢機敏極的に任務を遂行し赫々たる武勳を奏したが就中最終戰場たりし馬廠附近の攻撃戰鬪に於ては決死隊の一員として細心大膽克く近代戰の特質に即應しつゝ正確なる猛射に依り一發必殺の妙技を發揚して敵を驚倒し友軍の志氣を鼓舞して中隊戰勝の途を開拓した。是れ洵に皇軍歩兵の眞價を發揚し得たるものであり同時に一般軍人の龜鑑たるべきものである。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 美城元旦

氏は兵庫縣出石郡小坂村伊豆の人にして父を官吉母をふみと言ひ大正四年一月一日生れで性質温順兩親に仕へて至孝近隣の風評極めて良好であつた。昭和四年三月郷里の小坂小學校高等科を卒業翌五年五月大阪市に出て石鹼製造所に雇備せられ石鹼製造に従事し昭和十一年一月十日現役兵として鳥取歩兵聯隊に入隊同五月支那駐屯歩兵隊に編入せられ山崎部隊にあつて北支の警備勤務に服務中昭和十二年七月事變の勃發するに及んで直ちに



として展開し南苑西北角の敵に對し攻撃前進したが午前九時頃敵前二百五十米附近に達した頃左前方の敵より猛射を受くるに及んで氏の所屬小隊は該敵を攻撃するの命を受け前進を續行して敵前百五十米に肉薄した。然るに此の時左斜方向に敵の機關銃現出して猛射し始めたため山崎部隊正面の前進は頗る困難となり氏の分隊は此の側防機關銃の撃滅を命ぜられた。氏の分隊は直に畑地内小溝を利用し巧みに敵の側背に迫り此等分隊員は分隊長と共に榴弾を投擲しつゝ猛烈に突入

して該敵を撃滅し直ちに輕機關銃を以て敵を側射し多大の損害を與へたが此奮闘中分隊長は遂に戦死するに至つたので氏は「分隊の指揮は美城一等兵が取る」と叫んで分隊長に代つて分隊を指揮し敵の右側背に迫る如く勇敢に前進中午前九時五十分頃右斜前方よりする敵重機關銃の猛射により氏は惜くも左胸部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。

噫、氏や戦線に立ちて僅かに二旬北支の露と化した事は痛恨極まりないが氏が勇戦奮闘以て支那二十九軍の膽を奪ひ緒戦に於ける我が精々たる戦勝の素因を作つた氏の功績は頗る偉大にして永く青史に輝き其忠魂は永へに生き護國の神となり更に皇國を守護し又遺族に祐を垂るゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 横山清藏

氏は鹿兒島縣肝屬郡大給村西俣の人にして父を三太郎母をツルと云ひ兩親は既に物故し明治三十三年四月五日を以て生れ、妻コヨとの間に道徳外四名の兒女あり。明治四十五年三月南尋常小學校を卒業し爾後家庭にありて農業に従事し大正九年十二月現役兵として都之城歩兵聯隊に入營し満期退營後も農業に精勵し家庭は圓滿であつた。

昭和十二年八月支那事變の爲應召濱島部隊中隊隊に屬し勇躍中支方面の征途に就いた。而して十月九日より齋家宅の敵陣地を攻撃し續いて東北線の東方無名部落を占領し更に十月十六、十七日に亘る東北線附近の戦闘には氏は大川少尉の指揮する第一小隊第四分隊員として十六日正午より攻撃前進を開始したが敵は地の利を占め而かも堅固な陣地に據り其機關銃迫撃砲射撃は猛烈を極め止むなく夜暗を利用し敵に近迫する事とし直に工事を施し爾後の攻撃を準備し日没と共に前

進を起し十七日未明迄に敵前四五十米の地點に達し敵陣地の状況突撃路の偵察を行つた。然るに敵は我近接を知るや一齊に射撃を開始した。氏の所屬隊は徒らに應戦する事なく突撃準備完了と共に一舉敵陣に突入した。氏は前日來勇敢に奮戦



を續け愈々突撃に際しては分隊長に従ひ突入し銃剣を揮ひて敵の猛火の中に勇戦奮闘し將に敵陣地後端を占領せんとする頃不幸前頭部に貫通銃創を受け惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。氏や既に兩親を喪ひ一家の柱石一男四女を夫人に托して征途に就く。而かも大義親を滅するの概を以て至誠奉公に勇み毎戦奮闘して克く任務を果たす。不幸敵彈の爲めに江南に恨を留めて落花の最期を遂ぐ。誠に痛惜に堪へず。

輝き其の英靈は不滅に生き護國の神となりて皇國を守り又愛兒の前途に對して福祉を垂るゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍工兵上等兵勳八等功七級 米山 温 男

氏は岡山縣川上郡落合村の人にして父を時治郎母をフデノと稱し大正五年四月一日生れで未だ獨身であつた。性温順正

直にして諸事着實世人の信用厚かつた。昭和五年三月落合村立小學校の高等科を卒業後同年四月糸崎鐵道學校へ入學昭和八年三月三ヶ年の課程を終了して退學した。

昭和十二年三月支那駐屯工兵隊大賀部隊へ入營軍務に精勵中北支事變勃發し直に出動する事となつた。昭和十二年七月二十七日通州南門外の攻撃に於ては武田小隊破壊班作業手として奮戦し翌二十八日南苑攻撃に方りては武田小隊第一分隊に在りて石溜莊附近の戦鬪に奮闘した。翌二十九日蘆溝橋の總攻撃に際しては第一班即ち梯子班に在りて歩兵の最前線に立ち梯子に依り城壁に突撃路を開設し以て歩兵をして城壁を占領せしめ翌三十日より蘆溝橋及長辛店附近の交通作業に従事した。誠に僅々數日間目ま苦しき戰場移動と共に各戰場常に決死的奮闘に依り第二十九軍潰滅の端緒を開拓せる氏の功績は拔群であつた。



同年九月十八日より十月十二日迄は唐官屯附近の兵站道路の構築に従事し其間架橋器材糶棟搭載卸下及び之が輸送に従事し九月二十八日人和鎮に到着するや葉家莊に於ける縱隊橋架設を完了し以て南趙扶嶺への進出を容易ならしめた。時恰も増水の爲交通至難となるや氏は人和鎮より姚馬渡に至る約二十軒の地區に於て連日連夜漕渡に依り兵站の人馬及車輛を渡河せしめ其輸送に至大なる便益を與へた。其勞苦其赤誠は蓋し専門兵科の體験者にあらざれば十二分に察知し得ぬであらう。超えて十月二十三日以後は氏の最終戰場たる忻口鎮附近の攻撃戦鬪に入つた。忻口鎮附近の敵陣地は戦線約四里に亘り天險に據り太原方向に南進せんとする我軍に對し頑強に拒止する目的を以て

其精銳を以て誇る中央軍に依りて守備せられた。我軍は地形の不利其他各種の困難を克服して堅忍不拔克く寡を以て数十倍の敵を撃破して遂に之を攻略し太原方向に壓迫したのである。氏は當時大賀部隊奥田隊の破壊班爆薬手として十月二十四日正午行動を起し軍艦山の敵重火器を撲滅すべき任務を授けられてあつた。斯くて午後三時軍艦山に突撃を決行し之を奮取したが敵の斜射側射を受け加ふるに當面の敵は益々頑強にして爾後の前進困難となり戦闘のまゝ夜に入つた。其夜午後八時頃敵は兵力を増加し數次に亘り死力を盡して夜襲に轉じて來た。茲に於てか混戦亂闘の修羅場と化し友軍歩兵の死者も續出し又携行彈薬も早や缺乏の状態であつた。午後十一時氏は所屬小隊長以下七名と共に第二次突撃隊に加はり逆襲し來る敵を攻撃すべき命令を受けた。即ち友軍歩兵の掩護下に爆薬並に手榴彈を以て當面の敵を再三攻撃し多大なる損害を與へた。就中氏は率先迅速機敏に敵陣地に突入し爆薬に依り敵の重火器を撲滅した。惜い哉此激戦に於て氏も亦左肩脚部に敵砲彈の破片創を受けて後送され關東軍野戰豫備病院に收容され加療中の處十一月七日遂に殉難の華と散つた。噫郷に在りては温良兒子も懐き軍に従ひては勇猛鬼神も避くる氏の行動こそは聖旨に適ひ奉る誠の大勇であらう。氏の尊き犠牲は果然徒爾ならずして軍艦山の一角を確實に奪取する端緒となり敵兵敗退の要因ともなつた。即日工兵上等兵に進級し勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍工兵上等兵勳八等功七級 吉永三四一

氏は東京市目黒區駒場町の人にして明治四十一年十二月二十八日生れ、父を源五郎母をトラと稱し妻トリとの間には未だ愛子が授からなかつた。資性剛毅淵達職務に忠實であつた。大正十二年三月西多摩郡霞小學校高等科を卒業し爾來農業

に従事し入營時に至つた。昭和五年一月現役兵として工兵第一大隊へ入營し第一期教育修了後は馬取扱修業の爲騎兵第一聯隊へ派遣せられ熱心精勵所定の課程を修得して歸隊し工兵一等兵を命ぜられ爾後引續き精勵して精勳章を附與せられ昭和六年十一月歸休除隊を命ぜられた。

支那事變勃發するや昭和十二年十月今日部隊に召集せられ勇躍江南戦線へ赴いた。戰場到着以來未開の水路を晝夜の別なく風雨を冒し危険を物ともせず飢渴を忍びつゝ第一線部隊へ彈薬糧食の水上輸送に任じ或は戦傷病者の輸送等に活躍中急遽太平洋より杭州方面に轉進を命ぜられ其移動中烏溪鎮に於て不幸敵彈に墜れ聖戰の人柱となつた。左に氏の戦歴を誌し功績を偲べば次の通りである。



昭和十二年十一月十日より十六日に亘る間は金山楓涇間に於て第一線部隊への軍需品及戦傷病兵の水上輸送に従事し氏は船首手として極風沐雨終始一貫班内の年長者として垂範示教以て克く軍の諸要求を充足し任務を全うした。翌十六日より十九日に亘る嘉興附近の攻撃に於ては一部野砲兵の永興橋―双橋間の水上輸送に同じく船首手として服務し克く戦機に投合する輸送作業を遂行した。次で十一月二十日より十二月四日に亘る間は臨時水上輸送隊に屬し楓涇鎮より湖州間並に湖州より滬陽間の軍需品及戦傷病兵の水上輸送に任じ依然船首手として活躍し作戦に貢献せる所甚だ大であつた。次で十二月五日より八日に亘る間は國崎支隊の水上輸送を命ぜられ氏は陶村―大樟樹―大龍口間の水路偵察及支隊兵員乗船用の地方舟の蒐集を擔任し熱誠

且積極的に任務を遂行し且長路—太平府間に於ける岡崎支隊の歩兵一箇大隊を安全迅速に水上輸送を完了した。十二月九日より十一日に亘る岡崎支隊の揚子江渡河に際しては船首手として蕪湖鎮西北學母山附近に於ける渡河作業に従事し之亦安全迅速に渡河を完了せしめた。

斯くて十二月十三日は蕪原中隊第三小隊長横山少尉の指揮下に第六舟艇に乗船し船首に在りて航行中午後三時三十分大龍口にさしかゝつた。此時先頭舟は敵機關銃の猛射を受けたが氏は命令一下直に舟を敵岸に繋留して迅速果敢に上陸し敵を攻撃した。然るに敵は堅牢なる家屋に據り頑強に抵抗せるを以て氏は該家屋を焼夷すべき意見を小隊長に具申し其容るゝ所となるや氏は率先焼夷作業班に加はり揮發油を浸潤せる手榴弾式の布弾を急造し海野上等兵以下四名と共に該家屋に接近して之を窓より投擲して遂に之を焼夷し同方面に於ける中隊の進出を著しく容易ならしめ茲に戦捷の端緒を開き午後七時三十分大龍口を占領した。惜いかな其後大湖南方湖州へ集結の爲烏溪鎮を通過の際敵弾の爲壯烈なる戦死を遂げた。氏の職務たるや全般を通し必ずしも華かではなかつたが戦場一般の地形は沼澤地多く軍の作戦水上輸送の如何は直に重大なる影響が伴つたのである。然るに氏は自己の職分を克く理解尊重し常に率先業に揮て、精勵事に當り毎戦隠れたる偉勳を奏し又頑敵に遭遇するや創意工夫奇功を奏して赫々たる勝利を獲得せしめた。洵に是れ皇軍工兵の眞價を掲げたのみならず其聖戦に殉ぜし尊き犠牲は皇國軍民に永く記念せられ限りなき感謝感激を捧げらるゝであらう。

氏は即日工兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵上等兵勳八等功七級 高木繁春

氏は長崎縣南高來郡安中村大字安西町の人にして父を養吉母をタマと云ひ大正二年三月一日生れで未だ獨身であつた。

昭和二年三月高等小學校を卒業し續て補修科に入り翌三年三月卒業した。性質温順にして父母に孝養を盡し交友に篤く郷黨の風評良好にして模範青年であつた。昭和八年の徵集補充兵であるが昭和十二年九月野口部隊に應召衛生隊に編入せられ中文方面の征途につき十二月四日より同七日に亘る青洲附近の戦闘に於ては患者搬送のため駈者として馬匹を愛護し患



路を冒してよく其任務を完うした。次いで翌八日蕪湖附近の戦闘に於ては中隊長佐藤少尉の指揮に屬し車輜中隊駈者として灣止鎮に開設しある衛生隊編帯所に車送の任務を以て午前十時四十分灣止鎮北側に達したる際第一線歩兵及野砲兵は西北方に向ひ敵を追撃するため前進を開始した。此時灣止鎮西北側クリークの右岸より突如機關銃の掃射を受け通信隊野砲兵隊の戦傷者續出した。氏は先頭にあつて小隊長の命を受け率先決死的に敵機關銃の掃射を冒して前進し傷者を收容して居たが其際後頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。

氏の戦歴は極めて單調であるとは云へ靜かに氏の戦場勤務を察すれば附近戦場の一般地形たるや徒歩單獨兵と雖も歩行困難な所である。縦令雨期は過ぎ去つても車輜部隊の苦勞たるや察するに餘ありと謂はねばならぬ。敗殘兵は所在に蠢動する中を自衛力に乏しき車輜部隊が晝夜兼行傷者の運搬に従事する勞苦は更に重苦を與へるものである。諸給與の缺乏は第一線部隊に比し勝るとも決して劣るものではない。氏は斯る絶大なる勞苦の中に毅然として椽の下の力持を以て尊き職

分に邁進した。更に思を致さば特務兵たる氏が克く軍人精神に徹底し又自己の任務を忠實に周到に力行し一度友軍の危害に遭遇するや彈丸雨飛を物ともせず冷靜機敏に傷者を收容せる決死的行動は第一線の殊勲者に比し斷じて遜色がないのである。其忠勇武烈は正に一般軍人の龜鑑であり其壯烈なる最後は眞に聖戰の尊き犠牲であつた。氏の勲功は皇軍戰史と共に輝き其芳名は永久に傳へらるゝであらう。

氏は即日輜重兵特務一等兵に更に破格にも上等兵に進められ次で勲八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勲章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勲七等功七級 田中幸男

氏は兵庫縣城崎郡新田村の人にして亡父を照二郎母をはまと云ひ大正二年九月四日の生れであつた。大正十五年三月新田村尋常高等小學校を卒へ爾來家業を手傳ひ精勵して居たが昭和二年八月から内務省出張所の河川改修工事々務所に勤務し昭和八年十二月鳥取歩兵聯隊に入營間もなく滿洲事變に従軍し各地に勇戦績々たる武勳を樹て昭和九年四月勲八等瑞寶章を賜はり同年十二月歸休を命ぜられ除隊凱旋し大阪市港區株式會社阪口伸鐵工場に入所することとなつた。そこで父亡き後の母弟妹を引連れ大阪に居住し一家を扶養し日夜精勵其業績は衆に秀で遂に模範工として屢々表彰せられた。

昭和十二年七月支那事變勃發するや八月應召し母や弟妹を後に勇躍北支方面の征途に就いた。當時北支は稀なる豪雨に出水し道路は泥濘膝を没する有様で軍隊の行動頗る困難であつたが氏は連日難路を行軍し九月二十一日には中村中尉の指揮下に第二小隊第一分隊小銃手として滄縣北方人合庄東側敵陣地の攻撃にあたつた。當時氏の所屬隊は豫備隊であつた。

翌二十二日揚陸第一線に加り敵の猛烈なる銃砲火を冒し一進一止攻撃前進して夕暮該敵陣地近く肉薄した。然るに敵は陣地前に鐵條網を設け更に其前方に水濘を廻らし頗る堅固なるものであつた。茲に小隊は鐵條網破壊班を編成し突撃路を開設する事となり此時氏は選ばれて其破壊班に加へられた。破壊班長以下選抜の勇士は日頃の訓練を發揮し忠節を擧げずるは此の時とばかり一同死を決し周到なる準備を整へ上官戦友に訣別して勇躍出發したのである。班長以下一同は敵火の下



を巧に地形を利用し匍匐前進して遂に水濘を越ゆるや敵は我が破壊班を發見し猛烈に手榴彈や機關銃を發射し爲に我が友軍は敵陣地に猛射を浴せ破壊班の行動を援助してくれたが其の光景は誠に凄慘なるものであつた。班長以下氏等一同は躊躇せず敵の猛火を冒し鐵條網を片手に鐵條網に迫つた。斯くて其前線を切斷し逐次第二第三線に向はんとせし時氏は惜しくも頭部に貫通銃創を受け鐵條網を持つた儘壯烈なる戦死を遂げた。然かし破壊班員は尙多數死傷せしも最後迄奮闘遂に突撃路を開設したのであつた。

噫、氏北支戦線に立て僅かに月餘にして華北の華と散る。洵に痛惜に堪へず。氏を一家の柱石と頼みし母や弟妹を顧うの時惻隱の情忍び難きものがある。然かし氏戰場にある事甚だ短かかりしと雖其功績は偉大にして就中一死以て鐵條網を破壊し突撃路を開設した事は我が軍突撃成功の礎石にして其功績は拔群であり其勇敢なる行動は皇國軍人の龜鑑と謂うを得べし。

氏や家郷に自己が扶養しありし母や弟妹の事を顧う時後ろ髪を引かるゝ思ひがあつたらうが一死の忠を以て鐵條網破壊

に進みしは忠即ち孝なりとして勇躍満足して死所に邁進したのであらう。必ずや氏の英靈は不滅に生き護國の神となりて皇國を守り又遺族の守護神として母や弟妹に慶福を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進められ勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵上等兵勳七等功七級 竹下 登 重

氏は愛知縣南設樂郡作手村大字白鳥字貝津の人にして父を重助母をむめと云ひ明治四十五年三月一日生れ大正十四年三月小學校卒業の上作手農林學校に入學昭和二年三月同校を卒業し同年十二月自動車運轉手見習となり昭和四年五月自動車運轉手免狀を受けた。昭和八年二月徴兵として名古屋輜重兵隊に入營同年四月陸軍自動車學校練習隊要員として同校に分遣せられ同年十月關東軍自動車隊に配屬せられ或は奉天に或は新京に或は熱河省に於て兵站輸送業務に服し關東軍の活躍に多大の貢献を致し昭和十年満期除隊となつた。

昭和十二年八月支那事變の爲め應召近藤衛生隊本部附自動車運轉手として上海方面の征途に就き九月八日より同十三日に至る揚行鎮附近の戦闘續いて十月二日に至る劉家行及び顧家宅附近の戦闘十月三日より同十五日に至る滄漢濱クリク附近の戦闘更に又十月十六日よりの大場鎮附近の各戦闘に参加し衛生材料の運搬傷者の後送等に殆ど不眠不休具に辛酸勞苦を忍びて任務を遂行し殊に劉家行顧家宅附近戦闘の際には第一線部隊に發生せる「コレラ」傳染病者の收容後送任に砲車輜重車の輻輳加ふるに降雨の爲道路泥濘の中を一日に數回寶山第二野戰病院に往復し又滄漢濱クリク附近の戦闘に於ては十月十日衛生材料受領の爲吳淞野戰衛生材料廠に出張を命ぜられた。當時敵の銃砲彈の飛來甚しく且折柄の降雨に

道路泥濘と化し割へ車輻輳し遂に進行不能に陥りしが氏は任務の重大なるに儘み臂力にて車を押し進め往路一晝夜半の困苦を克服して同廠に到着所要の材料を受領し歸途更に往路と同様降雨と泥濘の惡路を冒し殊に途中橋梁破壊に遭ひ已むなく月浦鎮店鎮道を迂廻して敵彈下を辛くも歸着し以て輜重作業に支障なからしめ又大場鎮附近の戦闘に於ては衛生隊副官の指揮下に本部移動のため荷物器材の運搬に任じ氏は諸部隊の交通繁盛とならざる内に輸送を完了するを可とする旨意見を具申し副官の快諾を得て勇躍輸送を開始し同日午前八時迄に



大部の輸送を完了せり。然るに正午頃に至るも金櫃其他公用行李の到着せざる爲之を案じ氏は單身之を誘導せんとして出發し白揚宅東方の軍用道路に於て該車輛を發見協力して本部の西方百米畑地に誘導して來た。此時敵の砲彈二三發相次いで附近に落下せしも氏は重要なる金櫃其他の荷物の位置を離れず毅然として之を本部に搬送しありしが午後零時三十分敵の一砲彈は頭上に炸裂し氏以下三名は頭部に何れも砲彈破片割を受け惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。

抑も輜重の任や極めて重大にして其難其勞は第一線勇士の奮闘に比し毫も遜色なきは勿論寧ろ時に更に大なるものあり氏は此重任に服し不屈不撓千辛萬苦を排して美事其の任を全うす。殊に其時期の如き其の責任觀念の旺盛なる聞く者をして覺へず正襟感激の涙を催ふさしむるものあり。殉職氏の如き蓋し千載の下皇國武人の勳鑑であり其芳名は赫々たる武勳と共に永く青史に輝き其の忠魂は不滅に生き護國の神として皇國を守り又遺族の守護神として慶福を垂るゝであらう。

氏は即日輜重兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍工兵上等兵勳八等功七級 高田歌次郎

氏は東京府大島元村の人にして明治四十三年七月二十八日生で父は甚之助と云ひ既に歿し母をかねと稱し妻ヨシとの間に長男甚之助外一女の愛子がある。性進取の氣性に富み率先躬行の美德があつた。大正十四年三月大島元村小學校の高等科を卒業し昭和六年一月徴兵として工兵第一大隊に入營同年十一月歸休除隊となつた。昭和十二年十月十二日應召直に中支派遣部隊に編入せられ十一月中旬杭州灣方面の戦線に到着した。内地出發に當りては器材馬匹の積載卸下作業に又航海中は對空監視其他の勤務に服し献身的努力を拂ひ上陸後亦水上輸送業務に従事し以て李宅—金山—楓涇鎮間に駐軍中の第一線兵團に軍需品を補給し又戦傷病兵の輸送を圓滑ならしめた。

同年十一月十九日より六日間は湖州(吳興)攻撃に参加した。即ち双橋—湖州間に於ける〇〇兵團先遣隊たりし歩兵部隊の水上輸送に方り舟首手として奮勵努力克く其任務を達成し續いて十一月二十五日乃至十二月四日の間は臨時水上輸卒隊の水上輸送業務に服し大湖附近の水路偵察及地方民船の徴發並に湖洲滬陽間の軍事輸送に舟首手として克く其重任を全うした。十二月九日より三日間國崎支隊が慈湖鎮の西北方子母山附近に於て揚子江を渡河するに方りては舟首手として渡河作業に従事し克く其任務を全うした。

十二月十三日午前八時氏の所屬隊は宿營地たりし太平府を出發し同日正午頃孫家里附近に到着し晝食休止中第一線國崎支隊の彈藥缺乏に付氏の所屬中隊をして速に之を輸送せしむべしとの命に接し所屬中隊長長路に集積せる同支隊の彈藥を

浦口に輸送の爲機舟十四舟を七模合となし中隊長以下百餘名之に搭乘し長路に向ひ急行した。斯くて同日午後三時半頃洛陽湖畔大龍口北端附近陸岸を距る約四十米を航行中突如約三四百名の敵現はれ機關銃小銃手榴彈の猛射を我に集中した。

當時氏は指揮舟たる第一模合舟に搭乘し舟首手として服務したが忽ち敵彈の爲に操縦手が墮れ機關部に命中し機舟の操縦は不能となつた。乗組員は命令一下水中に飛込まんとする利那氏も亦片足を舷にかけ飛込まんとした時敵彈を受けて「う



む残念」と叫びつゝも尙勇を鼓し踏み支へたが續けさまに敵彈を受け船中に崩れながら「天皇陛下萬歳」と絶叫して瞑目した。當時第一模合舟のみにも戦死者は中隊長以下十二名の多きに達したが南京陥落を目前に見つゝ湖上に散り行く心境を察すれば轉た惻隱の情に堪えない。氏は實に胸部に貫通銃創左背部に機關銃創を受けて居た。續く六模合舟は勇敢にも敵岸に上陸し交戦四時間弔合戦の鋭鋒は物凄く敵を壓倒し遂に敵は四十の死體を遺棄して西南方に潰走した。噫第一模合舟の乗組員は一心同體の如く奮戦力闘して敵の集中火を牽制し一身を犠牲に供し後續舟の上陸を容易ならしめた。其崇

高なる犠牲的精神は語り傳へて末永く皇軍の華と謳はるゝであらう。氏は即日工兵上等兵に進級し勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍工兵上等兵勳七等功七級 高木英夫

氏は愛知縣名古屋市中村區横堀町の人にして父を喜兵衛母をしんと云ひ大正二年一月二十四日生れ大正十四年三月西加茂郡尋常小學校を卒業し爾後家庭に於て農業に従事した。性温順父母に孝にして常に近隣より賞せられて居た。昭和九年

一月徴兵として豊橋工兵聯隊に入營し其年四月滿洲に派遣せられて警備討伐に従事し同十一年二月滿期除隊功により勳八等白色桐葉章を賜はつた。



昭和十二年八月支那事變の爲應召大飼部隊に屬し北支方面の征途に就き九月十六日支隊の寶店鎮攻撃に方りては小隊長長谷川准尉の指揮下に良郷より先行し七里庄南方三百米に於て本道上にありし敵の戦車壕の通過設備並に道路補修をなしたが該地點は敵前三百米にして敵の掩蓋機關銃の猛射を受け眞に決死的の作業であつたが氏は危険を顧みず遂に完了し續いて小隊は更に第一線の直後に進出し再び戦車壕に會し之に短橋を架設する事になつた。此時氏は敵弾を冒し材料を運搬して速に小隊をして短橋架設の任を達成せしめ續いて午後四時半七里店中央本道上の補修作業中敵迫撃砲弾の猛撃を受けたるも從容として克く其の任務を遂行した。

翌十七日所屬中隊は左迂回支隊の琉璃河鎮攻撃に廣接して前進し琉璃河橋梁附近の大阻絶の排除並に耐重橋架設に従事した。

したが當時豪雨の爲め泥濘作業は頗る困難であつた。而も氏は進んで難局に當り完全に任務を遂行し其功績は頗る顯著であつた。

九月二十九日唐縣附近の戦場に於ては氏は長谷川准尉の指揮を以て堯城—唐縣道の偵察に任じ午後四時四十分頃唐縣城門前約三十米附近に於て俄然機關銃を有する優勢なる敵の猛射を受け氏の分隊は當時後尾車にあつたが小隊長の命により敵前約六十米に下車し分隊長以下勇敢に對戦した。而るに如何にせん敵は頗る優勢にして其射撃は猛烈を極め我が死傷相次いで生じ氏も亦大に奮戦中不幸胸部に貫通銃創を受け終に壯烈なる戦死を遂げた。

氏や曩には滿洲の警備討匪に従ひ功に依り勳八等白色桐葉章を授けられ今次又北支の征途に就き毎戦克く奮闘偉功を奏す。然るに悼しいかな偵察任務の遂行中敵機關銃の爲北支戦線の華と散る。然れども氏が一死の奉公は是れ東亞恒久の和平建設に對する一礎石にして其榮名は赫々たる武勳と共に永く青史に輝くであらう。

氏は即日工兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 高瀬藤利

氏は長野縣上水内郡戸隠村大字戸隠の人にして父を榮太郎母をさと云ひ明治四十二年八月三十日に生れ昭和二年三月戸隠小學校を卒業續いて農業補習學校に入學昭和五年三月同校を卒業した。性剛毅にして所謂負けず嫌ひであつた。例を擧ぐれば小學校八年間一日の缺席もせざりしが如き或は千米以上の駈歩競争に於て毎に一等賞を得たるが如き夫である。又寶光社組青年團團長として時間の勵行及び勞力奉仕に團員を督勵して村の青年團の模範となりたる如き又軍人分會班

長として在來の會費を大整理し或は又分會員他出旅行先等を調査し應召に毫も支障なき様に施設したるが如き誠に郷黨に
貢獻したる事頗る多大なるものがあつた。

昭和四年現役兵として近衛歩兵聯隊に入營し翌五年八月歩兵一等兵に進み昭和六年八月歸隊となつた。
昭和十二年七月支那事變勃發するや九月應召上海方面に出征板倉部隊に屬して十月十二日須宅附近に陣地占領の際追撃

砲第五分隊四番砲手として率先彈雨の中に活躍し分隊の射撃準備を
完了し將に砲手定位置につき射撃せんとした刹那敵小銃彈の爲め胸
部に貫通銃創を受け惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。

氏や剛膽不屈堅忍不撓の士假すに壽を以てせば幾多の警根錯節を
打開し必ずや世を益するの用材なりしならんことを疑を容れず惜しい
かな事變の初期に於て壯烈江南の華と散らしめたるや。

然れども其の盡忠報國の精神に燃え沈着勇猛敵彈雨注の裡分隊の
射撃準備を容易ならしめ爾後戦捷の素因を作したる功績や眞に拔群
にして聖戦史上傑として光輝を放つものと謂ふべきである。



氏は即日歩兵上等兵に進級次で勲八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勲八等功七級 高谷茂夫

氏は兵庫縣加古郡平岡村西谷の人にして父を三次郎母をとらと云ひ大正五年五月十六日生れで未だ獨身であつた。昭和
六年三月平岡尋常高等小學校を卒業續いて平岡青年學校に入學昭和十一年三月同校を卒業した。資性謹直兄弟に對して悌
愛朋友に對して信義よく本分を盡し嘗て郡教化聯合會長より表彰せられた。昭和十二年一月姫路歩兵聯隊に入營同年七月
一等兵に進み翌八月沼田部隊第一中隊に屬し北支方面の征途に上り八月二十五日には三間房及び馬廠河の線に據る敵を攻



撃する目的を以て前進し翌二十六日四黨口に向ふ前進の時は暗夜に
加ふるに浸水地の事として一定の道路もなく水深尺餘の地を連續強行
軍し其困難は言語に絶するものがあつたが克く之を踏破し二十七日
午前八時三十分戦闘を開始した。將兵共に皆夜行軍による空腹と疲
勞は其極に達した。されど氏は分隊長の指揮に従ひ勇戦奮闘敵の前
進陣地を奪取し又命により敵の猛射の中にあつて傷者の收容に従事
した。次で九月二日より同六日に亘る間大隊命令に基く轉進に際し
屢々中隊進路の警戒斥候に任じ宿營地に着くや歩哨或は下土哨とし
て警戒に服務し又疲勞せる時に於ても進んで諸工事に従ひ以て中隊
の行動に遺憾なからしむることに努めた。續いて九月七日より同十日に亘る馬廠附近の戦闘に於ては第一小隊第三分隊に
屬し九月九日午後九時行動を開始し桃家庄南端に集合し第一線夜襲中隊中川少尉の指揮下にあつて馬廠陣地の一角丁莊に
向つて攻撃前進し翌十日午前四時十分東部丁莊の敵より猛射を受けたるもよく分隊長の掌握下に恰も手足の如く傳令等の
任務に服しつゝ前進を續行し敵前五十米の地點に進出するや敵は益々猛火を浴せ且つ附近の泥沼のため全く行動の自由を

妨げられながら苦難を満喫しつゝ前進し敵の設置せし地雷を発見して之を掘出し將に立上らんとした際側面より敵の猛射を受け身に數彈を蒙り高聲を唱へながら終に壯烈なる戦死を遂げた。本戦闘に於けるその勇敢なる行動攻撃精神の旺盛は衆に擡んで中隊戦捷のため貢献するところ偉大であつた。

嗚呼九月九日夜半の聯隊命令や氏等は既に決死の覺悟を秘めて水盃の訣別軍旗にお別れの捧銃をなしつゝ闇を縫うて肅々として敵陣地に近接したが之を感じた敵陣地からは天地鳴動大蛇の火を吐くが如き猛射加ふるに敵前百米には丈餘の水壕横はり眞に難攻不落を思はしめたのであつた。されど氏の烈々たる忠誠は凡ゆる物的威力を制破し健闘し遂に尊き犠牲となつた。拂曉部隊長は軍旗と共に氏の傍を過ぎおゝ有難うようやつて呉れたと温顔に涙を湛えて優しき言葉をかけてやつた。心ある者誰かは感動せぬ者があらうか。氏の忠勇武烈は皇軍戦史に輝き其功は永く軍民の鑑と仰がるであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 高根澤孝一

氏は栃木縣那須郡那須村大字高久の出身にして父を祐作母をフヨと稱し大正三年十月二十七日を以て生れ未だ獨身であつた。資性温厚にして質實剛健地方青年の中堅として信用篤く郷黨の模範者であつた。昭和四年三月大島尋常高等小學校高等科を卒業後青年團幹事として又消防手として公共のため力を盡した。

昭和十年一月現役兵として歩兵第五十九聯隊に入營同七月一等兵に進み翌十一年七月十九日歸休退營後在郷軍人分會班

長となつたが昭和十二年八月支那事變のため應召坂西部隊に編入せられ勇躍北支方面の征途に就き揚家屯附近拒馬河渡河戦闘に於ては九月十五日午後九時過所屬眞木隊の暗夜拒馬河を渡り敵岸に到着するや北相村よりする敵火は頗る烈しく負傷者續出したが氏は勇敢に前進し部落を夜襲する際には猛烈敵陣に突入り部落の中央部を確保した。其の後再三敵の逆襲を受けたが或は手榴彈を投じ或は銃剣を揮つて奮戦格闘以て之を撃退し又拂曉に至つて部落内の殘敵掃蕩の場合には敵を咫尺の間に攻撃し所謂奮戦亂闘の結果敵を撃滅し部隊の戦闘目的を達成した。次で九月二十一日東釜山附近の追撃戦に於て眞木隊は尖兵として所在の敵を驅逐しながら下柴口南側高地前に達したる時高地より突如猛射を受け直に氏の所屬小隊は散開攻撃し前進又前進遂に突撃の令下るや氏は野猿の如く急峻なる高地に駆け登り敵陣に突入



之を撃退した。爾後還ぐるを追ひ粘上部落に於て再び敵の抵抗を受けるや僅々百米の地點迄近迫正確なる射撃を以て敵を制壓しその動搖の色現はるゝや敢然突入該部落を確保した。斯く機を失せず戦捷の鍵を握りしは實に氏の攻撃精神旺盛にして訓練極妙の發露の賜である。

九月二十一日二十二日に亘る王谷莊堡附近大册河渡河戦に際しては眞木隊第二小隊第二分隊員として粘上部落確保後直に敵の劇しき射撃を冒し王谷莊堡附近の渡河點を占領するや敵情監視に警戒に最善を盡し眞木隊は二十二日午前二時王谷莊堡北側陣地に向ひ夜襲を行ふため猛烈なる敵火を冒し犠牲を拂ひつゝ大册河の徒渉を完了し破壊口を経て敵に肉薄し

た。突撃の令と共に氏は敢然敵陣に突入抵抗する敵を刺殺して掩蓋を有する機銃陣地を奪取した。爾後敵は重火器支援の下に再三逆襲し來たが其都度極めて勇敢に奮戦して之を撃退した當方も拂曉に至る迄には隊の幹部以下戦友の大多數は或は傷き或は噎れた。然かし氏は士氣旺盛にして敵情監視に又は敵の逆襲を撃退し以て占領した陣地を死守してゐた然るに午前七時頃左側方よりする敵の側防火のため氏は腹部に重傷を負ひ衛生隊に收容せられ直に治療を受たるも翌二十三日終に落花の最期を遂げた。

氏や本戦闘に於て率先敵陣に突入して陣地奪取を誘促し且又奮戦以て占領陣地の一角を死守し皇軍戦捷の素因をなしたる功績は披靡にして其芳名は大冊河と共に永く後世に流れ皇軍の華と耀はるゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 高島敏太郎

氏は栃木縣安蘇郡常盤村の人にして父を忠次郎母をトヨと稱し大正五年十月五日生れで未だ獨身であつた。資性温厚寡黙昭和六年三月常盤小學校高等科を卒業昭和八年四月常盤村青年訓練所に入所昭和十一年十一月青年學校研究科を修了して居る。

昭和十二年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營し輕機關銃手を命ぜられた。支那事變勃發するや野戰部隊に編入せられ勇躍北支戰線に赴いた。斯くて九月初旬戰場に到着し同月十三日より永定河々畔の戰闘に参加する事になつた。當時氏の所屬隊は胡林南方地區の戰闘を擔當し氏は其左第一線たる第一小隊第一分隊輕機關銃々手として小隊の右第一線而かも

最前線に位置を占め敵彈雨飛の下に勇敢機敏に火力を以て敵を壓倒し突撃の好機到るや疾風迅雷の勢を以て敵陣地に突入し之を奪取した。

所屬隊は之に引續き同月十五日より拒馬河々畔北相附近の敵陣地を攻撃する事になつた。氏は右第一線第一回渡河部隊に屬し攻撃前進の命令一下他舟に先立ち勇敢にも第一舟を河岸に推進した。此時迄沈黙を守りし敵の銃砲火は一齊に火蓋を切つて第一舟に火力を集中した。噫是れ急霰驟雨の襲來も嘗ならざる猛火力、地上の何物をも撃ちのめさずには置かなかつた。忠勇無双の氏も遂に敵彈を受けて鼓に壯烈なる最後を遂げた。されど不運徒死と謂ふ勿れ其勇猛無比の此突進こそは克く敵火を吸收し他舟の河岸進出並に渡河前進に至大なる便益を與へ遂に中隊をして勝々たる成功を收めしめたのである。夫れ志士は身を殺して仁を成すと謂ふ眞に是れ崇高なる犠牲的精神の發露であり同時に偉大なる功績と謂はねばならぬ。

當時氏の分隊長たりし齋藤上等兵は重傷を負ひ病院に收容され暫く筆を持つ事さへ不可能であつたが氏の遺族に涙ぐましく弔慰の手紙を寄せ且次の要旨の戰況を報じて居る。

九月十五日午前十一時二十五分我小隊は突兵として拒馬河畔揚家屯に到着した。敵は既に拒馬河の橋梁を焼き落し河水滿々として徒渉を許さず對岸一帯は敵部隊蟠居し腕に纏かけ皇軍の半渡に之を撃滅すべく諸準備を完了して居たのである。だが迅速に敵を撃滅すべき任務を有する我が軍は工兵の協力を得て白晝敵前渡河を強行する事になつた。そこで歩兵の決死隊が編成され氏も亦素より之に加はつた。思出せば永定河戰闘以來一睡だにせず空腹の上一滴の水さへ得られなかつた。身體綿の如く疲れて居たが僅に梨を得て炎熱下に喘ぐ渴を癒し死線の一步手前に時期の到るを待構へた。やがて友軍野砲隊の制壓射撃が始まつた股々たる砲聲は小氣味よく空氣を震動して吾等の頭上を超過する敵陣地に炸裂するや

土砂を吹き上げ物凄き火焰は電の如く地表面に迸つて壯觀を極めた。午後三時五十六分となつた。出發の時が来たのだ。予は第一第二舟を併せ指揮し氏は第一舟乗組員であつた。サア行くぞ帝國軍人として立派に死なうと叫ぶとオーやりますと一同が應へた。舟を河岸に擔ぎ出した。其間に工兵は煙幕を張つて呉れたが進路の邪魔となる高梁を覆倒す日本刀の閃光と煙幕とが敵の目標となり敵は俄然我等に猛火を集中して來た。折柄高梁に足を取られ連日の疲勞の爲圖らずもかついだ舟を地上に落した。予は確りせ！と怒號すれば氏はオーと應へて衆を勵まして三十米を挺進し將に舟を浮べんとする時煙幕は吹流されて全員曝露、千二百餘の敵部隊はチェツコ機銃小銃の集中火を我に浴びせかけた。忽ち舟の兩側に居つた勇士が墜き倒された。第一舟はと顧みれば哀れや舟は蜂の巢の如く射貫かれ舟に嘯りつく勇士等は無念の齒を喰ひしばかり名譽の戦死を遂げて居た云々と認めて居る。

決死隊全員は素より殊勳者であつた。而して氏は終始一貫分隊長を扶け率先躬行職友を激勵し超人的の努力を以て職責に邁進したる氣魄に至つては天晴皇軍歩兵の精華一般軍人の龜鑑として異彩を放つものである。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 高橋 弘 壽

氏は千葉縣印旛郡八街町の人にしに父を友吉母をとらと云ひその七男として大正八年三月二十九日に生れ未だ獨身であつた。資性溫和にして孝心深く九歳の頃病床に就いて居た母の意を體し夜半二里も歩いてた町へ買物に行き近隣の人より賞讃された如き逸事もある。されど又一面剛毅率直の所もあつて他の非理非道に對し時に猛虎の如く赫怒し毫も假借しない

といふ稜々たる氣骨家でもあつた。昭和七年三月高等小學校を卒業し續いて八街青年學校に入校し十八歳にして時世に感ずる處あり現役兵を志願し合格の上同十二年一月歩兵第五十七聯隊に入營することとなつたが愈々出發の間際になると「家に歸つて來ても居る處がなくては」と佛壇を擲げ欣然として途に上つた。之を聞いた人は十八や十九歳の青年としては珍らしい變つたことをするものだと評し合つたことである。又同年七月三十日北支方面出動に際し兄に寄せた手紙に「前略故國をはなれて日本人に生れたことの幸福さを泌みく



味ふことが出来ました。身はたとへ滿洲の否北支の土と化しても永久に 天皇帝下の赤子の一員として恥ぢざるの覺悟で奮戦する考へです。兄様も母にも傳へて下さい長い間お世話になりましたがもうこれで會ふ機會もないと思はれます。私に會ひたくば櫻の花の咲く頃靖國神社へ來て下さい。では皆々様の御多幸を祈るのみ」とあつた。氏は入營後間もなく即ち昭和十二年一月末滿洲に派遣せられ北滿の沍寒に身を鍛へ勤務に教練に攷々として廻馳し齊々哈爾附近の警備任務を始めとし同年六月には乾念子島事件にも出動しそれでもまた憐肉の軟を脚つ有様であつたが支那事變の勃發するや意氣軒昂征途に轉じ八月一日より同十四日に至る間唐山附近の警備に當り時に竹下上等兵の指揮下にあつて田庄驛の分屯警備に赴き或は衛兵勤務に或は鐵道巡察勤務によく上官の指示に従ひ完全に任務を遂行し次いで八月二十二日より二十三日に亘りて萬全附近の戦闘には第二小隊第一分隊銃手として參加し初め豫備隊として中隊の位置にあつたが二十二日午後三時頃敵の一部が我左側背に反撃し來るや第一小隊と協力して

此敵を血祭りに上げ美事撃退してしまつた。爾後外長城線合張北附近の戦闘より宣化附近の戦闘に至る間氏の所屬兵團は疾風迅雷の如く優勢なる敵を撃破し關東軍作戦の目的を遺憾なく達成し其功に對し關東軍司令官より武功特に拔群なる旨感状を授與された程だつたがかの巍峨たる嶺峰に據り天險を頼んで頑強に抵抗を續くる敵を目がけ羊腸たる山腹道を或は道なき道を前進攻撃し然も猛進撃に伴ひ彈藥と糧食の補充難に一方ならず苦しみつゝも旺盛なる氣魄を續け一以て十に當り遂にさしもの敵を撃破した功績は眞に赫々たるものであつた。

昭和十二年八月下旬張家口附近の戦闘に於ては渡邊少尉の指揮する第二小隊第一分隊小銃手として參加し八月二十五日午前十時より九二四高地上の敵を攻撃し遂に前方約二百米に近迫したが其頃より敵は逐次兵力を増加し險峻なる地形と優勢なる兵力を恃み益々頑強の抵抗に出たので氏は彈雨を冒して前進し射撃威力を發揚し午後五時三十分敵陣地に突入致命的打撃を與へて該地點を奪取確保した。然るに午後八時頃より約七八百名の敵が奪回襲撃に出て來たので小隊全員協心戮力交戦二時間克く之を撃退した。執拗なる敵は更に兵力を増加し午後十一時再び逆襲し來たが小隊は既に彈藥を射盡してしまつたので石を投げつゝ敵中に突入混戦亂闘死守を續けた始末やがて戦闘後人員を調査すると氏の消息は杳として明かならず戦死者の收容旁々附近一帯を搜索之れ努めたが遂に發見するに至らずして爰に氏は戦死と確認せらるゝに至つたのである。

氏等沈着而も果敢九二四高地に突入之を奪取し百折不撓の勇を鼓し更に亦之を確保す。其健剛なる意氣と精神とは延いて友軍部隊全般の志氣を昂揚し克く八角台陣地の確保を容易ならしめ以て赫々たる戦捷の果を結ぶに與つて大に力ありし次第にて其の功績拔群と謂ふべきである。

氏が入營時に於ける言動及支那事變直前家兄に寄せたる通信を憶ひ合はすに其決意たるや一朝一夕のものにあらずして

牢固久しきに亘る信念に基くものなること了察に難からず。

噫、氏や戦局の進展と共に逐次壯烈なる行意を顯現し終に張家口の激戦に於て阿修羅の如く猛闘し護國の花と散る哀惜何ぞ堪へん。

然れども氏が一死の奉公たるや是れ東洋恒久の平和を築くの一礎石たるのみならず後繼青年を感奮興起せしめ延いて皇國を泰山の安きに置くの結果に資する大なるものがあるであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 田村直一

氏は大正二年八月二十四日岡山縣苫田郡上加茂村大字青柳に生る父を利吉母をいちと謂ひ氏は未だ獨身であつた。氏は性質温順にして寡黙而かも純朴にして情に厚く克く父母及兄に仕へて孝悌を盡し又弟妹に對し慈愛至らざるなかつた。氏は頭腦明晰にして諸判断の正鵠を得事に從ては熱心綿密目的を貫徹せざれば息まざるの氣概を有し尙如何なる大事起るとも之に動ぜざる剛膽不敵の勇猛心を胸底深く包藏して居つた。大正九年加茂尋常高等小學校へ入學し昭和三年三月同校高等科を卒業し後家業を手傳ひしが幾何もなく神戸市に出で神戸市信榮會社に就職中昭和八年十二月岡山歩兵聯隊に入營し間もなく滿洲事變のため出動し或は各地の匪賊討伐に出動して勇戦し或は一地に駐屯して地方の警備保安に任ずる等其勳功や蓋し抄からざるものであつた。翌九年に歸還し戦功に依り勳八等に叙せられ翌十年十月歩兵一等兵を以て滿期除隊となつたが昭和十二年七月支那事變のため召集を受け赤柴部隊に屬して八月十日征途に就いた。

同年八月二十日より津浦線沿線地區揚柳青及當城附近の掃蕩戰に當りては石井少尉の指揮下に第三分隊長として克く部下を掌握し勇敢に動作して敵を攻撃し特に二十二日午後一時二十分七里堡を出發し靜海縣東方地區の敵を攻撃するに當りては泥濘膝を沒する地區を前進し剩へ敵の小銃及機關銃火の亂射亂撃下に暴露したが氏は克く率先範を垂れて部下を掌握し二十三日午前五時漸く第一大隊の右翼に連撃し西邊庄の敵陣地攻撃の爲展開し午前五時四十分攻撃前進の命下るや勇躍



前進を開始した。之を目撃した敵軍は忽ち猛烈なる十字火を浴せ迫撃砲弾は頻りに身邊に落下した。併し氏は克く地形地物を利用して部下分隊を誘導し敵の左側背に進出し敵機關銃を狙撃し其猛烈なる活動を封じて仕舞ひ更に勇躍陣地に突入せんとするや惜しくも午前八時頃敵の小銃彈の爲右胸部に銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げたが氏の勇敢なる行動に依り所屬中隊の前進は大に容易となり敵陣地の要點西邊庄を占領し以て敵を包圍するの有利なる態勢となつたのである。

噫、氏や出征に方り近親に一死報國を誓ひ勇躍征途に就いたのであつたが果然極度の困苦缺乏を克服し難戰苦闘に直面して既に敵膽を奪ひ戰機を捕へて敏活に頑敵を屠り以て偉大なる勳功を奏し終に護國の神となつた。洵に皇國の精華であり軍人の龜鑑として敬仰すべきである。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 田中 一 雄

氏は岡山縣津山市上之町の人にして亡父を理太郎母を富代と稱し祖父光次郎氏は尙健在にして天理教々師を奉職し鶴山宣教所を經營してゐる。氏は大正五年八月二十一日に生れ尙獨身で在つた。資性温順孝心深く既に父に別れ老祖父及母に



仕へて孝養の誠を盡し昭和七年三月津山男子尋常高等小學校高等科第三學年を卒業次いで津山市商業專修學校に入學し翌八年三月同校卒業の後青年訓練所に入所昭和十年二月天理教別科に入學し同年七月同科を卒業し爾來祖父の經營による鶴山宣教所に於て執務して熱心斯教の宣布並に信者の心境開發に努力を續けた。め昭和十二年十一月天理教管長より訓導の稱號を贈られた。

昭和十二年一月現役兵として姫路歩兵聯隊に入營し機關銃隊に編入せられ軍務にいそしんでゐたところ支那事變勃發するや赤柴部隊に編入勇躍北支方面の征途に就いた。八月六日歩兵一等兵に進み上陸後豪雨と浸水に或は道路の泥濘に悩み或は敗殘兵の奇襲に對して至嚴なる警備勤務に服し或は補給機關の整備未完による給養の不足に耐えつゝ旺盛なる志氣を以て行軍を續け八月廿日より二十三日に亘り津浦沿線に於ける戰闘に參與した。八月二十二日には靜海攻撃のため末永部隊の指揮の下に第一中隊第二小隊第五分隊員として同日午前三時天尙暗きに行動を起し一路前進又前進午前十時二十分末永部隊が攻撃に移るや第二小隊は中隊の左第一線小隊として東邊庄の敵を攻撃す

ることとなり初陣に於ける氏は在營以來八ヶ月に亘る訓練により緊張裡に前進泥濘膝を没する出水地帯も物かは長時間に亘り敵情の監視に或は比隣分隊との連絡に或は小隊長に報告等の任務に服し奮戦之れ努めた。斯くして日は既に没したるも月明は尙通視を許すので敵の動靜を窺ひ狙撃を以て正面の敵に對し勢からざる損害を與へて翌日の攻撃を準備しつゝ夜を徹し明くれば八月二十三日拂曉戦機漸く熟するに及び火力を最高度に發揚し續いて突撃に移るや率先身を挺して喊聲と共に敵陣に突入せんとする刹那敵の手榴弾により腹部に破片創を受け壯烈なる戦死を遂げた時に午前五時である。氏は全黨全身を傾倒して奮戦し遂に不幸敵弾に噎れた。併しその勇敢なる行動は戦友の士氣を鼓舞し敵火を自己に引受け部隊の突撃奏功を容易にした次第で其功績は赫々たるものである。察するに氏は幼少より信仰生活に人となり其死生觀に就ては自ら俗塵を超越せるものがあつたらうと思はれる。蓋し多くの宗教は肉體的生活を認むると共に永世の靈界生活を認め生きても死んでも天地は我住み家と考へるからである。而も皇國の民として至善至高の御奉公の出来る事は是れ即ち大なる親孝行ともなる次第で氏は尊き犠牲に依り無言の大布教が出来たわけである。氏が不滅の武勳は皇國戰史を飾ると共に又氏が布教に有終の美を副へたものと謂ふべきである。

氏は即日歩兵上等兵に進級次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 田邊 晴 晴

氏は鳥取縣西伯郡大和村の人にして、大正五年九月十日生である。父は平市母はしかといふ。性温厚純情にして一面磊落潤達の人であつた。

昭和九年三月縣立日野農林學校卒業後家事に従事してゐたが元來體強健なる氏は滿十九歳の時進んで現役を志願し希望の如く合格して昭和十一年一月氏の兄優吉氏の入隊して居る同じ歩兵第六十三聯隊に入營し同年十一月に選ばれて歩兵學校教導聯隊に派遣せられ日夜精勵し十二年三月には聯隊特別射撃に於て成績優秀の故を以て表彰せられた。

支那事變勃發するや昭和十二年八月磯谷部隊中井(後福榮)部隊に屬して出征し爾來河北省夏庄燒密盆の戦闘に或は馬廠

附近の掃蕩戰に或は小劉金庄李家瑪頭の攻撃に常に第三小隊第一分隊小銃手として彈丸雨飛の間脚を没する泥土の中に勇戦奮闘し特に九月三十日の李家瑪頭の戦闘に於ける敵の逆襲に際しては沈着冷靜正確なる射撃を以て敵を撃退しその功績顯著なるものがあつた。

其の後中隊は興濟鎮、德縣附近に於て前哨となり氏は下士哨として服務してゐたが十月十五日平原城攻撃の際所屬隊が何堂の敵を夜襲するや小隊長と共に勇敢に突入之を奪取し翌拂曉の平原城攻撃に際しては奮然鐵條網を跳り越へ、敵地雷の敷設しある地區を物ともせず前進遂に北門に突撃を敢行して城門を占領し偉勳を奏したの



であつた。

十一月十日よりの黃河北岸掃蕩作戦に於ては第三小隊長松原准尉の指揮下にあつて行動し十二日午後四時三十分小隊が尖兵として獨力を以て安仁街の敵を攻撃するや第一線小銃手として最も勇敢に行動し氏の特技とする優秀正確なる射撃は敵を壓倒し以て小隊の攻撃前進を容易ならしめた。而かも薄暮を利用しての突撃に方りては率先敵陣に突入し手榴弾を投

擲して敵と格闘遂に敵陣地の一角を占領した。此際小隊長戦死するや弔合戦とばかりに勇氣百倍分隊長を輔佐して更に突撃を敢行し其の際氏は左大腿部に首貫銃創を受けしも屈せず奮闘遂に十三日午前七時敵主陣地の一角を占領し得たのであつたが此の時無念にも正面よりする敵の手榴弾の爲めに左胸部に爆創を受け壯烈なる戦死を遂げたのであつた。この安仁街の戦闘は實に氏の所屬中隊に於て小隊長以下十三名の戦死者と數十名の負傷者を出した程の激戦であつたが氏は常に率先陣頭に立ち其沈着剛膽にして勇猛果敢なる奮闘は正に本戦捷の因をなしたるもので其の武功實に拔群といふべきである。

即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

因に氏の實兄優吉氏は同じ福榮部隊分隊長として出征し兄は第四中隊弟は第一中隊にて氏の戦死せる安仁街の戦闘に於ては共に戦つたのである。斯くて氏が戦死の翌日兄優吉氏は戦場擔架に依つて後送せらるゝ弟の遺骸に會し「之が弟さんです奮戦して死なれましたどうぞあつて下さい」と擔架は靜かに地上に置かれ極めて短時間ながら其處に永久の別れが告げられたのであつた。日頃兄弟仲よく出征以來も時々戦場に顔合せ互に勵まし合つて人も羨む程の兄弟で有つた其令兄が圖らずも戦場に愛弟の遺骸に訣別の時の氣持は如何で在つたろうか。兄優吉氏が「愛する弟の靈に捧ぐ」と題して戦地より両親に送られた信書は涙なしには讀む事が出来ぬ悲壯なものであるが遺憾ながら紙面の都合上省略する。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 竹内 正和

氏は長野縣北安曇郡常盤村の人にして父を友市母をかつと云ひ其一人息子として大正五年七月十四日に生れ未だ獨身で

あつた。昭和六年三月常盤小學校高等科卒業の後池田實科中等學校に入學同九年三月同校を卒業し同十一年三月常盤青年學校研究科を修了した。資性篤實にして勤勉向上心強烈にして體格優秀頭腦明敏隨つて學校及軍隊に於ける成績は嶄然頭角を見はしてゐた。又辯舌の雄でその滔々懸河の辯は郡村青年雄辯大會に於て衆を壓倒し氏の將來は郷黨の矚目するところであつた。



昭和十二年一月現役兵として松本歩兵聯隊へ入營し同年七月一等兵に進み此間剛毅精勵學術共に優秀にして上下の愛敬を受け戰友等は語りて曰はく「御勅諭の精神にピッタリ合つた男だ」と、斯くして支那事變勃發するや遼山隊に屬し同年九月勇躍北支方面の征途に就いた。而して九月十六日南伯附近の戦闘に於ては主力機關銃隊に屬し小隊長傳令として敵弾の下困苦を排して奮勵殊に夜間各分隊との連絡に任じ克く小隊長の意圖を徹底せしめ次いで平漢線大石橋附近の戦闘に於ては九月十八日午前二時頃敵は豪雨を利用し大舉全線同時に逆襲して來たが此時氏は一番銃手として沈着而かも機敏に射撃し多大の損害を與へ遂に敵をして逆襲の企圖を挫折せしめた。續いて九月十八日より同十九日に亘る京漢線西側地區の戦闘に於ては主力機關銃或は配屬機關銃として特に困苦缺乏に堪へ或は敵を急追し或は敵情の監視警戒等に任じ超人的の努力を以て任務を達成した。

昭和十二年九月二十一日二十二日に亘る大冊河畔黃村附近の戦闘に於ては加島部隊長澤隊に屬し第二小隊第二分隊の一

番銃手として参加した。同小隊は第一中隊に協力を命ぜられ該中隊の左翼に進出して敵の掩蓋機關銃を制壓し更に數回に亘る敵の逆襲に方り之を猛射して撃退した。然るに敵は増援隊を得て掃土逆襲に轉ずると共に左前方至近の距離に掩蓋を有する敵機關銃亦俄然猛烈なる側射を加ふるに至り第一中隊は頗る苦戦に陥つた。此時機關銃分隊は更に有効適切なる射撃を行ふため分隊長以下戮力協心敵彈雨注の間を匍匐して銃を目的地に推進射撃を開始したが既に分隊長以下銃手も傷き且つ彈藥は缺乏し其上隣兵は附近にて敵と白兵戦を交へ且敵の後援部隊は漸次接近するの状況に於て氏は自ら裝填自ら銃手となり一人にて二役三役を兼ねて敵に猛射を加へ敵に絶大なる損害を與へ以て逆襲部隊を撃退し更に頑強なる掩蔽敵機關銃に對して猛射を續けて遂に之を撲滅し中隊をして危機より離脱せしめ敵陣深く突入の動機を與へた。然るに同中隊と共に前進せんとする瞬間背部より投擲せられたる手榴彈の爲左上臍部に破片創を受け慄を殘して後送の已むなきに至り保定野戰病院に於て厚き療養を受けたが遂に廿四日殉職の花と散つた。然し本戦團に於ける氏の旺盛なる攻撃精神により中隊の危急を救ひ敵の逆襲を撃退し戦捷を齎すに至つた功績は拔群にして部隊の榮譽と共に永く戦史を飾ることであらう。氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 谷 口 一 郎

氏は兵庫縣栗原郡安師村鹽野の人にして父を勳八等宇太郎母をノエと云ひ明治四十五年一月二日を以て生れ氏は未だ獨身であつた。資性義に篤く信仰の人であつた。その臨終十分前に於ける遺言として一に忠義二に孝行三に彌陀の念佛之を以て其の人となりを表はしてゐる。大正十五年三月高等小學校を卒業し續いて私立學院にて修學すること一年其後家業を

手傳つてゐた。昭和八年一月現役兵として鳥取歩兵聯隊に入營翌二月滿洲派遣を命ぜられ各地の警備或は討伐に従ひ昭和九年五月内地に歸還越えて七月歸休除隊となり滿洲事變の功により勳八等白色桐葉章を賜はつた。昭和十二年七月末應召長野部隊第十二中隊に編入せられ同八月北支方面の征途に就き九月十三日より二十五日に亘る洮縣附近の戦團に於ては第三小隊第四分隊擲彈筒彈藥手として参加し九月二十一日夜人合庄東側陣地の攻撃には敵の十字火中を勇敢に前進し遂に鐵



道線路上の敵を驅逐し翌拂曉更に攻撃を開始するや勇敢敵陣地に肉薄迅速正確なる彈藥の裝填により敵を猛射し多大の損害を與へ二十三日姚官屯驛攻撃に際しては驛附近の敵機關銃を制壓し小隊の前進を容易ならしめ更に翌二十四日未明總攻撃の令下るや決死敵の集中火を冒して奮戦敵主陣地を奪取して息つく暇もなく敵を追撃し二十五日も線路に沿ふて追撃したが途中後三里庄部落より敵の猛火を受け小隊は直に部落西方地區より之を攻撃した。然し陣地前面は泥水腰部を没し行動頗る困難で在つたが其泥水中を勇敢に集中火を冒して前進し遂に敵を撃退した。然るに敵は更に後方の前三里庄に據つて抵抗を續けるので擲彈筒分隊は之が制壓を命ぜられた。然る所巧に地物を利用して敵の所在は不明で我射撃効力の發揚不能なるを察するや氏は我二百米の前方に有利なる堆土を速かに發見し危険を冒して堆土迄進出し速に分隊を誘導したる後發見せる敵情を報告して之が射撃を容易にした。茲に於て擲彈筒の正確なる射撃は敵に多大の損害を與へ小隊主力は之がため果敢に攻撃前進し敵に肉薄するを得た。氏は更に敵陣地に指揮官らしき者を發見し之を狙撃中兩下腿骨折貫通銃

創を受けた。氏は毎戦勇敢に行動して分隊の志気を鼓舞し敵を制して攻撃を有利に導きたる功績は洵に拔群であつた。負傷後送せられた十月二十一日大阪陸軍病院にて殉職の花と散つた。

氏や慧眼克く戦機に投合して要員を看破し慧眼果斷常に友軍の志気を鼓舞し射撃技術の精到なる常に卓越せる戦果を收め定に是れ皇軍歩兵の精華を發揮せるものであつた。今や聖戦の尊き犠牲となつたが滿洲事變及今回の事變に樹てた不朽の勳功彌高く仰がれ其名は皇軍戦史と共に後世に傳へらるゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 五月女淨一

氏は栃木縣下都賀郡國分寺村の人にして父を猶三郎母をタケと云ひ大正五年一月十五日生れで未だ獨身であり性温厚篤實にして志操堅確なる模範青年であつた。昭和五年三月國分寺小學校高等科を卒業後上京酒類商荻野惣吉方の店員となり勤続六ヶ年餘至誠恪勤主家に忠勤を擲てたるの故を以て同業組合より表彰を受くる事二回に及んだ。

昭和十二年一月現役兵として宇都宮歩兵聯隊へ入營同年七月東京警備の任を帯び赤坂歩兵第一聯隊に駐屯中歩兵一等兵に進級した。

支那事變勃發するや坂西部隊成島隊へ編入せられ輕機關銃射手として勇躍征途に就いた。斯くて九月上旬には西苑の警備に任じ九月中旬より愈々京漢線に沿ひ重要戦團に参加するに至つた。即ち九月十四日には永定河々畔榆堡鎮南方地區の戦團に引續き南公由附近の追撃に参加し九月十五日には拒馬河々畔北相附近の激戦を経て同月十八日には平漢線兩側地區

の戦團に参加し毎戦勇猛果敢に奮闘し赫々たる武功を奏した。

九月二十一日及二十二日に於ける大册河々畔王谷莊附近の戦團に於ては氏は酒井大隊の第六中隊に屬し二十一日夜半主力に先んじ渡河點を確保すべき任務を受け彈雨を冒して前進し午前二時半敵陣地前の一要點を占領し之を確保した。此時第二小隊に在りし氏は分隊長の命に依り左側防重火器の制壓に任じて居たが敵の火力熾烈にして死傷續出するに至つ



た。されど氏は毫も之に屈せず勇を鼓し逐次敵陣地に肉薄中分隊長亦負傷するに至つた。氏は之にも屈せず益々志気を鼓舞し右前方に敵の重火器を發見するや獨斷之に射撃を轉向し正確機敏に該敵を制壓し以て小隊の危機を脱出せしめた。やがて第一線部隊が敵陣地に突入し氏は更に頑敵を求めて適切に輕機の猛威を發揚中惜しむべし敵彈飛來氏は胸部より背部にかけ貫通銃創を受け終に壯烈なる戦死を遂げた。所屬中隊は午前十時敵の第一線に突入し午前十一時敵の主陣地を占領し之を確保するに至つた。而して氏の奮闘は此光輝ある戦勝に貢獻する所甚大であつた。

因に氏の所屬中隊は拒馬河渡河に際し渡河掩護の任務を受け北相附近の敵陣地に突入し接戦格闘の後之を占領し爾後數回に互る敵の逆襲を撃退して任務を全うし又王谷莊附近に於ては中隊長代理以下多數の死傷者を出し遂に中隊の生存者僅かに二十餘名を算するに至りしが毫も團結を亂す事なく衆心一致能く慘烈なる苦戦に耐へ要點確保の任務を達成し全軍戦勝の一端緒を開きたるに由り所屬中隊は〇〇軍司令官より感状を授與せられた。

氏の生涯は實に至誠奉公の奮闘史であつた。而かも今次聖戦に参加して其全靈全身を捧げたる功績は皇軍の華北戦史を飾り天晴皇軍歩兵の精銳一般軍人の龜鑑たるものであつた。其芳名や千載に誦はるべく其英靈や萬世に生き尙も皇國を擁護すると共に又一家の守護神として其多幸繁榮を加護するであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 辻 田 彌 一

氏は大阪市北區東野田町の人で大正三年十二月十日生れで實父彌三郎實母トクは既に歿し養父を彌十郎養母をコヨと稱す氏は七歳にして孤兒となり伯父彌十郎に育てられ後其養子となり未だ獨身であつた。性質は所謂武士氣質で一度志を立つるや之を貫徹せずんば息まざるの氣概を持つて居つた。昭和二年三月大阪市旭區城東小學校卒業後養父を助けて菓子製造に従事し昭和十年十二月徴兵として歩兵第〇〇聯隊に入營した。

支那事變勃發するや鯉登部隊に編入せられ十二年七月勇躍北支戦線に赴き同月十九日より二十四日まで天津附近の警備の任務に服し同月二十五日より郎坊附近の戦闘に参加する事になつた。當時氏は鯉登部隊長の隸下増子中隊に屬し其第二小隊第一分隊内に在りて右第一線として戦闘に参加し部落に據る敵の掃蕩に任じ勇戦奮闘した。後所屬大隊は汽車に依り安定に敵を急追し次で反轉再び郎坊に復歸し同聯隊以東の部落に據る敵を掃蕩した。

同月二十七日大隊は團河村附近の敵を攻撃する目的を以て同日午後一時四十分行動を起し同三時三十分攻撃を開始した。當時氏は分隊長の指揮下に敵の通信所を占領すべき任務を遂行し次で小隊長の指揮下に入り中隊主力を求めて後方よ

り急進し墓地の線に據れる敵と交戦中なる中隊の位置に到着した。此時中隊長より其小隊は直ちに第一線に増加し墓地の敵を攻撃すべき命を受け彈丸雨飛の下勇敢機敏なる行動と適切有効なる猛射とに依り逐次敵に近接し次で突撃の號令一下と共に奮然敵陣に突進し銃剣を揮つて將に突入せんとする一刹那無念にも一彈飛來氏の胸部を貫通した。豪毅の氏は之れに屈せず直ちに立ち上り銃を杖に一二歩前進したが致命の深手に耐へ得ず其儘挫と倒れ茲に壯烈なる最後を遂げた。時正に午後五時四十分であつた。

尙之よりさき氏の所屬部隊は北京の咽喉たる南苑の堅陣を奪取せんとして七月二十七日黃村驛に下車したのであるが敵は之を察知して黃村の東北方團河村に集結し我を阻止せんとする情勢であつたから斷乎之を擊破すべく前進を開始したのであつた。氏が團河村附近の戦闘に加入するや附近は見渡す限り高粱の繁茂地帯百三十度の油照は烈々として人を焼き草を蒸し一滴の水だも得られぬ畑中に渴して倒るゝ者も相次いだ。敵は優勢なる大部隊掩蓋機關銃をつき並べて動かば必殺の氣構へであつた。果然我が軍の攻撃開始と共に射注ぐ敵の彈丸は宛ら驟雨の如く皇軍將兵も相次いで犠牲者を出したのである。凄慘と云はんか悲壯と云はんか思ひ出すも戦慄すべき光景であつた。それが中に心頭を滅して火も尙是れ涼しきは氏の崇高なる責任觀念であつた。泰然として更に動ぜず高粱畑をかい漕つては正確なる射撃を以て頑敵を射斃し常に率先躍進又躍進敵が徒渉不能と見て安心した敵前の河川さえ勇敢にも泳ぎ渡りて對岸に確實な地歩を占め猛射を加へて之を壓倒し以て突撃の動機を作爲するに至つたのであつた。



觀じ來れば氏の忠勇武烈は克く一隊將兵の志氣を鼓舞し敵の第一陣地攻略の直接素因を與へたものである。眞に是れ皇軍歩兵の精華又軍人の鑑鑑として青史に異彩を放つものである。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵上等兵勳八等功七級 土屋 宗 吉

氏は神奈川縣高座郡寒川村小勤の人にして父を常吉母をキヨと云ひ明治三十三年十二月十五日に生れ妻きくとの間に二男あり大正二年三月寒川尋常高等小學校尋常科を卒業其後家庭にありて農業に従事して居た。性磊落にして細事に拘泥せず。

大正十年十二月一日東京砲兵聯隊に入營し除隊後は家に歸り農業に精勵して居たが支那事變により昭和十二年九月應召照察隊に屬し上海方面に出征した。

所屬隊は九月末吳淞鐵道棧橋西南方地區に陣地を占め爾來虬江碼頭附近の防空任務に服してゐた。此時氏は測地班に屬し日夜警戒勤務に服し敵機の空襲に方つては速かに之を報告して防空の完備に努めて居た。



斯くて十二月所屬隊は無錫句容等に陣地を占領し高等司令部の防空に任じたが此間氏は第一輕機關銃班に屬し射手として熱心其職務を全うし十二月十三日南京追擊戰に於ては堀田軍曹の指揮下にあつて午後零時三十分張家岡北側高地に進出した時偶々狼山及び次山の敵は我高地に向ひ攻撃前進して來た爲め同分隊は直に之を迎撃し有効熾烈なる火力を發揚し執拗なる敵の攻撃を挫折して該地附近にあつた高射砲指揮官の掩護を全うした。續いて同日午後に至り友軍歩兵が狼山北側の敵に對し攻撃を開始するや氏の分隊は彈丸雨飛の間危険を顧みず最前線に前進し友軍攻撃に直接協力し歩兵部隊突撃に際しては側方に進出し敵を斜射側射して友軍の前進を掩護し爲に敵は潰亂に陥つたが此際に於ける氏の分隊の功績は偉大なるものであり殊に氏の當時の奮闘は目覚ましきものがあつた。然るに氏は敵の將に潰亂せんとする頃不幸胸部に貫通銃創を受け銃把を握りたる儘壯烈なる戦死を遂げた。

氏や磊落奇偉の士戰場に於ける剛勇の舉措克く其人と爲りを窺ふを得べし。かの欣然として中支の征途に就くや毎戰奮闘友軍の戦勝に資す所大なりしも不幸狼山北側の激戦に遂に敵弾に墜る洵に痛惜に堪へず。然りと雖も其の赫々拔群の功績は英名と共に永く青史の上に芳香を留むるであらう。

氏は即日砲兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍騎兵上等兵勳八等功七級 根岸 宇 之 作

氏は群馬縣邑樂郡伊奈良村の人にして父を峯一郎母をしいと云ひ大正四年五月二十日生れで未だ獨身であつた。性極めて實直にして實業補習學校の模範生徒であつた。又運動競技にも趣味を有し青年團員中の優秀選手でもあつた。昭和四年三月伊奈良尋常小學校卒業後伊奈良實業補習學校へ入學し昭和十年十一月同校卒業昭和十一年一月宇都宮騎兵聯隊へ入營

し日夜軍務に精勵中支那事變に會し安田部隊に編入せられ北支戰線に出動するに至つた。

斯くて昭和十二年九月十六日平漢線松林店驛附近の戰闘に於ては第二中隊長加藤少尉の指揮に屬し輕機關銃手として參加した。當日所屬隊は松林店驛爆破の任務を受け前進したものであるが氏は作業時鐵道線路西側に位置し南方の警戒に任じ以て破壊班の作業を容易にし驛舎襲撃に際しては率先驛構内に進入しホーム中央附近に銃を据え北方よりする敵の逆襲



に備へ以て第三小隊の通信所破壊を容易ならしめ且第一中隊方面より遁走し來れる敵を猛射殲滅し以て所屬隊の任務を完全に遂行せしめた。九月二十日大冊河々畔東西劉附近の戰闘に於ては氏は保定南方地區に向ひ急追中なる所屬部隊の歩兵に配屬せられ輕機關銃彈藥手として參加した。午前十一時三十五分所屬部隊は東西劉北側地區を南下中なる敵を發見し之を奇襲するに決し當日尖兵中隊たりし氏の所屬中隊をして攻撃せしむる事になつた。此際氏は彈藥手として勇敢沈着に射手並に分隊長を輔佐し適切なる彈藥補充に依り克く輕機的全威力を發揚せしめ敵に多大なる損害を與へ之を潰走せしめ

た。

昭和十二年九月二十一日大冊河々畔小曲城附近の戰闘に於ては氏は第四小隊長増田少尉の指揮下に輕機關銃射手として參加した。當日第四小隊は左第一線小隊として攻撃を開始するや氏の輕機は小隊中央に位置し敵に對し常に有効なる猛火力を以て多大なる損害を與へ躍進に方りては率先先頭に立ち機敏なる前進をなし又主力方面を側防しありし敵機關銃を發

見するや正確なる猛射を以て之を沈黙せしめ著しく主力の攻撃を容易ならしめた。午前十一時三十五分敵前百五十米に達せる時惜むべし氏は頭部に貫通銃創を受け茲に壯烈なる戦死を遂げた。然れども氏の勇敢且有効なる射撃に依り間もなく小曲城南端の敵陣地を奪取し敵を南方及東方に壓迫して該陣地の占領を確實ならしむるに至つた。當時の所屬中隊長よりの來信に依れば當面の敵は其兵力我に五六倍の數に上り堅固なる陣地に據り我寡兵を輕侮しつゝ重輕機關銃の筒先を捕へて頑強に抵抗したのであるが忠勇武烈の良射手を此一戦に失ひ悲憤の涙に暮れありと痛惜して居る。實にや氏は參戰以來克く困苦缺乏を堪え忍び彈丸雨飛の間に從容自若として有効適切なる射撃を以て敵を壓倒震駭し以て所屬隊をして赫々たる武動を奏せしめて來たのであつた。寔に是れ皇軍戰勝の尊き礎石となつたもので皇國の軍民たる者は烈々たる其忠魂に對し滿腔の感謝を捧げねばならぬ。噫、氏の功績や北支戰線の皇軍史に牢記せらるべく其の芳名は千載に語り傳へられ其の英靈は永久に生き皇國を守護し又遺族の將來を加護するであらう。

氏は即日騎兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 中山 武

氏は栃木縣河内郡羽黒村大字中里の人にして父は章庫亡母はキヨと稱し大正四年十月八日生れである。入營迄は父と繼母ハルとの三人暮しであつた。昭和五年三月羽黒尋常高等小學校卒業後父母の膝下にあつて只管孝養を盡し能く自家農業に對しても勤勉であつた。

昭和十一年一月歩兵第五十九聯隊に入營爾來格勳精勵同年十二月歩兵一等兵に進級した。十二年八月勳員下令直に野戰

第五中隊に編入せられて勇躍壯途に就いた早くも初秋には北支の一角上陸し既に心境は戰場を馳騁して居つた。爾來十月中旬に至る間曹毅の師は日夜進められ轉戦幾度か數知れず就中氏の進撃した戦跡には永定河畔の戦拒馬河の渡河戦或は平漢線西側地區の激戦大册河の渡河掩護將た又元氏附近渚龍河畔の陣地戦等實に枚擧に遑がない。左に其二三を録して氏が奮戦勇武の跡を偲ばん。



先づ九月十五日拒馬河畔北相附近の戦闘である。氏は當時第一小隊第二分隊に所屬して對岸に堅壘を築ける敵前の強行渡河を右第一線中隊の最右翼に立つて實行したのであつた。抑も敵前渡河は決死的行動であつて小隊は第二渡河點より舟筏に依つて彈丸雨飛の下を進發し辛ふして對岸の一角に地歩を占めた。時恰も分隊長は敵陣に墮れ剩さへ幾度か敵の反撃を受けた。此間氏は自ら分隊長代理の指揮をなし勇戦奮闘遂に頭敵を驅逐して該地を確保することを得た。次で中隊は主力を以て引續き渡河を敢行したが馬家屯東側主陣地に據る優勢なる敵と相對峙して極めて危險の状態にあつた。此時氏は分隊を提げて中隊主力に加はり沈着剛膽克く敵の逆襲を擊退して遂に中隊主力を危地から脱せしめた。之に依つて渡河攻撃の成功を導びくことが出来たので氏の武勳は實に偉大なものであつた。續で十八日南北義安附近の戦闘には尖兵たる第一小隊に屬して前進し次で大隊の戦闘展開に當つては之が掩護中隊の最前線に在つて沈着機敏に行動し遂に大隊展開掩護に大なる貢獻をした。越で二十一日大册河畔の戦には第一線渡河部隊の攻撃掩護の任を有する中隊に在つて勇敢熱誠に行

動し克く分隊長の指揮に従つて其任務を完うした。

斯くて氏の屬する中隊は連日連夜戦を續け河を渡り敵を屠り堅壘を抜き征衣の塵を拂ふ暇もなく越で十月十一日より十五日に至る間氏の崇高なる犠牲を拂つた元氏附近渚龍河の陣地戦に加つたのである。此地附近の敵は堅固に數段の壘壘を構築し頑強に抵抗したのであつた。而して十一日には牛家樓附近の敵に對し第一線中隊の右第一線小隊第二分隊に屬し、能く分隊長の命に従ひ猛火を冒して勇戦奮闘遂に該村落を奪取した。翌十二日には北白雲附近の數條に築設した堅固な陣地に對する黎明攻撃であつた。中隊は夜を徹して敵陣に近迫し東天曉を告ぐる頃至近の距離より敵陣に突入するのであつた。氏は依然第二分隊に屬して勇敢に奮戦した。此間敵は我右翼に向つて猛烈と逆襲して來たが剛勇沈着な氏は正確なる射撃に依つて敵を殲す事幾人かを知らず遂に之を擊退して我翼の危險を除いた。斯くて進撃を重ねつゝ擲彈筒の集中火剣攻撃の聲と共に氏は白兵を振て敵の第一陣地に突入した萬雷轟く萬歳の聲と共に又も第二陣に飛び込み之を抜き既に第三壘に一意進撃した。凡そ壘を重ね壕を連ねた陣地の攻撃には塹壕も趣え鐵條網も破つて敵を殲滅せねばならぬが最後の雌雄を決するものは歩兵の肉弾である矢折れ彈盡きても塹壕の一角に肉弾を留むる者には勝利の榮冠が授けられる。氏は將に第三壘に突進肉弾相闘たんとする瞬間不幸にして敵彈の爲め地に伏して再び起つことを得ず靈魂長へに天ののぼつた。

噫勇猛にして沈着剛膽なる武人は今や呼べども再び歸らずさりながら氏が貽せし數々の勳は皇國の礎として永久に輝くであらう。

功に依り即日歩兵上等兵に進級次で勳八等白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を授け賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 長田 勇雄

氏は長野縣西筑摩郡檜川村の人にして父を勇次亡母をあきと云ひ大正五年五月二十日生れで未だ獨身であつた。昭和三年三月東京市杉並區第一尋常小學校を卒業後府立第四中學校夜學部へ入校したが昭和五年六月家庭の都合に依り中途退學し自轉車業に従事して居た。性温厚篤實にして孝心深く兄弟朋友其他一般知己に對しても極めて情義に厚かつた。

昭和十二年一月松本歩兵聯隊に入營し日夜軍務に精勵し七月歩兵一等兵に進級した。支那事變起るや遠山部隊久保中隊に編入せられ勇躍征途に就いた。斯くて九月十七日十八日の大石橋派集附近の戰鬪に於ては小隊長宮下准尉の指揮に屬し當初豫備隊となり大石橋の警戒に任じたが十八日には左第一線小隊に屬し率先奮闘し派集を占領した。



九月下旬大冊河々畔黃村附近の戰鬪に於ては右第一線小隊第四分隊の連絡兵として黃村北側の陣地攻撃に参加した。二十二日午前零時十分中隊の攻撃前進を起すや氏は冷靜沈着克敵彈下に小隊長と分隊長間の連絡を確保し又中隊が敵の第一線陣地に突入決行に先ち氏の所屬小隊は右翼に増加展開するに至つたが氏は敵彈雨飛の下に連絡勤務に任じよく分隊をして小隊長の意圖の如く行動せしむるを得た。此夜月明にして敵陣地に接近するに従ひ敵彈益々猛烈となつたが氏は益々勇猛果敢に行動し第一線陣地を突破し更に第二線陣地をも奪取した。

た。然るに第二線陣地前約二十米に接近せる時不幸敵彈飛來其一彈は頭部を貫通し次で一彈は左下腹部に貫銃創を與へ氏は其場に打倒れ早や是れ迄とや思ひけん 天皇陛下萬歳を唱へ從容として絶命した。所屬中隊は二十二日午前六時遂に黃村を占領し之を確保するに至つた。

あゝ氏は八月十四日豊臺より攻撃前進を起してより約旬日に亘り不眠不休泥濘の難路を踏破し粟又は甘藷を畑に求め僅に飢を癒しつゝ猛進撃を行ふこと正に五十餘里ながらも敵彈雨飛の中に毅然として任務に邁進し各地の戰鬪に偉勳を奏し衆兵の志氣を振作し中隊戰勝に寄與する所甚だ大であつた。今や聖戰の半にして尊き犠牲となつたが其功績は皇軍の華北戰史を飾り其芳名は天晴千載の下大和櫻と咲き匂ふべく其英靈は萬古に生き皇國を擁護し又一家の守護神として其多幸繁榮を加護するであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 中村 喜一郎

氏は青森縣三戸郡戸來村大字中里家ノ下の人にして父を若松母をカン妻をかんと云ひ大正四年一月二十八日を以て生れ性温厚醇朴正直にして品行方正責任觀念強く且注意周到であつた。昭和四年三月小學校卒業後補習學校に入り十一年三月研究科を卒業し更に青年訓練所第四次を卒業した。非常な勤勉家で農事に精勵すると共に青年訓練所在所中も一日の缺席なく數回表彰せられて居る。昭和十一年一月現役兵として青森歩兵聯隊に入隊後支那駐屯軍歩兵隊に編入せられて同年六月以來北支那豐臺附近に於て勤務して居た。昭和十二年七月七日夜氏の屬する部隊の一部が蘆溝橋北方地區で夜間演習中

蘆溝橋附近の支那兵から突如數十發の射撃を受けたので豊臺駐屯の部隊長は該支那部隊に對し其の不法射撃に關して交渉中蘆溝橋北方千米の龍王廟附近にあつた支那兵から更に迫撃砲及小銃の射撃を受くるに至つたので我が部隊は已むを得ず該方面の支那部隊を制壓して嚴重抗議する事になつた。翌八日朝氏の屬する第七中隊は遂に永定河左岸の敵陣地奪取の命を受けた。氏は第一小隊第二分隊の一員として鐵橋北側堤防上の敵を攻撃し突撃に際しては最も勇敢に敵中に突入し遂に



該陣地の敵を潰走せしめた。引き続き中隊は永定河右岸に向つて追撃に移つたが氏は分隊長小島上等兵から敵左翼に迂回を命ぜられ同僚大澤一等兵小川二等兵等と協力して巧みに地形地物を利用して敵の左翼に迫り一舉に之れに突入して奮戦格闘中敵輕機銃の猛射により惜しくも腋窩貫通銃創を受け瀕死の重傷を負ふた。然かし氏は之れに屈することなく分隊長に敵情を報告せしめた後遂に壯烈なる戦死を遂げた。

噫、氏の機宜に適したる敵の左翼迂回の行動により第一小隊は當面の敵を撃破するに至便を得たる次第にして一死此壯舉を敢行せし

は所謂軍人精神の發露にして其の中隊戦闘に貢献したるの功績亦拔群と謂ふを得べし。氏や曩に支那駐屯部隊に編入せられ其の内地を出發するに當り「假令如何なる場合に遭遇せんも死を懼るゝが如き觀念更に無し」とて萬一の場合に處する決心準備風に完整せる實情を稟述し今又重傷を負ひ將に瞑目せんとするに際し「最後まで戦ふことの出来なかつたのは實に残念である。後を確つかり頼むぞ」とのみにて一言も私事に觸るゝなし。正に是れ

皇國軍人の勳靈であり其英名は赫々たる武勳と共に皇軍戦史を飾り永へに芳を放つであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 中島 留 造

氏は兵庫縣城崎郡中筋村加陽の人にして父を鹿藏母をちよと云ひ大正五年五月一日生れで未だ弱身であつた。昭和四年

三月中筋尋常高等小學校を卒業した。當時母は既に歿し父は病弱の身であつたが氏は克く父を扶け兄弟相協力して農事に勤みつゝ孝養を怠らなかつた。性質頗る實直勤勉にして言葉少い方であつた。昭和十二年一月十日現役兵として歩兵聯隊に入營し熱心軍務に精勵し休日歸郷を許さるゝや父の膝下に之を慰め僅かの時間と雖弟を助け農業の手助けをして歸營するを常とした。

昭和十二年支那事變勃發するや八月北支方面の征途に上り上陸直に息つく暇もなく連日の豪雨に泥濘膝を没する惡路を行軍し九月十日よりの馬廠攻撃には輕機銃第二彈藥手として連日敵の猛火を目し勇戦奮闘遂に之を攻略し續いて敵を急追し二十二日には人合庄に據れる敵を撃攘して其夕滄州に迫つた。然るに其夜敵は大舉して夜襲し來り茲に激烈なる手榴彈戰白兵戰は展開せられた。當時氏は第一線に勇敢に奮戦し遂に我軍は寡兵克く



數倍の敵を撃退した。翌朝其戰場には約三百の敵死體遺棄せられ慘憺たる光景を呈して居た。而して氏の所屬隊は早曉敵を追撃し滄州北方東花園の敵陣に迫つた。此の敵陣地は蘇聯邦將校の設計に長年月を費し構築されたと噂されし堅固なる陣地にして晝間の攻撃容易ならざるを察知した氏の所屬部隊長は一擧夜襲に依り攻略するに決し先づ敵陣地前約千米突獨立家屋附近を占領して敵情を偵察し爾後の攻撃を準備し二十三日午後六時より敵火の下肅々として攻撃前進し氏の所屬隊は敵陣地前五十米突水濠の線に達した。當時敵の銃砲火は猛烈を極めたが一同勇躍水深首に達する水濠を涉り直に對岸に陣地を構築し深更に至り彼我の銃聲漸く静まり全身濡れ鼠の様な隊長以下氏等一同は寒さに襲はれつゝも夜を徹し無言の裡に必勝を誓つたのであつた。斯くして二十四日拂曉突撃の命令一下一齊に敵陣に突入した。氏は此時分隊長と共に勇猛果敢に前進し遂に敵前十米突に肉薄するや不幸敵手榴彈の爲肩胛部及び兩上腿に爆創を受け怨を吞て我が突撃の喊聲を聞きつゝ其場に倒れ後衛生兵に收容せられ後送の途中幽かに敵陣攻略の萬歳の聲を耳にしつゝ瞑目したのであつた。

噫、氏北支戦線に立て僅かに月餘遂に華北の花と散る洵に痛惜に堪へず然も氏が此の月餘の間に奏したる武勳は頗る偉大にして滄州攻略の礎石であり赫々として青史に薫り其忠魂は不滅に生き護國の神として皇運を扶翼し奉り遺族に祐を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 中 村 功

氏は千葉縣印旛郡富里村十倉の人にして父を源七亡母をなつと言ひ大正五年三月十日生れで未だ獨身であつた。性温順

誠實で父母に對し孝心深く弟妹を愛する心切なるものがあつた。昭和五年三月富里小學校の高等科を卒業し千葉縣大久保町に於て木工見習として軍隊用木工具製作に従事したが昭和十一年十月まで勤続し此間主人に仕へて誠實勤勉爲に主人よりは我が子の如く愛せられ同輩や町内の人々からも信頼が厚かつた。昭和十二年三月現役兵として支那駐屯山崎部隊に入隊して北支の警備に服して居たが同年七月支那事變の勃發に直に出動し一文字山及高庄附近の最前線にあつて警備に當つた。



當時蘆溝橋橋門口附近の支那軍は我が軍との約を破つて不法にも晝夜の別なく我れに向て銃砲火を送つて來た斯かる情況下に氏は第一線に在つて警備の任を完ふし屢々斥候兵として敵情搜索に任じ所屬中隊の警備任務の遂行に多大の貢獻を爲した。其の後七月二十八日朝氏の所屬部隊が愈々南苑の敵を攻撃するに當つて氏は輕機銃銃手として南苑西北角の敵に對して猛攻を加へ逐次敵前近く前進した。然るに俄然左前方に敵の側防輕機銃が現出して猛射を始めた。め氏の所屬中隊は前進頗る困難となつた。同時に正面の敵も亦猛烈に機銃を發射して來たが其位置は不明であつた。然るに氏は忽ち敵の掩蓋機銃二を發見して分隊長に報告し其の結果中隊は此の掩蓋機銃に火力を集中し遂に之を撲滅し爲に中隊の志氣頓に擧り猛烈に攻撃前進して敵に肉薄した。氏は分隊長と共に敵の猛射を物ともせず敵前近く迫り其輕機銃威力を最大に發揮して居たが其奮戦中午前九時二十分頃不幸敵の一彈は氏の腰部を貫通し氏は機銃を握りたる儘壯烈なる戦死を遂げた。

氏や彈丸雨飛の裡も怯まず率先分隊長と共に邁進敵に近迫し其巧みに偽装を施し我前進を阻止せる有力なる掩蓋重機
關銃を速かに發見報告し且つ隣接分隊の前進に危害を及ぼす敵の自動火器をも制壓して爾後の前進を容易ならしむ、思慮
周密而も豪膽機敏の士に非ずんば何ぞ斯の如きを得ん。

噫、氏之が爲めに壯烈北支の華と散る哀悼極りなし。然れども其中隊全般の戦闘指揮に貢献する所大なりしは全く氏等
挺身奮闘の賜にして其の功績拔群と謂ふべく永く赫々として青史に輝くであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 中村 兼 藏

氏は横濱市磯子區原町の人にして父を辰五郎母をトクと云ひ大正五年六月八日を以て生れ昭和三年三月横濱市根岸小學
校を卒業し性質温厚で孝心深く小學校在學中も放課後は父の指導下に家業の製靴を助け又卒業後は父を助けて家業に勉勵
し十九歳の時同市近江屋靴店へ職人として勤務したが自分は僅少の小遣にて満足し其大部分は父に送金し主人の信用も厚
かつた。

昭和十二年三月天津駐屯歩兵聯隊に入營し七月七日事變勃發と共に出動し蘆溝橋附近の攻撃には乃美中隊第一小隊に屬
し城壁攀登材料の運搬續いて同城北方永定河左岸堤防上の敵陣地攻撃には第一線分隊にあつて勇猛果敢に敵を攻撃し其後
戰場に方りて腰を没する永定河を勇躍渡河し勇戦奮闘敵に多大の損害を與へた。

此の時氏は一等兵に進級し十日龍王廟附近の戦闘には第一線中隊の擲彈筒分隊彈藥手として勇敢に攻撃を續け遂に午後

九時十分敵陣地に突入するや石倉分隊長が支那兵二三名と格闘中なるを見、分隊長を救助せんと敵の背後より突進し其一
名を刺殺した。他の敵は之に怯みて遁走するを追及し一名を射殺し

たが氏も亦此時左前膊に手榴彈爆創を受け更に後方より來りし敵の
爲背部に刺創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。

氏や勇猛果敢其の最期に於ける龍王廟敵陣突入時の奮闘の如き戦
場武人の典型的表示として千載の下傳唱するに足る。不幸終に敵彈
の爲めに落花の最期を遂ぐ痛惜何ぞ堪えん。

然りと雖も氏が獅子奮迅の行動は遂に大隊の龍王廟占領確保に與
つて力ありしものにして其功績拔群なり。今や再び氏の勇姿に接す
る能はずと雖も氏の英名は赫々たる武勳と共に永く竹帛に垂れ其の



英靈は安らげく護國の神座に鎮まり皇國と遺族の將來に慶福を垂るゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 中村 一 松

氏は兵庫縣美方郡八田村前の人にして父を幸之助母をい妻をしずあ一子を勝美と稱し明治四十年八月二十日の生れ、
大正十一年三月奥八田村尋常高等小學校を卒業し爾來家業に従事して居つた。性質温順にして能く父母に仕へて孝養怠り

なく又弟妹を慕みつゝ家業を嗣みて一家の柱石として家中を治めて居つた。又僚友間の親しみは親密にして常に敬慕を受けて居た。

昭和三年一月現役兵として歩兵第四十聯隊に入營七月一等兵に進み四年十一月満期退營し其際善行證書を附與せられた。



昭和十二年七月支那事變勃發するや應召長野部隊第六中隊に編入せられ八月征途に上り間もなく北支の一角に上陸し此處に馬廠附近攻撃の準備を整へ九月七日より愈々同地附近の攻撃開始せらるゝや第三小隊第三分隊に屬して能く上官の命を奉じ常に忠勤を擧げた。

斯くて九月二十一日よりの滄縣附近の攻撃に於ては同日午後六時より熾烈なる敵火を冒して敵の頼みとせし水壕や鐵條網を涉り踏み超え前進した。此敵陣は村落の前に陣地を構築して之を繞らすに水壕や鐵條網を繞らし爲に我軍の攻撃前進は容易ではない。殊に水壕は所謂クリークで幅狭けれど水深く而かも水底泥土で涉るに難く超

ゆるに六ヶ敷い難物である。然し氏は克く分隊長の指揮命令の下に自ら最前線にあつて銃剣を振り身を挺して突進に突進を續けて遂に第一線を奪取した。

此勢に乗じて中隊は一舉に敵第一線直後の村落に突進したのであつたが然かし敵も頑強に抵抗を續けて容易に部落を攻略する事が出来なかつた。抑も支那の部落は土壁を廻らし家屋は土石で敵が之に銃眼を穿つて據る時は之を攻め落す事は

戦友より書信

(前文省略)想ひは深き滄縣攻撃の前日で御座います。第一線の任務を受けますや隊長より此度の戦闘には必ず死を覚悟した。氏は此時最前にあつて勇猛奮進しつゝあつたが此時敵の一弾は惜しくも氏の左胸部を貫通して遂に壯烈な最後を遂げたのであつた。其の當時の奮闘振りについては戦友中村義雄君より遺族に寄せられた書信によく認められてある。

誠に困難である。然し一舉に之を屠らねば戦闘は益々膠着するばかりであるから中隊は損害をも顧みることなく突撃を續けた。氏は此時最前にあつて勇猛奮進しつゝあつたが此時敵の一弾は惜しくも氏の左胸部を貫通して遂に壯烈な最後を遂げたのであつた。其の當時の奮闘振りについては戦友中村義雄君より遺族に寄せられた書信によく認められてある。

戦友より書信

(前文省略)想ひは深き滄縣攻撃の前日で御座います。第一線の任務を受けますや隊長より此度の戦闘には必ず死を覚悟し隊長と共に戦はんだとの言葉に一同決心を致したので御座います。去る馬廠の攻撃には旅團豫備となつて第一線に立たれなかつた事を残念がつて居りましたが九月二十一日愈々最前線部隊となり盡忠報國の機到れる事を喜び勇躍第一線に立つたので御座います。勿論晝間は友軍砲兵の猛烈なる射撃に依りて制壓を致しましたが午後五時頃愈々攻撃開始の命令出で我が隊が最前線となりまして前進致したので御座います。處が午後七時頃我が部隊の突撃喊聲に最早敵も死者狂ひとなつて抵抗致したので御座います。而して間もなく浮足立つて退却しかけたので率先敵陣に突入致しましたが敵の彈丸雨霰の如くにて不幸にも中村君は負傷されたので御座います思はず馳せ寄た時には最早虫の息で「残念だ憎い支那兵の仇を討つてくれ 天皇陛下萬歳」と唯最後の御言葉戦場の常とは中ながら餘りにも悲痛で御座いました。

壯烈鬼神を泣す最後武人の模範と仰ぎ未だに最後の御言葉が耳に映じて参ります(中略)思ひ出せば入隊以來同じ分隊であり神戸にも私と二人同宿致し分隊でも一番年長者でありましたので何事を致しますにも皆相談役となつて下さり又追撃中にも煙草の補充がつかない場合一本の煙草も分け合つて吞みました。攻撃出發の前夜にも死んだら骨を頼むぞと言ひ交しつゝ然かし死ぬ計りがお國の爲でないからお互に氣をつけてやらうと言ひ交しましたが最後の言葉でした(中略)目下戦友の仇を討つべく追撃中です(以下省略)

尙氏が決心の程は出征の爲内地を離るゝ折其妻女に送られたる書信に
 (前略)我が土地を離れて上陸すれば敵地だどうせ命はないものと思つて居る。親達の世話はよろしく頼む。
 お前も出征軍人の妻として男々しく世の人から後指をさゝれぬ様決して女々しき行動をとらぬ様お前が家の第一線に立
 つて成るべく他人の厄介にならぬ様勝美を成人させて帝國の軍人になして下さい夫れが私の最後の頼みだ。親達もよく
 お前の現在の立場を考へて居て呉れる夫れだから甘へた言動は氣をつけ又世の人達の慰め言葉にもあまへぬ様立派に私
 (軍人)の妻として耻ぢぬ様氣をつけて呉れ云々。
 噫氏の奮戦振り壯烈なる戦死の狀將又出征に際して妻女への戒め正に皇國軍人としての範であり鏡である。
 功に依り戦死の日歩兵上等兵に進められ後勳八等白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を授け賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 中村 權 太

氏は青森縣三戸郡下長苗村の人にして父を馬之助母をヨシと云ひ大正三年二月十日生れで未だ獨身であつた。資性温厚
 なる裡に毅然たる信念を持つて居た。父母に仕へて克く孝寡言實踐の美風を有し徒らに理智に趨るを好まなかつた。親し
 き友達と集會の折々には時に漫談演説の諸語を交へて失笑せしめ酒宴に方りては自己は飲酒せざるも泥酔者を勞はり其自
 宅迄送り届けるなど豊かなる親切心を持つて居つた。小學校卒業後は農業に精勵し馬車を曳かしても専門家に劣らずと賞
 讃された。以上は氏の性行の一端であるが郷黨の風評信用共に良好であつた。氏は昭和四年三月下苗代小學校の高等科を
 卒業し昭和十一年一月歩兵第五聯隊に入營同年五月支那駐屯歩兵隊に編入替となり日夜警備の重任に精勵して居た。

北支事變勃發するや第一次廣瀨橋附近の戦闘に於て通信班に編入せられ其豫備班として此戦闘に参加した。通信豫備班
 が一文字山に位置せる時出動部隊の指揮官森田中佐と第三大隊長との間に電話連絡の任務を命ぜられた。氏は保線及線補
 充の任務を兼ね小被覆線三巻を携行し敵彈雨飛の中を大膽不敵に行動し以て迅速に任務を完了し更に第三大隊が永定河右
 岸に敵を追撃せんとするや有線班も之に伴ひ追及を急いだ。然るに支那兵營より猛烈なる側射を受け忽ち前進困難となつ



た。時正に戦闘酣にして緊要なる命令通報愈々頻繁を要したが他に
 連絡の手段がなかつた。茲に於て有線班長田中軍曹は決然永定河を
 渡涉延線に決し通信豫備班に延線を命じた。氏は率先被覆線を携行
 せるまゝ深さ一米餘の濁流に身を躍らし勇躍渡河を敢行した。此時
 氏の身邊には急霰の如く敵彈が集中して居た。併し氏は毫も之を意
 に介せざるものゝ如く前進又前進に中島に到着せんとする一刹那憎
 むべき敵の一彈が氏の左腹部に貫銃創を與へ瀕死の状態を以て一
 時河中に倒れた。氏は渾身の勇を盡し一意任務に邁進せんとして起
 き上つたが流血淋漓再び倒れんとするを班長田中軍曹に助けられつ
 ゝ中島に到着したが遂に力盡き一時昏倒した。田中軍曹は假纒帯を施し激勵すれば氏は再び意識を回復して尙も前進せん
 とするを軍曹之を制し後送の處置を採つた。時維れ昭和十二年七月八日の激戦である。斯くして氏の勇敢なる行動に依り
 第三大隊との連絡を確保し爾後の戦闘成果に貢献せる所極めて大であつた。氏は翌九日北平分院に後送せられ手厚き治療
 を受けたが天なる哉七月十一日午前一時十分遂に殉職の華と散つた。

噫氏が責任觀念の旺盛なる斃れても尙息まざる氏の偉大なる魂魄は眞に軍人精神の精華であつた。而して氏が架設延線せる一本の電話線は戦局の進展に重大なる影響を與へたのである。上官戦友の限りなき痛惜は申す迄もなく皇國軍民は語り傳へて氏の崇高なる犠牲的精神を讃へるであらう。而して末長く皇軍の勳鑑として敬仰せらるゝであらうそこに氏の靈魂は永世不滅の神徳を授けらるゝものと信ずる。

即日歩兵上等兵に進級勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 中 根 逞 介

氏は大正四年十月十七日東京市向島區吾嬭町東三ノ四六に生れて、父を松三郎母をまさと謂ひ未だ獨身であつた。昭和三年吾嬭第一小學校卒業昭和五年三月小松川高等小學校卒業同年四月以來本所區太平町精工舎に勤めて居た。性剛膽にして快活父母に仕へて至孝幼少より文學を好み勤務の餘暇獨學にて刻苦勉強し又スポーツに興味を持ち殊にマラソン選手として各所の賞を得て居つた。

昭和十一年一月徴兵として麻布歩兵聯隊へ入營し同年五月滿洲駐屯部隊の要員として渡滿を命ぜられ齊々哈爾に駐屯し同地方の警備に任じ日夜軍務に精勵し其成績優良であつた。偶々北支の風雲急を告ぐるや氏の所屬部隊は急遽天津地方に南下し氏も亦機關銃隊二番銃手として聖戦に参加する事となつた。即ち昭和十二年七月三十日以降八月十七日迄は天津の警備及敵情搜索に任じ又承德多倫を経て苦熱に堪え艱難を克服して張北に移動した。其間八月二日より同六日に亘る間は武清附近に蠢動する敵軍を掃蕩し次で同月七日より九日に亘る間は保安隊の武裝解除に従事し熱誠奮闘克く重任を遂行した。

た。

八月十七日より同月二十日に亘る間は愈々氏の最後戰場たりし外長城線の戦闘であつた。所屬隊は二十日午後一時察哈爾南省張北の南方外長城線の敵に對し攻撃を開始し午後七時先づ長城の一角を占領し次で午後九時長城南側のトーチカ陣地を奪取したのであつた。氏は石倉中尉隷下の二番銃手として某歩兵大隊の右第一線たる第五中隊に臨時配屬となり長城



は敗退する敵に大なる打撃を與へ且長城南側のトーチカ陣地の敵を制壓し以て(へ)火點の占領を確實ならしめた。氏の所屬小隊は(へ)火點を奪取するや第五中隊の第三小隊と共に長城南側のトーチカ陣地を攻略の爲勇猛果敢なる攻撃を續行し遂に同陣地に據る頭敵と長城線より敗退せる敵とを撃破し午後九時頃當該トーチカ陣地を完全に占領した。然るに夕刻より降り出した雨は愈々本降りとなり四周の空は密雲低く垂れ地區地物の認識さへ困難となつた。突如敵の敷設する集團

地雷は一大爆音と共に追撃中の友軍の一部を吹き飛ばした。不幸にして氏も全身に爆傷を負ひ遂に壯烈なる戦死を遂げたのである。

噫氏や神速機敏恰も北天の流星の如き作戦部隊に隸屬して事變當初の急雲に備へ忽ち踵を還へして外長城線に忽然として現出し勇猛果敢克く近代兵器の全威力を發揚して頑敵を屠り赫々たる武勳を奏し遂に不慮の奇禍に玉碎したるは痛惜に堪えないが彼等敵陣は數千年來難攻不落を誇つた外長城線であつたのだ。靜に思を廻らせば友軍の大兵團は南口八達嶺の天險に阻まれて戦局更に進展せず敵の將帥は少くも一年や二年は皇軍を喰ひ止め得ると確信して居つたのである。然るに神速なる外長城線の突破に依り敵軍は驚愕色を失ひ倉皇として西方及西南方に潰走したのである。即ち氏の爆死は偉大且崇高なる大犠牲として軍民共に感謝追悼すべきである。今や氏は護國の神と祀られ又皇軍の精華として仰がれ外長城戦史に不滅の名を残したるは洵に謂ありと云ふべきである。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 中里 孝明

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 中里 廉

孝明、廉の兩氏は兄弟にして共に栃木縣河内郡絹島村字下小倉の人にして父は既に死歿し家庭には母ヤシ江あり兩氏共未だ獨身であつた。



兄孝明氏は明治四十三年九月五日を以て生れ大正十四年絹島尋常高等小學校を卒業し昭和四年現役兵として宇都宮歩兵聯隊に入營し翌五年滿期除隊したが昭和十二年八月支那事變の爲應召坂西部隊に編入せられ北支方面の征途に就いた。當時北支は打撃ける豪雨に甚だしく出水し到る所湖沼の如く道路は泥濘膝を没し軍隊行動の困難は名狀すべからざるものがあつた。然かし氏は克く其困苦と缺乏を征服し早くも九月十八十九日に亘る京漢線西側地區の戦闘に参加した。而して休む暇もなく續いて二十一日より大冊河々畔王谷莊堡附近敵陣地攻撃に加はつた。此時氏の屬する酒井部隊成島隊は先づ大冊河の渡河點を占點すべき任務を受け酒井部隊主力に先んじ二十一日夜前進を起した所忽ち大冊河右岸の敵より猛射を受けた。成島中隊は躊躇することなく直に之を夜襲し遂に二十二日午前二時敵陣地を奪取したが其後方陣地に據れる優勢なる敵は我が占領陣地に猛火を集中して來た。中隊は孤軍よく陣地を死守したが夜間の事とて前方敵陣地の状況全く不明の爲小隊長は勇敢なる氏に命ずるに敵陣地の偵察を以てした。此時迄奮戦に奮戦を續けたる氏は危険も勞苦も考へず此の時とばかり勇躍單獨にて敵の亂射する中を潜行し遂に敵陣地前十米附近に近づき仔細に敵陣地前の状況を視察し且重機關銃の位置を偵知し直に歸來して親しく小隊長に報告した。實に之れ拔群の功績である。而して任務を完了したる氏は再び所屬分隊に歸つたが當時敵の射撃は愈々熾烈を極め戦死傷續出する慘狀を呈した。然かし氏は毫も怯む事なく愈々勇を鼓し奮戦を續け全員亦克く奮闘し茲に戦機熟したりと認めたま成島隊長は奮然突撃を命じ將に突撃に移らんとする其の瞬間不幸

氏は敵弾のため右胸部より左背部に貫通銃創を受け其場に壯烈なる戦死を遂げた。
 弟康氏は大正五年六月二十三日生れで昭和六年三月兄孝明氏と同じ絹島尋常高等小學校を卒業し昭和十一年一月宇都宮歩兵聯隊に入營したが十二年七月支那事變勃發し坂西部隊に編入せられ共に勇躍北支方面の征途に上り兄孝明氏と中隊こそ異れ同じ坂西部隊内で戦つたのである。



九月十八十九日に互る京漢線西側地區の戦闘に於ては氏の所屬中隊は最初部隊本部と共に豫備隊として劉家黄務に位置して居た。而して我第一線の攻撃は著しく進捗した頃突如敵約百名ばかり我が右翼迫撃砲陣地に向つて逆襲して來た爲第一小隊長は部下二分隊を率ひ此敵を撃退する事を命ぜられた氏は此分隊に屬して急行して逆襲し來る敵を猛撃遂に之を撃退し迫撃砲隊をして支障なく砲撃を續行せしむる事が出來た。次いで兄の戦死した九月二十一二十二日の大册河々呼王谷莊堡附近攻撃には水深胸部に達する大册河を徒渉し堅固に構築せる陣地に據て頑強に抵抗せる敵を夜襲し兄孝明氏にも劣らぬ奮闘の末敵陣地を奪取したが此戦に前日迄語り合つた兄孝明氏は前記の通り惜しくも壯烈な戦死を遂げたのであつた。戦闘後兄の死を聞いた氏の心中は如何であつたらうか兄と同一部隊に生死を共にすべく誓つた氏は必ずや兄の仇を討つべく堅き決意をしたのであらう。其後十一月九日よりの舊魏縣攻略戦に於ては誠に目覚ましきものがあつた。此の戦に於て氏の所屬中隊は最初豫備隊として前進し九日午後三時柏庄村前線に進出し茲に大隊の左第一線となり舊魏縣城外東

方部落の敵主陣地に向つて攻撃前進に移つた。敵は遂に重機関銃迫撃砲等を猛射したが我が第一線は勇敢な攻撃前進を續け機関銃隊分隊の氏は躍進又躍進敵を猛射して漸次敵を西北方に壓縮した。當時右側前方の敵重火器が威力を逞うしある爲氏の所屬分隊は之を射撃せんとしたるも土地柔軟にして銃脚没して銃を握え難く爲に分隊長は氏に銃位置偵察を命じた。氏は雨下する敵火を冒して銃位置を偵察選定して來た。分隊長は直に其所に陣地を變換して敵重火器を猛射し其正確なる射撃は遂は敵機関銃を沈黙せしめた。依て分隊長は更に前進を命じた其瞬間飛來せる敵の一弾は不幸氏の頭部に命中し終に壯烈なる戦死を遂げた。然かし氏の勇敢なる行動正確なる射撃は敵を混亂に陥らしめ多大の損害を與へ所屬隊は遂に敵陣地を奪取するに至つたので當時に於ける氏の功績は拔群であつた。

噫兄弟相揃て同一部隊に屬して聖戦に従ひ共に勇戦奮闘互に譲らざる殊勳を奏し而して相次で北支戦線の華と散る。壯烈哀惜誰か感激せざるものがあらう。

往昔相共に將義經に任へ殊勳を奏して屍を馬革に裹み忠武の龜鑑として今尙嘆美せらる士に忠信・繼信兄弟あり而も今次聖戦の意義は源平兩氏の確執抗争と比較すべき限にあらず兩氏の赫々たる偉勳は永へに皇軍戦史に輝くであらう。唯夫に別れ寡婦として自分の手懸に育て上げ將來を期待して居た二愛子を亡つた母の心中を思ふ時誠に惻隱の情に忍び難きものがある。然し二愛子は忠即ち孝として一身を君國に捧げて奮戦し満足して瞑目せられた事と思ふ必ずや兩氏の英靈は萬世に生きて皇運を扶翼し奉り又母の多幸を守護するであらう。

兩氏は相揃つて戦死の日歩兵上等兵に進められ勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 室 井 清

氏は栃木縣那須郡黒磯町の人にして大正五年三月一日生れで父を金太郎母をナツと云ひ妻シモとの間に一子アヤ子がある。資性濃厚寡黙にして事を處するに果斷であつた。昭和六年三月黒磯尋常高等小學校を卒業後土に親しむの覺悟を定め農事に精勵し父母を扶けて年々好成绩を收め農村青年の意氣軒昂たるものがあつた。昭和十一年三月黒磯青年訓練所及農高國民學校を卒業し昭和十二年一月現役兵として宇都宮歩兵聯隊へ入營した。支那事變勃發するや坂西部隊に編入せられ勇躍北支戦線へ出動した。

斯くて九月中旬永定河々畔南公由附近の追撃戦闘に於ては大隊本部傳令として主力機關銃隊との連絡に任じ勞苦を厭はず危険を顧みず正確機敏に大隊命令の傳達に任じ以て大隊長の戦闘指揮を容易ならしめた。次で拒馬河々畔の戦闘に於ては北相附近に於て大隊本部と共に敵彈下を渡渉し後數次に亘り敵陣地に突入して勇戦奮闘し又大隊本部と第三中隊とが一時連絡杜絶の際には氏は身を以て本部幹部の掩護に任じ之を安全ならしめた。

大册河々畔王谷莊附近の戦闘に於ては敵は大册河の大障碍を利用し水際には水雷を敷設し河岸には鐵條網及地雷を設け更に其後方には數線の散兵壕を設け連ぬるに交通壕を以てし又入念に鐵條網を設くる等極めて堅固に陣地を占領し皇軍を迎撃すべく待ち構へて居た。氏の所屬部隊は晝間攻撃を以てしては損害大なるべきを察し九月二十一日夜襲を以て此陣地を突破するに決し氏の所屬大隊を第一線となし攻撃前進に移つた。所屬大隊は二十二日午前零時勅上部落を出發し河岸に攻撃準備を整ひ午前二時二十分肅として大册河を渡渉し初めた。敵は早くも之を察知し我部隊に熾烈なる猛火を以て渡河中の友軍を掃射した。此時氏は大隊本部幹部の直接掩護に任じつゝ勇敢に河中に跳込み渡渉點の道先案内に任じたが水際



に到着せる頃地雷に觸れて重傷を負ふた。氏は之に屈せず更に部隊を誘導しつゝ遂に右岸に達したが不幸にも敵の小銃彈の爲遂に壯烈なる戦死を遂げた。其際氏は後を頼む仇敵を討つて呉れの一語を残し絶命した。所屬大隊本部は氏の尊き犠牲に依り渡河を完了し次で大隊主力夜襲の成功を見るに至つた。氏は選ばれて大隊本部傳令となり常に敵身の努力を以て一意任務に邁進し難局に當り益々冷靜沈着敵彈雨飛の中も常に本部要員の楯となり危険地域を通過し完全に誘導の重任を全うした。而して其最後の一語は千萬無量の思を込め苦しき息の下より叫ばれた言葉であらうと察せられる。氏が性格及生立の經歷並に戦場に於ける諸動作に徴すれば肉體は歿しても尙敵を粉砕し聖戦の目的を貫徹せんとする氣魄の躍如たるものがある。是れ定に皇軍々人の精華であり又不滅の軍功として華北戦史に牢記せらるべきであらう。今や護國の神となつたが其英靈は永世に生き皇國を護り又遺族に清き光と力とを授け與へ其多幸を加護するであらう。氏の父は語る「子の親として悲しいが國家重大の秋御國の爲戦死したと思へば何だか俸が立派な忠臣と思はれて日本國に生れた有難さを蘇々と感じます」と氏は亦斯る純眞にして高潔なる父に育まれ而して後尊き御靈となつて父の懐に歸つたのである。「梅の香や姿の見えぬばかりなり」氏の如き清く尊き御靈こそは父祖と共に又子孫と共に永世に生き得べきもので大いなる生命を與へられたのである。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 上松 勝美

氏は群馬縣邑業郡大川村の人にして大正四年五月十日生れで亡父は朋次郎母はのぶと稱し未だ獨身であつた。資性温順にして品行方正且責任觀念に富んで居つた。昭和二年三月大川尋常小學卒業後は家庭に在りて農業を手傳ひ親に孝養を盡した。昭和十一年一月徴兵として高崎歩兵聯隊へ入營し日夜軍務に精勵中支那事變に際會し森田部隊篠宮隊に編入せられ聖戰に参加するに至つた。

斯くて八月中旬以來待命間及輸送間諸勤務に従事し常に積極的に行動し熱心精勵中隊の業務に貢献せる處甚だ大であつた。



九月十二日より同月十四日に亘る間は永定河畔の股家舖及同村附近の戰團に小銃手として參加したが永定河右岸を奪取後岡田將校斥候に屬し附近の敵情地形の偵察に従事した。其後所屬小隊は尖兵となり附近の殘敵を掃蕩しつゝ北村を占領した。十四日夜半は同地に於て約二箇中隊の敵より夜襲を受けたが氏は第一線に在り勇戰奮闘して敵に多大なる損害を與へ其企圖を挫折せしめた。

九月十五日は大隊豫備隊に在りて拒馬河畔宮村鎮附近の戰團に參加し我左側掩護に任じた。九月十六日拒馬河畔駱駝灣附近の戰團に於ては右第一線小隊たりし第一小隊第二分隊に屬し午前十時半行動を起し午後一時より戰團を開始した。所屬中隊が火線を構成するや中隊正面に於て最も猛威を振ふ敵は迫撃砲にして氏は其迫撃砲隊

長の狙撃を命せられた。氏は敵彈雨の中を勇敢機敏に行動し午後二時十五分頃敵前約五十米に進出し敵情を偵察するに迫撃砲小隊長らしき者が村落の東北端土壁上に現はれ觀測しつゝ號令しあるを發見した。氏は直に之を狙撃して射殺した。之が爲敵の迫撃砲射撃は一時中絶するに至つた。氏は爾後敵の十字火を浴びつゝ正確なる狙撃を行ひ敵に多大なる損害を與へ友軍の志氣を鼓舞した。偶々午後二時三十分頃一彈飛來の爲頭部貫通の銃創を受け茲に壯烈なる戦死を遂げた。所屬中隊は爾來奮戰力闘同日午後四時三十分頃敵を粉碎し之を占領し氏等の英靈を慰めた。

噫氏や出征以來赤誠横溢して衆の横視となり永定河畔の戰團開始以來は眞に不眠不休の戰團に參加し或は不順なる天候と闘ひ或は險惡なる地障を克服し敵群集の間に夜間追撃を行ひ或は白晝敵前渡河を敢行し優勢なる數次の逆襲に對して之に潰滅的の打撃を加へ常に献身的奮闘を以て中隊戰團力の發揚に貢献し戰團慘烈を極むるに従ひ益々沈着正確なる射撃を以て重要目標を遂次に制壓した。眞に是れ皇軍歩兵の眞價を發揮し又一般軍人の龜鑑と稱すべきである。今や氏が雄姿に接する能はずと雖其名は皇國戰史に輝き英靈は護國の神と祀られ皇國軍民より限なき感謝を捧げらるゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 野村 義雄

氏は兵庫縣佐用郡平福町平福の人にして父を直太郎母をマサと云ひ大正四年四月四日を以て生れで未だ獨身であつた。性温順にして事に従ひ頗る熱心であつた昭和四年三月平福尋常小學校を卒業し爾來家にありて父を助け農業に従事してゐたが傍ら青年學校に入りて精勵し其の成績良好業に秀でて居た。め後には教官代理を勤むる程であつた。昭和十二年一月

現役兵として姫路歩兵聯隊に入營し四月下士官を志願して合格其教育期間中八月支那事變のため沼田部隊に編入せられ同隊藤原隊第三小隊に屬し勇躍北支方面の征途に上り九月二日より所屬隊が津浦鐵道沿線に沿ひ前進した敵が堅陣と頼む馬廠の攻撃に際しては行李掩護隊員として打続ける豪雨に泥濘出水の連続せる地帯を晝となく夜となく連日連夜名狀すべからざる困苦を排して行軍し能く其第一線への彈藥糧秣の補給をして遺憾なからしめた。續いて滄州附近戰鬪に於ては十七



日黎明所屬隊が沙官屯敵陣地を攻撃するに先立ち斥候の一員として敵陣地の偵察を命ぜられ暗夜危険を冒し敵陣近く迫り敵情地形を仔細に觀察して有利なる報告を小隊長に呈し愈々攻撃前進に際しては誘導斥候の一員として小隊進路を誘導前進し小隊の攻撃遂行に大なる貢獻を爲した。次で十九日雪官屯及豆店の攻撃に當りては雨下する敵彈の下分隊長及小隊長間の連絡に任じ克く其任務を達成したが更に二十一日馬落坡附近攻撃の際も重要な連絡兵を命ぜられた。此時戰場は一面繁茂せる高粱畑にして而かも泥濘靴を没し動々もすれば連絡を失し指揮頗る困難なる状況であつたが氏は斯る状況下にあつてこそ連絡兵の活動すべき時なりと猛烈なる敵火を冒し萬難を克服して東奔西走小隊長の命令意圖を分隊長に傳へ又敵情を小隊長に報告し以て小隊長分隊長の指揮を適切容易ならしめて居た。時偶々の一彈は遺憾にも氏の頭部に命中し終に壯烈なる戦死を遂げたのである。

氏や熱誠にして堅忍難事に處して沮喪せず効を收めずんば已まざるの意氣を藏す。戰場の舉措克く氏の特性を物語つて餘あるを見る。かの敵彈雨注の視身命を鴻毛の輕きに置き一意連絡兵としての任務に粗漏なきを期し萬難を排して機宜の處置に出で小隊長分隊長の指揮を適切容易ならしめ遂に此重任遂行中敵彈の墜す所となる壯烈何を以て較せん。あたら有爲の才を抱きて北支の花と散りしこと恨み綿々として盡きずと雖も氏の拔群の功績は其英名と共に永く聖戰史上に芳を留むるものであつて武人の本懐又之に過ぐるものはなからう。氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 栗林 甚一

氏は兵庫縣宍粟郡西谷村齊木の人にして父を文治母をさく妻をハルエと云ひ明治四十五年二月五日生れ大正十五年三月西谷尋常高等小學校高等科を卒業し後青年學校を修業した。性温順にして操行正しく青年學校在學中も表彰せられて居る。昭和六年現役兵として鳥取歩兵聯隊に入營滿洲事變のため滿洲に出動し守備又は匪賊討伐に参加し内地歸還の後滿期除隊となり功により勳八等瑞寶章を賜はつた。

昭和十二年八月支那事變に應召長野部隊に編入せられ北支方面の征途に就いた。九月十日馬廠附近の敵陣地攻撃に方つては中隊長岸田大尉の指揮に屬し豫備隊として参加したが流河鎮への轉進に方つては彈丸雨飛の間を行動し或は道路偵察斥候として勇敢に行動以て中隊をして迅速に目的地に到着するを得しめた。次いで滄縣附近の攻撃に於ては同じく中隊長岸田大尉の指揮に屬し第三小隊第六分隊輕機銃彈藥手として九月二十日午後十一時行動を開始し北部人合庄附近の陣地攻撃のため中隊は敵前四百米附近に進出した。第三小隊は豫備隊として夜暗に乗じ敵情地形を偵察して中隊の攻撃準備を容

易ならしめた。翌二十一日午後五時攻撃前進に移り敵火を冒して敵前約百米に達す時恰も第一線小隊の決死的架橋班は躍進中にして之が掩護射撃は瞬時中絶を許さざる状況に於て之に協力すべき第二小隊の輕便は敵弾の爲故障を生じ十分なる火力を發揚し得ざりし爲豫備隊たる第六分隊を火線に増加せしめられ同分隊は直に火線につき適切なる射撃を開始せるも射撃位置は敵火に暴露し第二小隊架橋班に對する掩護射撃は困難なるを以て其位置を變換するため氏は猛火を冒して鬼

神の如き早業にて圓匙を以て射撃位置を構築し漸くにして作業を終り分隊長に報告し終らんとせる時不幸敵弾のため左胸部に盲管銃創を蒙り午後七時三十分頃壯烈なる戦死を遂げた。然かし氏の勇敢積極的の行動により第六分隊は輕機銃の威力を遺憾なく發揮し架橋班の作業を容易にするを得た。



氏の芳名や皇軍戦史を飾るべく眞に護國の神と仰がるゝであらう。
氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 栗田 綠

氏は埼玉縣見玉郡旭村の人にして父を源三郎母をアキと云ひ大正四年四月二十日生れで未だ獨身であつた。昭和五年四月旭尋常高等小學校を卒業次で公民科後期青年學校研究科等を修了した。資性温厚にして父母に孝弟に優しく交友の情も濃かであり又頭腦明晰にして在學間の成績も優秀で級長を命ぜられて居た。事に當るや熱誠堅忍貫かざれば息まぬ氣概を有つて居た。尙長ずるに従ひ一家の柱石として家業に精勵し郷黨の模範青年であつた。

昭和十一年一月現役兵として麻布歩兵聯隊に入營し日夜隊務に精勵し其成績良好であつた。同年五月より齊々哈爾にて勤務することとなり七月一等兵を命じられ昭和十二年七月七日以降は支那事變の業務に従ひて天津武清開平等各地に於て活動したが同年八月二十二日外長城附近の戦闘にて名譽の戦死を遂げた。その戦歴の概要は次の如くである。

昭和十二年七月七日支那事變勃發と共に齊々哈爾警備の任に當り同月三十日より八月十六日まで天津附近の掃蕩に参加しこの間武清附近の掃蕩と開平附近にあつた支那保安隊の武装解除を實施した。斯くて八月十七日より開始された外長城附近の戦闘には齊明寺大尉指揮の下にて第三小隊第一分隊の第三彈藥手であつた。二十一日には午後二時行動を開始し午後十一時半大紅溝南方高地のトーチカ陣地に向つて夜襲の際は率先敵陣に突入し壯烈なる白兵戦の後これを奪取した。次で追撃に移るや氏は尖兵たる第三小隊の斥候兵として挺身し土管子附近に潜行して同地附近の敵情を詳に偵知しこれを尖兵長に報告せんとして歸還の途中潜伏しありし敵のため狙撃せられ下腹部に盲管銃創を受けた。然かし氏は之に屈せず尖兵長の許に到り有利なる報告を呈出した後野戦病院に入院せるも加療の効果なく二十五日惜くも病院にて戦傷死した。

抑々外長城線の戦闘たるや支那中央軍は第二十九軍を合して其兵力約二十萬に達し内蒙察哈爾に侵入して我作戦を脅威

せんとするに對し氏の所屬部隊は熱河省方面より大機動を行ひ張家口の北方張北に進出し古來難攻不落と誇りし長城線に近代のトーチカ陣地を構築せる敵の夜襲を以て撃破したのである。されば當時の戦闘は極めて慘烈なる状況を呈し所屬中隊は一時孤立となり敵の包圍を受け危機に陥つた。併し忠勇無双の將兵の決死的奮闘就中輕機第一分隊の有効適切なる射撃に依り敵に多大なる損害を與へ敵動搖の色あるを發見せる氏は速に之を小隊長に報告し突撃の好機を捕捉し得たのである。而して氏が重傷を負ひ衛生兵の看護を受けつゝも小隊長殿！残念です全快してきつと仇を取りますと頗る元氣であつた。

噫氏の忠勇武烈と其尊き犠牲を目のあたり目撃した將兵は深き感激に目を曇らせ陣中の闘志は彌高く高潮した。氏の英靈や不滅に生くべく氏の芳名は皇軍戦史と共に千載に傳へらるゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。



陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 國 清 勇

氏は山口縣玖珂郡愛宕村の人にして父を愛之進母をサオと稱し大正五年二月十二日生れで未だ獨身であつた。性温順にして孝心厚かつた。

昭和五年三月郷里愛宕小學校高等科を卒業在學間優等生を以て通した。昭和五年四月より岩國郵便局に入り同九年二月退局し同年四月大阪市都島自動車學校に入り同年八月同校を卒業した。昭和十二年一月某歩兵聯隊に入營同年三月支那駐屯軍歩兵隊へ編入せられた。



北支事變勃發するや選拔せられて軍輜重隊要員として編成準備作業に勤勞した。斯くて七月十五日軍輜重隊に編入せられ克く上官の命令に従ひ活動した。氏の勤務は主として軍兵器部及軍倉庫より約百二十軒を隔つる通州間を往復し彈藥糶秣の輸送及警備業務であつたが炎熱百二十度又降雨の爲道路泥濘の間を或は輕機關銃手となつて所屬分隊長を輔け或は傳令勤務に服し或は疲勞困憊の心身を驅て自ら歩哨勤務を志願し或は運轉手に事故を生ぜし場合は之に代て自動貨車を運轉する等粉骨碎身常に積極的に任務を遂行した。蓋し報國の丹心燃ゆるが如き純忠の士にして初めて之を具現し得るのであらう。七月二十七日〇〇兵團に對し彈藥及糶秣の補給を行はるゝや山内准尉以下十二名の者が護衛の任に當つた。氏も亦選ばれて其中に加はり輕機關銃手として同行した。斯くて彈藥糶秣を満載せる列車は午後十時三十四分天津を發車した。發車前氏は彈藥糶秣の積込作業に従事し疲勞甚しかりしにも拘らず自ら進んで監視兵となり警戒勤務に服しつゝ輸送に任じた。翌二十八日午前三時三十分坊廓に入るや列車は突如急停車した。同時に列車兩側より約三百名の支那正規兵に包圍せられ小銃輕機重機の猛烈なる射撃を受け剩へ手榴彈を烈しく投擲された。氏は沈着機敏に豫定の部署に就き輕機

開銃を以て右側方の敵に對し猛射を加へつゝ分隊長に敵情を報告した。敵は豫期せざる猛射を浴びてか一時其前進を中止した。其瞬間分隊長の命令に依り三好上等兵と共に列車の右側に下車し射撃を續行中憎くや敵彈飛來右脚部に貫通銃創を受けた。併し氏は「何タソ此位の傷に驚れてなるものか」と叫びつゝ以前に倍し猛烈なる射撃を加へ敵に多大なる損害を與へ以て其心膽を寒からしめた。折しもあれや敵の自働小銃彈霰の如く集中し來り前額部及顔面に十數發を受け無念と叫んで悲壯の戦死を遂げた。時正に二十八日午前四時三十分である。噫寡兵克く數十倍の正規兵に對抗し殘者少き戦友の志氣を鼓舞しつゝ遂に之を撃退して完全に軍用列車護衛の重任を果し得たるは實に氏の勇猛果敢なる奮闘の賜であつた。本列車に同乗せる岩井兵站司令官は當時を回想してあの際輻重隊の奮闘努力なかりせば列車の運命は全滅の外はなかつたと感無量を以て嘆賞して居る。國軍の精華何ぞ夫れ壯烈勇武なるや殉難の英魂何ぞ夫れ崇高誠忠なるや今や其人亡しと雖版々たる月夜に一きわ白く輝く白菊の姿にも似て皇國を思ふ國民に清く芳ばしき光と薫とを投げ與へてくれるであらう。宜なる哉即日歩兵上等兵に進級し勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はりたるや。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 楠本 秀 雄

氏は鳥取縣東伯郡高城村大字服部の人にして父を正憲母をふさと云ひ大正六年一月二十五日生れて未だ獨身であつた。昭和九年三月縣立倉吉農學校を卒業更に同十一年四月縣立實業試驗場研究科に入り同年十月卒業した。資性快活包容力に富み人と争はず平素精神修養に志し父母に孝養の誠を盡し入營後も農繁期に歸郷せば終日農事の手傳をなし氏神社又は祖先の墓地に参拜するを常とせるが如き其一端である。又氏は身長五尺二寸餘の小兵なりしも全身の筋肉緊張し力強く相

撲には相當の技倆を有し勝敗は別とし其の取り口は頗る鮮やかであつた。又或時は青年會の催せし家族慰安會青年芝居に参加し固有の快活性を發揮して花形役者となつた如き半面を持つてゐた。昭和十二年一月現役志願として松江歩兵聯隊に入營し日夜軍務に勉勵其成績良好にして特に射撃に秀で大隊長より賞狀を授けられた程であつた。昭和十二年七月支那事變起るや福榮部隊に編入せられ勇躍北支方面の征途に就き津浦沿線に添うて前進し九月三日大祁庄附近攻撃には當初豫備



隊にありしが後第一線となり敵の退路に突進し多大の損害を與へ翌四日引續き豐庄附近の攻撃に参加した。當時所屬隊は第一線で在つたが氏は平素射撃に巧なる爲敵の幹部等狙撃を命ぜられた。此命を受くるや氏は敵の猛火を冒し屋上に登り有効正確なる射撃を行ひ偉大の効果を收めた。又翌日中隊が第二線となり燒野盆の敵を攻撃するや氏は所屬分隊長と小隊長間の連絡を命ぜられたが當時敵は掩蓋を有する堅固なる陣地に據り加ふるに馬廐川の堤防を切斷せるため敵陣地前は泥池と化して水深膝を没し彈丸は亦雨下する狀況下に所命の連絡任務遂行は頗る至難であつたが危険と困難を顧みず勇敢機敏に克く其任を全うして居た。然るに不幸敵の一彈は氏の腹部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂げた。然かし此の困難なる狀況下に氏の連絡は如何に小隊長分隊長の指揮を適切容易ならしめたか。其武勳は偉大であり拔群と謂うべきである。噫氏今や北支の華と散り其聲暖に接する能はざるも氏の赫々たる武勳は永く皇軍戦史に輝き其芳名は千古に誦はれ其英靈は不朽に生きて皇國を守護するであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級次で功に依り勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍工兵上等兵勳八等功七級 倉 重 傳

氏は山口縣防府市中關上町の人にして父を教助母をスエと稱し大正六年十月六日生れで未だ獨身であつた。性温厚にして青年學校長より模範青年として表賞された。

昭和六年三月尋常小學校を卒業後直に青年學校に入學し精勵恪勤入營時に至つた。



昭和十一年一月十日現役志願兵として電信第二聯隊へ入隊し同年十月三十一日支那駐屯通信隊要員を命ぜられ〇〇電信所に勤務して居つた。七月八日北支事變勃發するや軍通信要員として天津に移り晝夜兼行有線建築作業に従事した。當時は有線通信の最も繁劇なる時期で日々回線の増加變更の必要もあり又相續いて生ずる線路の故障乃至は人為的の妨礙に依る故障の恢復作業の爲氏は屢々危険を冒

し献身的の努力に依り克く重任を全うし以て作戦上に貢献せる所甚だ大であつた。

七月二十六日には青木大尉指揮の下に郎坊に前進し在郎坊の通信員と共に敗殘兵を驅逐しつゝ、戦闘の爲各所に於て破壊せられたる個所の復舊作業を敢行し以て天津郎坊間の有線連絡を確保した。時正に酷暑期而かも敗殘兵隨所に出沒し諸給

養も思ふに任せぬ状況下に唯一筋に皇軍戰捷の礎石として人知れず勞苦の限りを盡し寡弱なる兵員を以て彈雨の中に斷乎として作業に従事せる氏等の行動こそ崇高なる軍人精神の發露である。

斯くて翌二十七日夜は竹田准尉の指揮下に在りて郎坊通信所の通信手として勤務したが偶々同夜午前二時三十分天津方面の電線斷線の徴を發見し之が處置の憑據を與へたが午前三時突如此通信所は敵機關銃の猛射を受けた。そこで非勤務者は直に銃を執り之に應戦した。氏は任務上電話機の位置を離るゝ能はず敵の猛射を受けつゝ、泰然自若として此危急を黃村に位置せる〇〇兵團司令部へ通報した。此通報の終るや否や黃村方面の通信連絡も不能となつた。茲に氏は忽ち銃を執り奮戦力闘遂に敵襲を撃退した。惜い哉此奮戦の最終期に敵の投げたる一手榴彈は氏の兩大腿部を粉碎し茲に壯烈なる戦死を遂げた。當時戦闘の如何に激烈であつたかは破壊された電話機や通信所の有様を見ても其凄慘を偲ばせるのであつた。斯る劍電彈雨爆裂交錯の修羅場に冷靜林の如く沈着山の如く己が本分の職責を全うしやがて救援裝甲列車の到着を得て完全同地を確保するに至りしは氏の尊き犠牲に依つ處頗る大なるものであつて氏の現生は僅に二十一歳殉難の華と散つたが盡忠報國の魂は彌高く神徳を授けられ護國の神として永世の生命を與へられた。戦死の日工兵上等兵に進級次いで勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上歩兵勳七等功七級 山 村 清 志

氏は鳥取縣岩美郡宇野村の人にして明治四十五年二月二十九日生れで父を勇治亡母をことと云ひ妻つる子との間に一子藤太郎を擧げた。昭和二年三月宇野小學校高等科を卒業し母なき家庭に父を扶け弟妹を慈しみ孝悌の道を盡し長ずる

に従ひ青年支部長となり農事其他の公益事業の中堅として活躍し歸休除隊後は消防員及在郷軍人分會長として精勵し郷黨の重鎮であつた。

昭和八年一月現役兵として歩兵第四十聯隊へ入營し同年二月滿洲派遣を命ぜられ各地に移動して警備並に討伐に従事し同年十二月一等兵に進級し昭和九年五月内地歸還同年十一月善行證書を附與せられ歸休除隊となつた又滿洲事變の功に依り勳八等白色桐葉章従軍記章滿洲國建國功勞章を賜はつた。

支那事變勃發するや長野部隊に召集せられ勇躍北支戰線に出征した。斯くて八月中旬戰場へ到着し森岡中隊の喇叭手として傳令勤務に服し津浦線沿線の諸戰團に参加し炎熱惡路と闘ひ或は飢渴に堪えつゝ克く幾辛酸を征服し劍電彈雨の下を馳驅して中隊長の命令意圖を各隊に傳達する等日覺しき活動を續け九月十三日より同月二十四日に亘る滄縣附近の戰團に於ては所屬中隊が二十一日午後六時攻撃を開始するや氏は熾烈なる敵の十字火を冒し巧に地形地物を利用し又夜暗の困難にも拘はらず熱誠勇敢に小隊との連絡に任じ常に中隊長の戰團指揮を容易ならしめた。特に午後十一時人合庄西北側の突角陣地に對する夜襲敢行に方りては氏は率先陣頭に立ち猛烈果敢に敵陣地に突入り頑強なる敵を撃破して之を占領し且つ午後十一時四十分頃優勢なる敵が包圍逆襲し來るを逸早く發見して之を中隊長代理に報告し以て中隊主力をして速に之に對抗せしめ敵に多大なる損害を與へて之を撃退せしむるを得た。翌二十四日午前四時所屬中隊が敵主陣地に突入するや敵亦猛烈に銃砲火を射注ぎ凄慘なる修羅場と化したるも氏は神色自若豪膽不敵の行動を以て敵前五米に肉薄せしが惜くも敵の投擲せる手榴彈の爲左胸部に爆創を受け茲に壯烈なる戰死を遂げた。

噫氏の責任觀念の旺盛なる每戰克く迅速確實に中隊長の命令意圖を各隊に傳達して其戰團指揮を容易ならしめ又中隊長と共に敵陣地に突入するや常に兼に先ち奮戦力闘勇武を發揚し又慧眼克く戰機を看破して適時重要なる敵情を報告し以て中隊の危機を免がれしめた。是れ獨り中隊指揮班員の模範たるに止まらず一般軍人の龜鑑として推賞すべき者である。今や聖戰の尊き犠牲として肉體を歿したが氏が英靈は尙も活動して皇軍を加護する事であらう。又亡き母の許に赴き共に大いなる功績を語り且遺族の多幸を護り添へるであらう。氏は皇軍戰史に牢記され其勳功は不滅に語り傳へらるゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵上等兵勳八等功七級 築 瀨 實

氏は鹿兒島縣出水郡阿久根町の人にして父を與吉母をクニと云ひその長男にして三人の妹がある。明治四十五年一月二十日に生れ現役を終て除隊後兩親は一人息子のことゝて妻帯を棄めたが考へる所があつて本年は待つて下さいとて聞き入れなかつた。資性温良父母に至孝上を敬し目下を愛撫し朋友に信自己の職業に忠實なること稀に見る人格者であつた。大正十四年三月野田小學校高等科一學年修了後阿久根中等公民學校に入學昭和七年三月同校を卒業し爾後家庭に在つて父母を助けて只管實業に精勵し傍ら青年團のため分隊長又は支部長として盡瘁し後進の指導誘掖に力め衆望を聚めてゐた。

昭和八年一月現役兵として野戰重砲兵第五聯隊に入營し以來教練に勤務に精勵衆の模範となり屢々精勵章を授けられ昭和九年十一月除隊の際は善行證及び「入隊以來攝生を重んじ健康を保持し一日の休務もなく軍務に皆勤精勵せり」との聯隊長より別なる賞状を附與せられ歸郷後は一層家事及び社會のため卒勵の誠を致したのである。

支那事變の勃發するや召集令狀を受領し時こそ來れりとばかり平素の落つきに似ず萬事手につかぬやうな満悦さで家人

に「出征の上は再び生きて歸らうとは思はぬから戦死の通知があつても決して泣いたりなんかして呉れるな」と云ひ祖先の位牌に訣別の拜禮をして更に「もう一つ新しい位牌が近く出来ると思つて下さい」の一言を残して應召松下部隊に編入せられ北支方面の征途に就いた。北支上陸以來は悪天氣と泥濘なる道路のため重砲隊の事とその惱され方は一入甚だしく砲兵の威力を發揮すべき機会に恵まれなかつたが克く困苦缺乏に堪え難路を突破し十一月十三日には廣平附近の敵を撃破して十五日早朝部隊は候村鎮を出發し午前八時半頃邱縣南方に到着し下元部隊に屬して邱縣城の攻撃に移つた。



松下部隊武智隊は邱縣城東南角城壁破壊の任務を受け初めは敵前二千七八百米の陣地に於て砲撃を開始し後敵前千二百米に陣地を變換し毎發有効なる射弾を送つたが城壁前の家屋の爲め城壁破壊程度が歩兵の突撃に支障なきか否かの點につき不明な憾みがあつた丁度此時敵陣地の偵察に出で歩兵第一線にゐた森永少佐は逐次前進して城壁附近に到つた。氏は通信手として森永少佐に追隨して部隊本部との間に通信線を架設して連絡を保持し時々適切なる前方の状況を報告し武智隊の射弾をして益々精確所望の破壊を完成するに資し遂に突撃路を開闢するに至つた。此間敵は城壁より猛射を加へ弾丸は文字通り急霰の如く其敵火の下にありて氏は其任務に奮闘し歩兵部隊と共に東南角に向つて電話線を架設しありしも途中電線の不足を生じたため通信掛下士官岡軍曹と二名にて運傳により城壁前三十米突の地點に於て連絡中午後零時十分頃飛來せる敵弾のため惜しくも頭部及腰部に二弾を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。

敵前至近の距離に前進して敵狀及射撃観測に關し有効適切の報告を爲した事は我が突撃路完成の素因にして延いて邱縣城奪取に到らしめたもので其功績は拔群である。

氏は子として兩親に仕へ夢にも口答へをなさず又父が町村の有志と伊勢參宮に出掛けやうとした時自己に引當てられたる費用を割いて是非母を同行せしめられたくと申し遂に兩親打揃つて伊勢參宮を遂げしめたやうな親思ひで三人の妹に對して實に優しき兄として叱言がましい言葉を口にした事もなく又友人に對して親切で交際は圓滿小學校以來一度も人と喧嘩口論をした事もなく公共事業には率先従事し黙々として誰よりも一番よく働いた。一たび軍に従ふやその任務に忠實で奮戦奮々たる武勳を樹て所謂草むす屍となつた。温和にして寡言實行の神々しい風采は眼前に髣髴たるものがある氏は忠にして孝良民良兵として軍民の輿論でその武勳は赫々として青史に輝くであらう。

氏は即日砲兵上等兵に進級大い動八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 山仲登志雄

氏は東京市足立區千住宮元町の人にして父を喜平治母をせいと稱し大正五年一月九日に生れ未だ獨身であつた。昭和三年三月千住第一小學校を了へて府立第七中學校に入學同九年三月同校を卒業し間もなく淺草郵便局通信事務員を命ぜられ勤務中昭和十二年一月入營の爲退職した。資性温和寡言にして一度口外した事は絶對に後へ退かぬ剛毅な所があつた。併し其半面涙もろく嘗て在滿中戰友の一人が隊より支給される給料を郷里に於て軍事救護を受けてゐる母に送金するを見て氏はいたく同情し日用品或は小遣を分け或は日曜日等はその戰友と共に外出して彼を慰めて隱徳を施すと謂ふ人兩親は

兄弟中一番將來立身し得るものと期待をかけてゐたとの事である

昭和十二年一月現役兵として歩兵第三聯隊に入營暫くにして滿洲に派遣せられ洮南附近齊々哈爾附近の警備に任じ七月十一日一等兵に進んだが此時支那事變勃發し湯淺部隊に屬し北支方面の征途に就いた。斯くて八月二日には天津に至り同地附近殘敵の掃蕩に日夜努力し次いで八月十三日よりの外長城線戰鬥に於ては村澤隊第三小隊第一分隊小銃手として参加



し八月二十一日長城線攻撃の際氏の所屬隊は伊藤中尉の指揮を以て歩兵砲中隊に配屬せられたが歩兵砲中隊は友軍砲兵と共に本道西側「オ」望樓に對し猛烈に制壓射撃を行ひ爲に敵動搖の徴あるや氏は所屬隊長の號令に奮然同高地に攀登突撃し殘敵を刺殺して午前十時該望樓を占領し同時にチエツコ機銃一小銃二同彈丸二千發を鹵獲し茲に初めて秦の始皇帝の遺業たる萬里の長城に日章旗を翻したのである。此望樓占領に就ては所屬隊は後に部隊長より機敏なる占領なりとて激賞を受けた程である。續いて萬全附近の戰鬥に於ては所屬隊と共に二十三日未明夜襲を以て水魁附近の敵を一蹴し更に八月二十五日揭家庄附近の戰鬥に於ては小浦部隊の右翼掩護の任務を有する第二分隊員として揭家庄西南に進出し優勢なる敵の彈雨を冒して猛撃を加へた。然るに敵は我に數倍し遂に我を包圍し爲に氏の分隊は惡戰苦闘三時間餘に及んだが氏は克く分隊長の命に従ひ沈着正確なる射撃を以て敵に多大の損害を與へ遂に敵を撃退した續いて翌二十六日には榮ある尖兵分隊として最前線にあつて敵を急追し老鴉生に據れる敵を攻撃して同地を占領し息つく暇もなく敗敵を追撃し張家口を経て

九月七日には天鎮附近に進出した。

續いて陽高附近の戰鬥に於ては村澤大尉の指揮下に第二小隊第一分隊にあつて九月八日午前九時三十分行動を起し同夜陽高城近く迫り高田分隊長を輔佐して頑強に抵抗する敵に對し一進一止勇敢にも敵の東門前三四十米に近迫した。然るに東門上の敵は俄然手榴彈を投げつゝ猛烈に逆襲し來た。此時氏は直ちに猛射を加へたる上勇敢にも奮然躍り立つて敵前約十五米に達し手ごわき奴ばらを猛撃して多大の損害を與へたが此時不幸敵手榴彈のため兩下腿及び兩足に其破片創を受け陽高城奪取を目前に控へ思ひを東門に遺して張家口關東豫備病院に收容せられ間もなく華北の華と散つた。

噫氏は中學校も卒業し剛毅堅忍而かも義侠心に富み兩親も兄弟中一番立身するものと期待をかけられて居た。然るに今や華北の華と散り其兩親の心中を懐ふ時誠に惻隱の情に忍びざるものがある。

然かし氏の赫々たる殊勳は永く皇軍勳史に輝くのみならず其靈魂は永へに生きて皇運を扶翼し奉り又氏を期待して居た兩親の多幸を加護するであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 山根俊明

氏は大正五年一月五日島根縣大原郡海潮村大字湯石に生れ父を金右衛門母をキタと謂ひ氏は未だ獨身であつた。昭和五年三月海潮尋常高等小學校卒業同六年四月同村青年學校へ入學し同十一年三月同校卒業資性温良にして順朴父母に仕へて孝養を盡し弟妹を愛撫慈育し母を助けて家業に精勵し隣人の賞讃を受けて居た。昭和十二年一月現役兵として松江歩兵聯

隊へ入營同十二年七月二十七日福榮部隊に屬して征途に就き同年八月二十九日より二堡王口鎮東子牙鎮附近の戰闘には第一小隊擲彈筒手として參加し九月三日大遼舖を攻撃するに當りては彈雨の中に砲兵の通過を掩護し薄暮東子牙鎮を占領するや敵火を冒して至嚴なる警戒をなし同地を確保した。斯くて九月六日劑莊の敵を攻撃するに當りては中隊が幾多の水潦及泥濘地區を越へて敵彈下を前進するに際し氏は沈着剛膽敵の集中火を冒して挺身し擲彈筒を猛射して小隊の突撃を容易ならしめた。



同年九月十一日中隊は左先遣隊として東辛莊に進出を企圖するや氏の屬せる小隊は黎明を利用し堤防に沿ふ地區より敵の警戒地に突入して之を奪取したが其際氏は擲彈筒手として小隊長の許に在り率先勇敢先頭に立ちて敵中に突入し之を奪取した。敵は五十米前方並に對岸の第二陣地に退きて我を猛射した。此時氏は對岸に敵の掩蓋自動火器を目撃するや直に猛火を冒し之に擲彈筒を猛射して制壓し以て小隊の前進を容易ならしめつゝ奮戦して居たが偶々敵の一彈は氏の心臓部を貫通し遂に其場に壯烈なる戰死を遂げた。

因に所屬中隊長並に戰友の來信を綜合して氏の戰歿前後の状況を補足すれば九月九日夜所屬中隊は鄭莊に達し宿營し翌十日は小河の敵を攻撃すべき命令に接した。其夜氏は第二小隊より選ばれ他小隊より選出されし各一名の傳令と共に東子牙鎮の本隊に派遣された。珍らしくも戰場の銃聲絶え高粱畑の彼方にはみかづきが出て長閑な夜であつた。戰友等は明日の戰闘を豫想しつゝ往復二里子牙河の堤防に沿ひ午後十時使命を達し宿營地に歸へつた。翌十日は午前四時起床前進する

事八軒敵前五百米に達するや早くも敵の猛火を浴びた。當面の敵兵力は約五百迫撃砲重輕機關銃及擲彈筒の多數を有し堅固なる陣地に據りて頑強に抵抗した。第一小隊は子牙河を右翼に托して展開し其左翼に第二第三小隊を展開して前進したが敵前三百米に達するや子牙河對岸に現出せる敵の側防火を受け遺憾ながら前進至難となり壕を掘りて一夜を徹するに至つた。翌十一日拂曉より攻撃を再興したが又もや對岸の側防火器の猛射を受け前進困難となつた。茲に於て擲彈筒を以て該敵を制壓すべき命令が出た。氏は勇躍之に任じ多數戰友の期待を擔ひつゝ射撃を初めた。一發又一發正確なる射弾は物凄き爆發と共に敵の側防火器を制壓し今や第三彈を發射すべく身構へし刹那不幸にして敵彈の爲心臓部に貫通銃創を蒙つたのであつた。併し氏の勇敢正確なる射撃に依り敵の側防火器を鎮壓し堰止められし友軍の前進を大に容易ならしめ光輝ある戰捷の基を拓いたのである。洵に是れ拔群の功績と謂はねばならぬ。

噫氏は入りては孝悌鄉黨の模範となり出ては忠勇軍人の龜鑑となり尊き一生の幕を閉ぢたが今や生死を超越せる大生命に生かされ遺族に將た鄉黨に將又一般軍民に常に盡きせぬ光と力とを授け與へ得る護國の神となつた。氏は即日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 山村 諭

氏は宮崎縣西諸縣郡高原村の人にして明治三十三年五月二十一日生れで父は源左衛門母はアグリと稱し妻サヤとの間に長男茂以下二男三女の愛子がある。

明治三十九年四月郷里の小學校へ入學したが貧困の爲尋常二年修業後退校し爾後獨學に依り勉學した。氏は至誠篤實の

人にして義務心厚く責務の存する所之を貫かざれば息まざるの氣概があつた。されば氏の奉職せる諸官署の上司並に僚友知己間に好評噴々たるものありて到る處に於て愛敬せられた。氏は自己の境遇の過去を回顧して言偶々子女の教育に及ぶや自分は不幸にして無學であるがせめて子供等には如何なる苦勞をしても人並の教育を施してやりたいと切なる父性愛を漏らして居つた。果然長男茂は小學校入學以來操行善良學術優等にして毎年表彰を受けた。斯くて精神上にも學術上にも

將た體育上にも優秀なる第二國民を造り上ぐる氏の努力こそは眞に上階下に對し奉りても下先祖代々の御靈に對しても忠孝兩全の尊き姿であつた。

大正九年十二月徵兵として歩兵第六十六聯隊に入營同年九月天津駐屯歩兵隊要員として渡支翌十一年十一月歸休退營となつた。氏の軍務に服するや終始一貫誠實にして他兵の模範でもあつた。

日支事變勃發するや昭和十二年八月二十九日勇躍應召した郡司部隊沼田隊に屬し江南の戦線に赴いた。斯くて九月二十一日唐家橋の戦闘に参加し第一線兵として敵情搜索に任じ機敏に敵の重機關銃及輕機關銃の位置を報告して中隊の攻撃指揮を容易ならしめ又十月九日乃至同十三日間王家屯孫家宅方向の追撃戦闘に於て氏は中隊豫備隊要員として分隊長を輔佐し困苦を排し常に分隊の誘導に努めた。



十月十四十五兩日は齋家宅附近の戦闘に参加した。即ち十四日午後八時三十分行動開始午後九時第一次の夜襲を行ひ同十時待機其夜午前三時半第二次の夜襲を決行した。當時氏は第一突撃隊員として午後九時敵の猛烈なる側射を冒して勇躍

前進し齋家宅の北端を占領した。續いて同夜午前三時半黃家宅の敵陣地に對し突撃を敢行せらるゝや氏は敵陣地の障礙物を排除し突入を容易ならしめ次で敵の第二線陣地に對し猛烈として突入し遂に之を奪取した。更に敵の後方陣地に近迫するやクレーク及鹿野生籬に阻止せられたが氏は突撃路搜索の爲死力を盡し奮勵した。然かし當時敵は重火器を以て前方及側方より我を猛射した爲に終に氏は腹部其他に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げたのである。噫氏は既に後備役の最終年限に達し一家の柱石として家政を治めつゝありし者であつた。されど全服役を通じて燃ゆるが如き軍人精神を發露し劍電彈雨の下身を忘れ家を忘れ唯一筋に君國の爲清く尊く身命を捧げ江南戦線の華と散つた。だが其拔群の軍功は軍人の龜鑑として將た護國の神として末永く仰がれ後世に語り傳へらるゝであらう。即日歩兵上等兵に進級し勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 山田 宗 次

氏は群馬縣邑樂郡赤羽村大字赤生田の人にして父を島太郎母をナホと云ひ大正五年十一月十九日を以て生れ未だ獨身であつた。性質温良にして孝悌寡言にして剛膽であつた。昭和六年三月赤羽尋常高等小學校を卒業直に赤羽村青年訓練充用實業補習學校に入校同十一年三月同校を卒業した。翌十二年一月高崎歩兵聯隊に現役兵として入營精勵格勳六月一等兵に進み昭和十二年八月事變のため森田部隊に屬し北支方面の征途に上り八月二十八日より九月十二日に至る輸送間は荷物宰領監視或は使役に服し勉勵よく其任務を全うし九月十三日より同十四日に亘る永定河畔股家舖附近の戦闘に於ては鶴田將校斥候員として危険を冒し敵情地形の偵察に任じ重要な報告を傳達する等其の功績は顯著であつた。更に九月十五

日より翌十六日に亙る拒馬河々畔望海庄附近の戦闘に於ては小隊長鶴田少尉の指揮に屬し擲彈筒分隊員として十六日午後零時三十分行動を開始し午後二時三十分可西務附近の敵に對し戦闘を開始したのであるが敵は村落圍壁内「トーチカ」式掩蓋を有する側防火器を以て縱射せるため中隊の攻撃意の如く進まず茲に於て分隊長より該側防火器を射撃する號令下るや敵の熾烈なる十字火を受けつゝ沈着正確なる射撃を実施し右小隊と協力して敵側防火器の撲滅に努め我小隊の前進を容



易にし爲に同小隊は攻撃前進に移り敵前百米の柳林に入つた。茲に於て分隊長は擲彈筒陣地を一躍前進する事を命じた。此時氏は敵の十字火を受けたるも毫も意とせず勇敢に新陣地に前進し沈着正確なる射撃を續行し此くて右小隊は敵前至近の距離に近迫せる爲め分隊長より目標變換を命ぜられ直に可西務の陣地に對し射撃を轉向し盛に突撃準備射撃をして居たが此時偶々敵彈頭部並に左胸部に命中し壯烈なる戦死を遂げた。然れども氏の沈着正確なる射撃により敵の側防火器は撲滅せられたのである。氏の正確なる擲彈筒射撃は彈着毎に偉大なる炸裂に依り敵は四散を飛散して驚るゝ者あり或は恐怖

心に襲はれ陣地より逃げ出す者もあつて全く敵の戦意を失はしむるの概があつた。

氏や家庭に在りては温良なる孝子であり軍に従ひては剛膽よく既得の武技を遺憾なく發揚し忠誠の進る所毎戦績々たる武勳を樹て皇軍歩兵の眞價を顯現した。是れ寔に皇國軍民の鑑であり其不朽の功績は千古に光彩を放つてあらう。又氏の英靈は護國の神として仰がるゝのみならず尙も活躍して皇國を護り又遺族の將來を擁護するであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 山本直市

氏は兵庫縣明石郡押部谷村の人にして亡父を勇治郎母をミツと云ひ妻ふさとの間に一男を擧げた。大正元年八月十日の出生で資性快活正直にして犠牲的精神に富み進んで難局に當るの美風を有して居た。大正十四年福住尋常高等小學校を卒業し爾來家業に従事しながら押部谷青年訓練所に修學し昭和八年一月現役兵として歩兵第三十九聯隊に入營翌二月滿洲事變の爲同地に派遣せられ各地に轉戦治安の維持に貢献する所多く功を以て昭和九年四月勳八等に叙し白色桐葉章を賜はり同年十一月内地歸還の上滿期退營した。除隊後は一層家業に勉強し在郷軍人分會等に盡力してゐたところ昭和十二年七月支那事變勃發し應召沼田部隊に編入せられ勇躍北支方面の征途に就き八月二十五日から馬廠附近戦闘には山内隊第二小隊第一線分隊員として先づ小王莊攻撃の初陣に勇奮奮闘堅固なる同陣地を攻略し次で滄州附近の戦闘に方りては九月二十一日所屬本部隊第一回夜襲の際所屬中隊は敵の一據點たる王庄子を攻撃し該方面に敵を牽制するの命を受け此時氏は中隊主力と共に泥濘を渡する出水地域を前進し敵前三百米に迫り優勢なる敵と泥水中に交戦對峙して苦戦すること三日完全に敵牽制の目的を達し以て部隊主力方面の夜襲を容易ならしめ次で所屬本部隊第二回夜襲の際中隊は不眠不休の後を承け初め部隊の豫備隊として敵陣地前約五百米の位置に於て軍旗並に部隊本部の直接掩護に任じありしが第一線部隊に續いて敵銃砲火を冒し堂々敵陣内に侵入し繁茂せる高粱と泥濘の如地を猛進し東天漸く曉を告ぐる頃目指す新庄の部落を眺めつゝ軍旗を護衛して一意急進を續け第一線部隊が漸く張新庄部落を占領せんとする頃突如右方部落方向より軍旗を擁せ

敵の大部隊は逆襲し來つた茲に於て中隊は直に第一線の右翼に連繫して該敵を邀撃した。此時氏は中隊の左第一線小隊にあつて勇戦能く努め敵は我が猛撃に周章狼狽一たび後退を始めたが更に敵は増援を得て勢をより返し再び我に向ひ前進し來た此時氏は高粱の間を縫ひて我を包圍せんとする敵を求めて正確なる狙撃を以て犇々と噓してゐたが敵の指揮者と覺しき者を發見「分隊長敵の將校」と叫びつゝ之を狙撃し見事命中之を噓したるも間髪を入れず敵の一弾は氏の胸部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂げた。時に昭和十二年九月二十四日午前八時實に敵前八十五米である。氏は曩に滿洲事變に参加して建國の基礎工作に貢献し支那事變に於て亦數度の戦闘に勇戦殊に張新庄の攻撃戦に方り敵の大部隊の逆襲に會し部隊の運命累卵の危機に瀕せし時奮戦力闘遂に敵をして其企圖を抛棄し退却の已むなきに至らしむる素因を作つた。其武勳は赫々たるものにして永く戦史に輝き其名は千古に芳ばしく譲はるゝであらう。

氏は即日歩兵上等兵に進級次いで勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 矢 木 剛

氏は岡山縣御津郡圓城村大字神瀬の出身にして父を梅男母を靜子と云ひ大正三年八月一日生れで未だ獨身であつた。性温良にして義務心篤く昭和四年三月尋常高等小學校を卒業し同六年青年訓練所に入學したが中途十九歳にして現役志願をなし昭和八年十二月岡山歩兵聯隊に入營翌九年五月滿洲事變のため渡滿警備に任じ酷暑と闘ひ祁寒に耐へ治安維持に盡したる功により勳八等に叙し瑞寶章及び従軍記章を授與せられ昭和十年十月滿期除隊となつた。

昭和十二年七月支那事變勃發するや八月應召赤柴部隊に編入せられ勇躍北支方面に出征した。而して八月二十二日東邊

庄附近の戦闘に於ては良王莊驛に残留し敗殘兵の襲撃に對し後方の安全を擔任して居たが中隊が東邊庄攻撃に移るや危険を冒して駄馬を誘導しつゝ第一線に前進し八月二十七日靜海入城と共に同地の警備に任じ次で唐官屯附近の戦闘に方つては第一機銃中隊第三小隊にありて九月三日午後三時右第一線たる第三中隊に配屬せられ其の左翼に陣地を占領敵との距離四百米の位置に於て對峙し翌四日午前七時砲兵の掩護射撃を利用し敵前百米に近迫し第三中隊の突撃に際しては右側方



に前進して掩護射撃をなし以て陣地占領を容易ならしめ更に退却せる敵に猛射を加へて敵に多大なる損害を與へ追撃を實行した。更に九月七日より同十日に亘る馬廠附近の戦闘に於ては第一機銃中隊第三小隊第六分隊の七番銃手として九月六日第二中隊に配屬せられ午前九時趙官屯を出發したが靜官屯の敵の退却に乘じ直に進出同部落を確保した此時同部落寺院高地より猛射を受け直に家屋を利用し敵の輕機銃を猛射し薄暮戰闘漸く交綫状態に入るに従ひ敵と三百米を間して夜を徹し明ければ九月七日午後五時第一線たる第二中隊に配屬せられ砲兵の掩護射撃下に前進敵前七十米附近より猛然機銃射撃を敵に浴せ以て中隊の突撃を掩護促進し續て其の突入によりさしも頑強なりし敵は算を亂して馬廠河を渡河退却した。此時機銃分隊は機を失せず直に有利なる寺院高地に進出水中を退却する敵に猛射を加へて濺屑と化せしめたる後更に射向を轉じて河の左岸に残存せる敵を猛撃したので敵死屍は累々として河岸に横はり凄慘なる状況を呈した。斯くて部隊の馬廠河攻撃のための據點を確保せしむるに至つたのである。然るに九月八日早朝敵の猛射間に爾後の攻撃を準備するため前

日來の陣地に補強作業中敵弾に頭部を貫通せられ遂に壯烈なる戦死を遂げた。

以上各戦闘に於て氏の勇敢なる奮戦と各員の協力一致により機銃の威力を最大に發揚し殊に敵が長時日を費しあらゆる障碍を施し加えて馬廠河の天險を利用して構築せる馬廠陣地の攻撃に對し非常なる困難と危険を冒して中隊の攻撃を容易ならしめたる功績は拔群にして馬廠陷落と共に氏の功績は永く戦史に輝くことである。

氏は即日歩兵上等兵に進級次いで勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍騎兵上等兵勳八等功七級 矢野 正雄

氏は愛媛縣喜多郡喜多灘村大字黒田中の人にして父を實母をカナメと云ひ大正六年四月四日生れで未だ獨身であつた。性質真摯にして精勵率先垂範郷黨青年の中堅として重きを置かれて居た。昭和七年三月高等科を卒業在學中成績優等にして將來有望なる青年として望みをかけられてゐた。昭和九年十八歳にて現役志願をなし普通寺騎兵聯隊に入營同年七月一等兵に進み同十一年十一月善行證書を受けて満期退營した。在營間成績優良にして精勵章を附與せらるゝ事二回又射撃に長じ聯隊特別射撃に於て其技術優秀の廉を以て賞状を受け歸郷後は益々其家業に精勵し在郷軍人班長文書教育普及委員などを勤め郷黨の爲盡力せる處甚大であつた。昭和十二年八月事變の爲め應召田邊部隊に編入せられ中支方面の征途に就き揚家宅及蘇家宅附近の戦闘に於ては八月二十九日長坂中尉の指揮下に屬し劉河鎮南側にありて戦闘中の歩兵部隊と連絡の任務を帯び朱宅に前進中熾烈なる敵弾を受け交戦し、能く衆に擯んで奮戦した。同年九月五日所屬長坂小隊が西金家宅北側地區に於て戦闘を開始するや午後二時三十分扁家橋にありし約三四十名の敵より熾烈なる銃火を受けたが氏は彈雨を冒し



て率先奮闘し遂に陸家宅を占領し後秋山伍長の隸下に斥候員として陸家宅西側地區の敵情搜索に任じ其傳令として小隊に報告を齎らす途中前方及側方より十字字を受けたるも勇敢機敏に動作し小隊長に「機銃を有する約百名の敵は我に向ひ前進中」との貴重なる報告を呈した。茲に於て小隊長は機銃を機逸せず迅速にに部署を變更し該敵を邀撃して部隊の右側を包圍せんとする敵の企圖を遂に挫折せしめた。而して本戦闘間氏は再び戦線に加入し勇敵敵數名を撃したるも敵前百米の地點に前進し將に突撃に移らんとした時不幸にも頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。

氏や責任觀念旺盛にして如何なる難局に直面するとも決死的行動に依て常に完全に任務を遂行した。又勇敢機敏克く重要なる傳令勤務に服し友軍の危急を救ひ所屬部隊をして赫々たる戦勝を獲得せしめた。噫上官战友の信頼を一身に集めありし氏不幸にして江南戦線一朝の嵐に散り果てたが其勳功は江南戦史に輝き其名は千載に芳ばしく語り傳へらるべく其英靈は不朽に生き皇國を護り又遺族の守護神として尙郷黨の人々にも清き光と尊き力とを投げ與へるであらう。

氏は即日騎兵上等兵に進級次で勳八等に叙し白色掩葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。